現代文訳

落穂集

原作　大道寺友山

享保十二年

第十一巻　―　第十五巻（完）

十一―一　毛利家と小早川家の翻意

九月十四日の晩方長束大蔵と安国寺の両人は大垣城中より南宮山へ帰り、直ぐに毛利宰相秀元の陣へ行き、　貴殿は我々両人を始め当山に布陣する（p332）諸将と相談して夜中に麓へ軍勢を下ろし、明朝に先手と戦が始る頃合を見て内府の旗下へ押掛け一戦するのが良いとしっかり伝える様にと大垣で浮田秀家が言っていましたが、幸い我々が此処に帰ったのでお伝えしますと秀元に伝えた。

その時秀元は両人へ向って、私は若輩ではあるが輝元の名代として此処に出陣している以上輝元と同じ様に毛利全軍の指揮をする立場であり、秀家の指示を請けて一戦を行う筋はないとすげなく突き放した。

そこで長束、安国寺は側にいる吉川の方に向い、宰相殿があの様に云われては合戦直前に作戦に違背される事になり、これは秀頼卿の為になりませんので何とか御同意戴く様に貴殿からも説得されたいと云う。　吉川は聞くや否や安国寺に向って、秀家が云う事を長束殿から伝えられるのは止むを得ないが、貴殿は当家の仲間なのに秀元に秀家の命令に反する等と云うとは何を考えているのかと苦々しく云われ、その後は一言も返す言葉もなかった。

両人は座を立ち帰ったが、さては秀元は吉川等と示し合せて関東方へ味方すると二人共に推察した。　これは兼重勘入斎物語である。

註　毛利家当主輝元は西軍総大将に祭り上げられ大坂に在城、関ヶ原は養子秀元、分家吉川等が布陣するが、吉川は当初から関東方で秀元に不戦を説得したといわれる。

安国寺は毛利家の外交僧で積極的な石田派

筑前中納言秀秋は伏見城攻の時迄は反徒側だったが、関東方(富田信高）の城である伊勢の安濃津城を攻める時、　秀秋を主将とせず毛利家の諸軍勢等と横並びに扱われ、全ては長束大蔵一人の指揮となったので秀秋は心外の至りと思っていた。　又秀秋家老の林佐渡、平岡石見両人は元より反徒側である事に不快に思っていたので、これ幸いと秀秋に進めて病気と言う事にして伊勢より引返して近江の高宮の（p333）　駅に宿陣した。

この事を石田三成が聞伝へ、浮田秀家と大谷吉継の両人へ相談した。　大谷は聞て、此前も度々私が云った様に大事を行う前には小事は慎むべしと昔から言う。　この様な事が起きるのは貴殿達の油断と私は考える。　それは貴殿方もこちらへ来ており毛利秀元も家中の部隊だけを津の城へ向けて自身は参加していない。　それであれば中納言秀秋に寄手の主将として全軍の指揮をとらすべきであった。　ところが同じ奉行職と云っても御存知の通り特別な理由で出世した長束大蔵等が指揮するのであれば秀秋の気持ちはともかく、　先代隆景以来の家老達の身になれば満足する訳がない。　秀秋については自身の器量と云い、若年と云たいした事はないが、　一万に及ぶ大軍と云、特に隆景仕込みの家来も多数居る。もしも秀秋が裏切る様な事態になれば、味方にとっては大きな障害となります。　しかし今に至っては御両人から色々云われても、どうかと思いますから私から思い付く事を一通り伝えましょうと大谷は言う。　秀家、三成もそれはありがたいと云う事になった。

大谷は家老の平塚因幡と戸田武蔵の両人を招いて相談の上、秀秋が喜びそうな事を伝えた。平塚と戸田は高宮へ行き秀秋の宿陣を見舞った。　少々面談したい事があり両人が訪れた

事を伝えると、笹沼兵庫と云う者を通じて秀秋が伝えたの事は、御面談の上お話戴くとの事で御両人が遠路お出で戴きありがたい事ですが、　私は病で今臥せておりますが、何とか気分が良くなれば御面談したいものです。　遠方から御出の事ですから先ず休息下さいと接待の上、林佐渡、平岡石見（p334）両家老が出て秀秋の口上として、御両人お揃いで遠方より御出下さり、何とかして御目に掛りたいのですが気分が悪くそれもできません。　この両人（二家老）は皆さんもご存知の者で、秀秋の事に関しては何でもこの両人に隠す事はありません。委しい事はこの両人にお話戴き、日も既に傾き遠路御帰宅の事ですから御両所は御帰りにのなるのが良いでしょう、　後ほどお話された事を聞きますとの事である。

そこで両人は仕方なく大谷から言い含められた口上の趣旨を委しく話したところ、両家老は、刑部少殿（大谷）には前から秀秋の方へ親しくして戴きましたが、近年は奉行職を辞退されたとの事で秀秋を始め我々も残念に思っておりました。　しかし今回御両所からの親切な御口上があり秀秋へ伝えればさぞ喜ぶ事でしょう。　我々まで忝い次第と思いますので宜しくお願いします、　秀秋も油断なく病気の保養をして江戸内府着陣前に出馬して、御両所が遠方より来られ御内意も戴いた上は益々奉公奉公に励む事でしょうと、真顔で述べるので平塚、戸田両人も秀秋は偽病では無いと考え、今度の一戦に際し御忠節の働きがあれば中納言殿は他の人とは違い、伏見の城攻と今度の戦功と二度の御奉公ですから、必ず評価が上りますと両人が堅く請合った。　これに対し両家老がたいへん喜んだ事を帰って報告すると、大谷は聞いて上出来であると安堵し、筑前家では私も良く知っている林、平岡の両家老さえ同意すれば済む事であると云った。

著者註　この事について、その時代の事を記した書物では、平塚、戸田の両人が高宮の宿陣へ行き、　秀秋が面会に出たら（p335）両人が飛掛り生捕って連れて帰る計画だったが、

秀秋がそれを予想して面会しなかったので空しく帰ったとなっているが、そうでは無くこの時は裏切りをしない様意見のため、大谷が策を持って両人を派遣したというのが咄斎の物語である

註　小早川秀秋（筑前中納言、1582－1602）　秀吉の正室高台院の甥、木下姓、秀吉の養子を経て小早川隆景の養子となる。　隆景(1533－1597)は毛利元就の三男で毛利の実力者であり秀吉の大老も勤めたがこの三年前に死去

十一―二　大合戦前夜

十四日の夕暮れに黒田長政より報告があり毛屋主水と云う者を使者として家康公本陣へ遣わした。　御前での口上を聞き終わると、その後敵の総兵力はどれ程と見るかとの質問に主水は陣屋の縁のかまちに手を掛けながら、私の見積もりでは二三万と思いますと云うので、それは意外に少ないと不審に思った。　その前に徳川家の武将達の見積もりでは皆十万以上は確実な総兵力と報告が上っており、　御前にいた人々も主水の口上と大きな違いがあると思った。　その時再度家康公は、他の者達は十万余りと見積ったが、其方は二三万と云うのは納得できないが、と云えば主水は、仰る通り総兵力は十一二万でしょうが、その中で実際に合戦の相手としての敵は二三万を超えないと思いますと云う。　確かに毛利家を始め、小早川秀秋、鍋島、脇坂等は内通もあり、主水の数字も根拠あると思い当った。

家康公は一段と機嫌よくなり、御前にある饅頭を主水に食べさせよとの事で、側衆が取分けようとすると、折ごと全部と云う事で主水はその折を戴き、縁の踏台に腰を掛けてゆっくりと残さず食べて終わり陣より出て行った。　後であの者の本名を尋ねるべきだったと云われるので、側衆

の中から毛屋（p336）主水ですと言えば、いや彼の本名は毛屋ではない、越前の毛屋と云所で手柄を立て、それ以後毛屋と名乗っていると聞いているとの事である。　黒田家来の主水程度の者迄記憶に留めているとは不思議な事と皆感心した。

著者註　毛屋主水の本名は田原主水と云い、越前国毛やと云う所で大きな手柄を立て、以後毛屋と名乗ったと云う。　黒田長政に属し朝鮮でも活躍し、その後に毛屋武蔵と名乗った由

十四日の夕暮れになり、明日一戦の時全軍の合言葉について、前には山に対し麓、麓に対し山と決められていたが、山は山、麓は麓とする様にと触れがあり、又全軍上下共に左の肩先に角を取った紙を張り、味方同士の相討ちが無いようにと触れられた。

十四日の夜、家康公が手洗いの為に座敷の竹椽へ出た時に、小姓衆は皆聞けと言い、集ると敵陣の山上で燃え続ける篝火を指さし、　あれを見よ、夥しい篝火ではないか、夜が明次第押掛け敵を踏み潰すので、その時は其方達も親、祖父の顔に糞を塗るなと云った。　小姓達は次の間に帰り、今の御意を聞けば血の滴る首を下げてお目に掛るか、さては此方の首を敵に渡すか、二ツに一ツ以外は無いと言い合って夜を明した。

十四日の夕暮れに平塚因幡と戸田武蔵の両人が一緒に大谷刑部少の陣所へ来て云うには。昨十三日の早朝から秀秋方から人足を大勢入れて松尾山の所々の木を伐らせて道を作り、昨晩（P337）には総勢が松尾山に登り布陣しています。　こちら(松尾山）に着陣するという知らせを当然する筈ですがと尋ねた。　大谷はそれを聞き、秀秋は着陣した事は今始めて聞いたし、大垣城中でも聞いていないと答えた。　両人は、やはりそうですか、これで秀秋の裏切りは間違いないと推量します。　理由はこの間両人が高宮へ行った時、早々に秀秋から使者を送り

お礼を申上げますと云うので、多忙の時期ですからその必要はありません、病気が少しでも快復し此方へ出陣されれば良い、　着陣の時には報告の使者を下さいと云った所、家老達はその時は云われる迄もありませんと云いましたが、今その報告もありません。

前にも申上げた通り、秀秋自身は不器量な人であっても一万に及ぶ軍勢を持っており、もしも合戦半ばで裏切などされては味方全体に悪影響が出て重大です。　我々両人は秀秋の陣所へ行き、　秀秋が面会すれば両人の手で打果し、　秀秋が偽病で出て来ない時には両家老打果します。　我々の部隊はその侭陣に残しておきますので、我々が彼らと刺し違えて死んだ場合は、我々の倅庄兵衛と内記を呼ばれ、　秀秋は秀頼公への不忠の者として親達が手に掛け討取った事をお伝え下さいと云う。　大谷はそれを聞いて大に感激して、委細承知した、しかし秀秋の両家老以外の者を相手にして諸君の命を失うのは意味がない。　この点十分思慮する様にと応じた。

平塚と戸田両人は松尾山へ行ったが秀秋は病気と称して出て来ない。　更に両家老は共に今日の事であり、各部隊の点検の為に出かけており両人共に不在との事であった。(p338)
両人共に手を空くして馳帰り、大谷の前へ来て、秀秋の裏切りは決まりました、味方の布陣はその積もりで立て直すべきと言上した。　大谷は聞いて、言語道断の憎き若造めと腹を立てたが湯浅五助を呼寄せて、其方は脇坂の陣へ行き、松尾山に布陣した筑前中納言の行動は理解できない様子もあり、裏切る事も有り得るので、その辺に布陣する朽木、小川、赤座等と相談し様子次第では秀秋の先手へ掛って一戦を始められるのが良い、　我々父子（吉継、大学)、平塚因幡なども同時に押掛けて筑前勢を切崩すであろうと伝えよと指示した。

五助は脇坂の陣へ馳せ行き趣旨を伝えた処、　脇坂は前から関東方へ内通しており、其上秀秋の家老とも示し合せているが、そのそぶりは見せず湯浅に向って、大谷殿からの御連絡は承知しました、どこで骨を折るのも同じですから、此辺に控えている人々と相談して、十分働く覚悟ですとお伝え下さいと返答した。　五助もそれを真実と思い馳帰り報告した処、大谷は五助に、先手へ帰り、大学、山城両人共に若い者であるから十分伝えよ、　又家中の諸侍達には同じ関東勢と云っても黒田、福島、加藤等は手剛い相手だが、縦令多勢と云へ秀秋の軍勢を踏潰すのは易しいと、合戦前に皆に伝えて納得させよと指示した。　これも又咄斎の物語である。

十一―三　合戦の朝

九月十五日の朝、家康公は大垣の岡山を出発して桃配山辺に着陣した時、南宮山の方を見て本多忠勝に向かって、あの山の上にいる敵の様子はどうかと聞くと忠勝は、吉川が味方する事は間違いない様で、合戦が近づいても毛利家の軍勢を山から繰り下ろす様子がありません。其上池田、浅野を始め押えの部隊で堅く備える様に（P339）云われており心配はありませんと報告した。

十五日の朝家康公が未だ野上の桃配山に布陣している時、旗本から斥候として森勘解由と沢井左衛門が二騎連れで先手の方へ進むとと、　石田三成の家来沢田小三郎と乾次郎兵衛と云う二人の偵察に出会った。　石田方両人が森・沢井を目掛て勝負を挑み鑓を構えたので森と沢井も同じく鑓を取直して互に馬を乗寄せた。　其時福島政則の軍使祖父江法斎が双方の中へ馬を乗入れ、偵察の武士は夫々主人の用を担っている以上、自身では戦いはせぬものである、諸君は無益な事をするなと大声で言えば双方物別れとなった。

祖父江も沢井・森と共に家康公の床机所へ行き、敵の模様を報告した序に森、沢井共に鍋島は軍勢を山手へ引上げたのか陣場に人は居りませんと云えば家康公は、私が岐阜に着陣した時内通があったが、さては軍勢を引揚げたか。　それはどれ位前かと尋ねられたので法斎は、今少し前の事と思われますと云えば、　未だ夜の内でありこれ程霧が深いのに如何してそう思うのかと尋ねた。　法斎は、鍋島の陣所の馬糞を取って握り砕いて見ましたが、中は暖かでしたから夫ほど時間は立っていませんと答えると家康公は無言でうなづいた。

著者註　この法斎について家康公は前にも何度か会っており、大坂でも政則に会うと可児才蔵と祖父江法斎は元気ですかと度々尋ねた。　関ヶ原一戦後法斎は旗本へ採用され青山常陸助組に配属し、常陸助の名乗を与えられ青山石見と改名して奉公した。(p340)

十五日早朝に細川忠興と加藤嘉明の両人が相談して、　内府卿の御出馬前に南宮山の敵が下りて来て先手との間を遮断されると困るので早々旗本部隊を進められる様に進言しようと、忠興の家来の沢村才八と嘉明の家来田辺彦兵衛に連絡に行く様に云い付けた。　この二人は、この様な直前になり後の方へ御使いに行くのは困ります、我々は外して下さいと断った。　忠興は聞くや否や、内府の御出馬が無い内に私が討死しては何もならないので、急ぎ連絡する為に其方に命ずるのに同意しないとは、と叱りつけたので才八と彦兵衛は馬で旗本の方へ馳行くと、垂井の宿で井伊直政に行き逢ったのでその旨を伝えた。

直政は、御両所（細川、加藤）の御心付について承りました。　内府も今出馬すると見えほら貝の音も聞こえます。　今云われた口上は私から伝えますので、御両人は陣にお戻り下さい。南宮山辺を内府が通る時は本多中務と私が後を押さえますので問題ありませんので御心配なく

とお伝え下さいとの事で両人は帰って報告した。　間もなく内府卿の出馬と見え旗先が見えたとの注進があった。

註　九月十四日の家康本陣である赤坂岡山から中仙道で垂井迄五ｋｍ、関ヶ原迄迄更に五ｋｍ

十五日の朝家康公が桃配より関ヶ原へ陣を進める時、井伊直政は手勢を率いて先手の方へ押通った。　本多中務は徒侍十人計連れて馳せつけ、貴殿は先手の方へ部隊を進める様だが何故か、小山の会議でも指示された事でもあるが、私への断りもなく貴殿の部隊だけが進む事は納得できぬ。　私の部下も呼びに行かせるので彼らが来るまで此処で待たれよと云う。直政は聞くや否や、私は下野守殿（松平忠吉）を（p341）を案内して先手の様子を見せよとの家康公の指示で来たのである。　貴殿と諸事相談する様にという小山での御意は昨日迄の事ですと返答した。　忠勝はとんでもないと顔色を変え、小山での指示を昨日迄とは私は聞いていない。　それはとも角貴殿の部隊だけ先へ行かせる事はできぬと口論となった。そこで犬山城の加勢に行き、直政を頼って降参した関長門守がこの時も直政と共にあったが両人の中へ馬を乗入れ、皆さんは内府公の為に専ら忠義を尽すべき方には似合わぬ事です。　直政は下野守殿を連れて先へ行かれると良い、私は中務殿と共に残りますと仲裁をしたので、直政は先へ行く事ができた。

更に福島政則の陣脇を通ろうとした時、政則の物頭可児才蔵と云う者が馳付けて馬より飛下り、鍵鑓を横に構え、今日の先手は左衛門大夫(政則)より外には無い。　誰が軍法を破って先へ出るのかと押し留めた。　直政は、私は井伊兵部です。　敵の様子を見てくる様にと内府から云われているので通るのですと返答した。　才蔵はそれを聞いて、偵察に行くならご自身で通られよ、部隊を連れて行く事は成りませんと断る。　そこで部隊は木俣右京に指揮を預けて

下野守を連れ馬上の侍二十騎計り連れて進んだ。　政則の方も一戦の準備で忙しい時であり、その隙に直政の家中の者も馳せ出し追いついた。

十五日朝の八時頃迄は桃配山に家康公は布陣していたが、　本多三弥が来て、今少し先へ部隊を進められるのが良いでしょう、是では余りにも敵の間が遠いですと云った。　家康公が、口脇の黄色い者が余計な事をと言うと（p342）三弥は後ろに廻り、いくら口脇が黄色くとも遠いものは遠いと独り言を云った。　其後福島政則や黒田長政など始め先手が一戦を始めるので、早々旗本部隊を先へ詰められるのが良いと云うので、関ヶ原へ旗を進めた。　しかし敵味方でにらみ合互に鉄炮を放すだけで、どの部隊もこれという戦闘の様子がない。　そこで旗本のほら貝を合図に旗本全軍が鬨の声を揚げると、同時に福島と黒田両家の先手が突き掛り合戦が始った。

註　本多三弥（正重 1545 - 1617）　家康の三河以来の家臣、本多正信（家康家老佐渡守）の弟

著者註　この時の旗本の鬨の声に関して、私が若い頃浅野因幡守の近習で島村清右衛門と言う者が私の養父の所に来て、小木曽太兵衛を呼出し関ヶ原合戦の朝の旗本全軍で鬨の声を揚げたと云うのは本当か、一声と云う説もあるが実際は如何だったか尋ねた。小木曽の答えは、野上(桃配山付近）から関ヶ原に旗本軍が移動すると御徒衆が来て私達の頭へ何か伝えて走り通りました。　その後で頭達が側へ与力衆を呼び、旗本で貝の音がしたら全軍鬨の声を三度揚げる様にと御触れがあった、　その様に心得よとの事で皆その積もりでした。　暫くして貝の音がありその侭鬨の声を揚げましたが、始めの声はしどろもどろに聞こえ、二度目は大体揃い、三度目の声は大きく聞こえ渡りました。以上三度で、私なども鉄炮組で鬨の声を上げました。

清右衛門は又、其朝合戦前に先手衆の陣が崩れて旗並みも乱れたとも云うが、その様な事が有ったかと尋ねた。　小木曽は、確かに先手衆か二三番手でしょうか（p343）誰殿の陣か分かりませんが、旗並みが乱れた陣が二つ程見えましたが、程なく又元の様に旗も直りました。　後日に聞いた事ですが、福島大夫殿が備前中納言殿の部隊へ切掛かるとの事で夜中から急に陣構えを立直すので、これは大夫殿が裏切ったかと思われ，前述の様な騒ぎになりました。　しかし福島殿の先手の足軽共が備前軍に烈しく鉄炮を打出したのを見て、懸念は解消したそうです。

福島殿については、とても関東方に味方する人では無いと当時江戸では貴賤共も予想して居ましたが、岐阜城攻めで大きな成果を上げられたと聞き諸人の予想とは違いました。と小木曽が語るのを清右衛門は覚書にして、これを殿に申上げると云って帰ったのを私は覚えている。　酉年の大火の二三年も前の事である。

註1　酉年の大火は1657年で友山が十七歳の時であり、上は十四五歳の頃の記憶となる

十一―四　合戦諸将の人間模様

其一　小早川家への問い鉄炮

家康公も関ヶ原に陣を進め先手の各部隊は既に合戦を始めたが、筑前中納言秀秋の軍勢は松尾山に登って静まり返り裏切りなどする様子がない。　家康公もかなり不審に思っている処へ大保嶋弥兵衛が先手より馳せつけ、筑前中納言は事前の打合せを変更した様子に見えますがどうした事でしょうと云うので家康公も、さてはせがれめに諮られかと頻りに指を噛むが、其方行って秀秋の陣がある松尾山の上に鉄炮を放し掛けて見よとの事である。　弥兵衛が馳せ

行き先手の物頭布施弥兵衛へ指示を伝えた。　布施は組の同心を連れて松尾山の麓へ近寄り鉄炮を打掛けた処、予想通り筑前勢（p344）はそれ以後色めき立ち軍勢を麓に下ろした。

同じ頃だろうか、黒田長政から秀秋の陣に付けて置いた大久保猶之助と云う者も、平岡石見の側へ寄り具足の袖を捕まえ、　既に合戦も始ったのにこの軍勢は裏切りの様子も無いのは如何した事ですか、　万一黒田甲斐守と約束された事を変える様な事があれば、若宮八幡に賭けて此処で今貴殿と差し違えをすると云い脇差の柄に手を掛けた。　石見は少しも騒がす、私は今潮目を見ている所です、甲斐守殿と一度約束した事を変えるものですかと云った時に、布施弥兵衛が放させた鉄炮の音が聞へると同時に集めて置いた使番役の侍共一度に招き寄せて、今日の一戦は訳有って裏切りをするので先手の物頭、番頭の面々に確実に触れよ、部隊毎に進退の様子共に諸君が見分する様にと指示した。　使番の侍等が各部隊へ馳廻り連絡すると筑前の軍勢は山を下り大坂方の大谷、平塚等の部隊に向けて鉄炮を打掛けて一戦が始った。

其時秀秋の使番村上忠兵衛と言う者が松野主馬の陣へ行き、平岡石見の指示を伝えると主馬は当軍勢が裏切り等すれば秀秋は不忠不義の悪名を蒙る事になるので私は同意できない、両家老は知らない筈はないが、この主馬等は外様者と思い知らせなかった事を幸いに何も聞かなかった事にして私の部隊だけは関東方に一戦して討死する外はないと云う。　忠兵衛は、裏切の事を知らなかったと有っては私の落度になり、其上主人の非を正されると云う事はもっと前にする事で今に至っては意味の無い事です、（p345）ご理解下さいと云うと、主馬は納得して自分の部隊を率いて山を下ったが終始見物していた。

其後主馬は秀秋に暇を乞い京都へ登り、頭をそり黒谷の傍に柴庵を結んで閑居した。　秀秋が

備前・播磨両国を拝領した時、　知行を加増して呼出して両国の支配に協力する様にとあったが、堅く断った。　その後田中兵部少輔が筑後の守護になった時一万石を与えて抱えたが、田中筑後守が無嗣断絶となったので駿河忠長公（秀忠次男）へ採用され鳥居朝倉の両家老中に続く立場であった。　しかし忠長公が改易された後、又頭を剃り道円と名を改めて近江の大津辺に閑居していたがそこで死去した。

著者註　黒田家の大久保の事は虚実は分からぬが、事実とすれば感心するので爰に書留る。

其二　大野修理亮の名誉挽回

大野修理亮は十五日の早朝浅野幸長の前へ来て云うには、　小山以来貴殿のお世話で部隊を借り貴家の家来衆と打合せ、貴配下で相応の働きをしたいと前から思っておりました。　しかし貴殿のお役目は南宮山の敵を押さえる事ですが、西軍の毛利秀元は既に降参との事であり最早この場での一戦はないのではと思います。　私は御存知の通りの立場ですから今日一働しない訳に行きません、　是非とも先手の中へ加わり手柄の機会を得たいものですと云う。幸長はそれを聞いて、確かにその通りです、それでは福島左衛門大夫の配下に行かれるのが良いと返答した。　大野は大喜びで馬を早めて福島政則の陣へ駆けつけ備前中納言秀家の軍勢と戦った。

則敵一人馬上で鑓を持って修理（p346）に向かって来た、　修理も鑓を取って二三度も絡合う内に修理の家来米村権右衛門が刀を抜いて馬上の敵の股を切ろうとしたが、　具足の胴へ切付二の太刀を振り上ると敵は馬から飛下り米村を引寄せて組み伏せた。　そこへ修理は馬を乗廻し敵の具足の透間を目掛けて一鑓突いたので敵の力が弱る。　米村は下からはね返して、首を取りますと断れば修理より、よろしいとの答えで首を切り落とした。　修理は其首を米村に持せ

本陣へ行き使番衆が取次ぐと内府公が、　通作是へ是へと云われるので自身で首を持ち床机所へ行けば、ご苦労だった、もう先手に戻る必要ないので此処に居る様にとの事で岡江雪と一所に居る間に合戦は勝利となった。　そこでお喜びを江雪、修理一緒に申上げた。

著者註　大野修理亮が討取った首の姓名は当座は分からなかったが、米村権右衛門が首を切る時、敵の襟に懸けている数珠の飾りが余りにも美しいので、米村はそれを腰に挟んでいた。　それを見た大野の部下の侍で切支丹の者がいたが、　彼が是非と欲しがるので彼に与えた。　その者が関ヶ原陣の後京都へ大野の供として登り、切支丹寺（教会）に参詣した時、そこの神父が例の数珠を見て、その数珠は私の物だったが浮田中納言の家来の高知七郎左衛門と云う者が熱心な信者でこれを欲しがったので進呈したとの事である。そこで初めて大野の手柄の首の姓名が分かった。

或時内府公より大野へ、其方が関ヶ原で討取った敵は浮田家来の高知七郎左衛門の首と聞いた。　それならあの時もっとよく（p347）見て置けばよかったと御意があった。大野は首一ツで二度の褒美に預かったと米村権右衛門は云った。　世間に流布する旧記に高知七郎左衛門と名乗って討死したと有るがそれは違う。

其三　福島政則の奮戦

関ヶ原合戦について私（著者）の大叔父大道寺内蔵助が語るには、福嶋政則は九月十四日の夜中頃、家老の福島丹波、尾関石見、長尾隼人の三人を始め其外主立った家臣を集めて、明朝の一戦で是非共石田の陣へ懸かり切り崩したいが夜中霧が深く陣の見分けもできない。そこで敵の旗の紋さへ見分たら石田の手先へ押掛けるので、夜中に陣を構築する様にと指示し、敵陣の篝火を見当にして陣を構えた。　しかし夜明け方に見ると政則の陣に近い敵は石田ではなく

備前中納言浮田秀家が二万に及ぶ軍勢を先手と旗本と二手に分けて陣を構えている。

政則はこれを見て家来の福島丹波に、　是まで石田の軍勢へと思っていたのに備前中納言の軍勢を切崩すのも気持ち良いものではないかと云えば丹波は、手間は取らないでしょうと応じた。それ以後政則は、内府卿の旗先が見へぬ内は鉄炮を打出さない様先手の物頭達に堅く命じた。内府卿の旗先が見えたと報告を受けると、その侭馬を乗り先手の部隊の中を乗り廻して自身で頭達に命じて足軽を繰出させ、競り合いを始めた。　それから侍達の陣を駆け廻り、三人の家老も同じく命令を伝えている所で内府旗本の鬨の声を聞くと、政則始め三人の家老は馬上で采配を打ち振って、やれ懸かれ、懸かれとの指示に任せ（p348）、いつもなら一の手、二の手と繰出すがその区別もなく一斉に突懸る。

備前勢も同じく掛って来て戦い、勝つ部隊もあり、負ける部隊もある。　浮田方は大人数であり既に福島方は敗軍になりそうになるのを政則は馬を乗り廻し、卑怯な働きをする者は首を切るぞ、此処で死ね、返せ、返せと大音声で命令する。　三人の家老は皆馬下り持鑓を構えて、皆の者見苦しいぞと言葉掛けて押返す様にしたので、忽ち立ち直り一斉に突掛ける。　備前勢は十間計り後に下がるので又突いて出ると見えたが、如何した事か敗走しはじめたので追討に入った。この時浮田軍を政則の一手で切崩した様に福島家中では思っていたが、後々聞けば関東勢の中で浮田軍へ向かった他家もあった。

大道寺内蔵助は事情があり福島政則方を去って黒田長政方に勤めた時、黒田家の古い人々は、関ヶ原合戦の時、石田三成の軍勢を当家だけで追崩した云っていた。　これも黒田家だけではなく加藤、田中、生駒の三家を始め、其他の戸川土佐、竹中丹波、岡田将監等の小身衆迄も石田の

軍勢に切掛った人々は多数いた。

日本国の東西が二ツに分かれ、双方廿万に及ぶ大軍が関ヶ原に一同に集り九月十五日朝八時頃だろうか合戦が始り、午後二時頃には勝負が付いたのは前代未聞の大合戦である。　そのため作法等も特になく我先にと掛り敵を切崩し、追留などもなく四方八方へ敵を追っていった。　その様な状況であり、自分の前の敵の様子は分かるが、とても脇の方迄目は届かず、たいへん混沌としていたという。（p349）　大道寺内蔵介が中西与助へ語った事を書留める。

其四　大谷吉継の最期

筑前中納言秀秋は八千の軍勢を三ツに分け、五千を左右の先手とし、三千を旗本と定めて松尾山から押し下った。　六百挺の鉄炮を打懸けながら大谷刑部の先陣である木下山城、大谷大学、戸田武蔵、平塚因幡等の部隊に押掛けた。　大谷の先陣四人の部隊が必死に働くので筑前勢は突立られて二度迄敗走した。　徳川家から検使として派遣されていた奥平藤兵衛は非常にいらつき、走り廻り指示していたが大谷の先手が打った鉄砲に中り討死した。その時前から内約していた脇坂中務、朽木、小川、赤座等が急に陣構えを替て横合いに突いて掛るのを見て、秀秋の先手の部隊も取って返すと藤堂佐渡守高虎の軍勢も突いて出た。大谷、平塚の部隊は三方に敵を受けて元来小勢であり終に戦い負て敗走する。　平塚因幡は小川土佐守の家来桜井太兵衛に討たれ、戸田武蔵は織田河内守長高に討れた。

其時大谷の家臣湯浅五助と云う者が甲首一ツ引下げて先手より馳帰り吉継に向って、秀秋だけでなく脇坂、朽木、小川なども皆々敵となり裏切りました。　やむなく負け軍となり因幡殿、武蔵殿も討死と見えます。　今の内に自決される様にと申上げるために戻って来ましたと云う大谷は五助が取って来た首の甲を撫廻して感賞し、幸い其方が来たので介錯せよと云い脇指

の柄に手を掛けて首を討せた。　五助は泪を流し吉継の近習の者に向い、日頃言われていた様にせよと言捨て馬で駆出し藤堂佐渡守の部隊へ向かったが、藤堂仁右衛門に討取られたと云う。　大谷の首は三浦吉太夫と云う者が吉継の着ていた羽織に包み、深田の中へ埋めた。

(p350)

著者註　大谷の最期について、或時浅野因幡守が早水咄斎へ尋ねた事は、関ヶ原合戦の時大谷刑部は鳥毛を植た甲を着して馬上で腹を切ったと書いた書物がある、其方の話しの中では聞いた事がないがとの事である。　咄斎が云うには、決してそんな事はありません大谷はその頃病人で特に病状も重く手足も不自由で、手綱を取る事が出来ず馬に乗る事もできません。　ましてや申を着したと云うのは大きな虚説です。　朝の間私も側近くで見ておりますが素肌色の白い羽織を着て、朝寒かったのでかわ色の小袖を上着とし裾を腰に挟み、浅黄色の頭巾を深々と被り手鑓を杖にして山駕籠に持れ掛っておりました。

松尾山から秀秋軍が押下った時、若い者達は先手へ行く様指示があり皆駆出しました。私も一緒に行き、合戦が終わって大谷大学に付いて吉継の本陣へ帰った時は辺りに人は一人も居らず、吉継が乗捨た山駕籠だけが見えました。　私がこの様に存命しているのに色々な噂が流れましたから後世に至ってはもっとあると思いますと因幡守に咄斎は語った。木下山城と大谷大学は戦場を遁れて敦賀へ帰り、城代蜂谷市兵衛と籠城の積もりだったが難しい様子なので両人は忍んで大坂に行き身を隠した。　其後秀頼卿の扶持に預ったが山城は死去し、大学は十五年後の大坂の陣で秀頼卿側で死去したとの咄斎物語である。

其五　浮田家の崩壊

浮田中納言秀家の先手部隊は全て敗れたが、　旗本は崩れなかったので先手から退き旗本へ

加わる者もあり人数がかなり増えた。　そこで旗本の部隊で内府公の本陣を(p351)目掛けて押出し一戦を遂げて潔く討死を遂げようと、秀家は床机から立ち上がり馬を引かせて乗ろうとしたが家老の明石掃部が押さえて云うには、云われる事は尤ですが、今度この大義を決断されたのは秀頼公為の事ではありませんか、　今味方が全て敗軍となった時、討死されても意味がありません。　先ず此処を引払って急いで備前に下り岡山の城に籠りましょう。　必ず内府卿が諸大名へ命じて攻落しにくる筈です。　その時寄手の者達に一手際見せ、籠城が難しくなったら最期の一戦を遂げ潔く自決されてこそ末代迄の名誉となります。　今討死するのは粗忽の至りですと強く諌めるので秀家も納得した。

明石は譜代の侍廿人計りに細かく云い含めて秀家の供をして岡山の城に帰る様に指示し、自身は秀家に先立って一時も早く岡山に到着する為、忍んで京都に登り以後大坂に行き船で備後迄行き備前に戻った。　しかし二日程前に留守居役達は岡山の城を明渡し、城内の蔵に積貯えた兵糧、馬、大豆に至る迄、　城下の町人や近在の者が入り込み略奪同様持ち去った事を聞いた。　やむを得ず明石は備中芦森辺の禅僧の寺に行き、翌年三月迄は備中に滞在した。　その後秀頼卿の呼出しに預り、後藤又兵衛と同格の様子で大坂に籠城した。その時大野修理方へ来て物語った事を聞いて米村権右衛門が浅野因幡守へ語ったので此処に書き留めた。

その時明石は、高知七郎左衛門は貴殿の手に掛ったと聞くが、高知は秀家家の物頭の中で(p353)随一の者でたいへん剛勇の者でした。　多分骨を折られた事と思いますと云えば修理は、少しも私は骨を折っていません、家来達がした事ですと応じたという。　これも米村の物語である。

其六　石田三成と小西行長

石田光成の部隊には関東勢が幾手も攻め懸けたが、中でも黒田長政の部隊は前から佐和山軍（三成居城）を相手にして一戦したいと強く心掛けていた。　そこで黒田家の物頭達は皆で相談し足軽に命じて鉄炮を烈く打せたので、石田の家老嶋左近がその鉄炮に中り馬より落ちて絶命した。それ以後佐和山軍は足元が定まらなくなり、長政の部隊は言うまでもなく、細川忠興、加藤嘉明田中、生駒以下の関東勢が一斉に突き掛った。　更に藤堂高虎、織田有楽父子、脇坂、朽木、小川等も一同に大谷の先手を切崩した後直ぐこの戦闘に加わったので、石田方の隊長である蒲生備中、同大膳、小川十郎、嶋左近が嫡子新吉等の随一の者達が多数討死した。　石田の各先手が崩れて石田の旗本部隊に雪崩掛り、旗本も友崩れとなり全軍が敗軍となり追討された。三成は戦場を遁れてあちこち隠れ忍んだが終に田中兵部の部隊に生捕られた。

小西攝津守行長は一戦の時軍勢を先手と旗本の二つに分けたが、浮田と石田の先手部隊が敗れて敗走を始めると小西の先手も動揺した。　そこで行長は大に腹を立て使番の侍を先手に派遣して現在位置の三町程北へ陣を下げる様伝えた。　これは足軽を一所に集めて筒先を揃へ鉄炮を放させ、頃合を見計らい侍達が一斉に突掛る体制にして、その後旗本部隊で（p353）勝負する積もりで指示したものである。　そこで先手の部隊が小西の命令通り陣を引き下げたところ、関東方諸勢は石田の先手が敗れたのを見て小西の先手も友崩れしたものと思い、　四方八方から追掛かり、小西が指示した場所で陣を立て直す事ができず、そのまま旗本部隊へ崩掛る。行長は激怒して馬で乗廻り、味方の奴らでも臆病を構へて旗本へ逃込む者は皆討殺せと大音声で命令するが聞くものもなく混乱の中で先手、旗本共に一度に崩れてしまった。

この後関ヶ原一戦の時小西の配下で働いた等と云う者が有ってもそれは事実ではない。　私

等も根来法師と相談して数度戦いに出た事があるが、関ヶ原一戦の時程もろく敗軍した事は覚えがない。　石田三成は軍事が不得手だと世間では言われていたが、予想外に人材を集め武辺で著名な者なら何を差し置いても抱えたので、　関ヶ原でも先手部隊の者は予想通り良く働き夫々晴れやかに討死をした。

小西行長は肥後半国を領知して金銀財宝には何の不足も無い筈だが、武功の誉れある侍に高知行や高禄を与えて抱える事を嫌った。　そのため先手の物頭となり実績を示すような人材が居らず、多勢にも拘らず見苦しく敗走する事になった。　大名方の宝とは良い人材を多く持つのが一番である。　これは淡輪六郎兵衛が私の親忍斎へ雑談したと永原兵右衛門が語った事を書きとめた。

著者註　淡輪は根来寺近所の地侍で著名な者であるが、関ヶ原の一戦の時小西方に属した。
浅野幸長が戦後紀州を拝領した時（p354）から和歌山の浅野家中へ出入し、亀田大隅が特に目を掛けた者と言う。　大坂夏の陣では秀頼卿に採用され大野主馬組付となり泉州樫井の一戦の時、塙団右衛門等と共に討死した者である。
次に永原忍（任）斎は加賀の丹羽長重方に仕え、永原十方院と名乗る。その後浅野幸長へ仕え知行千五百石を給わり紀州和歌山に住居した。

註　亀田大隅守（高綱　1558－1633）浅野幸長家老七千石

其七　島津の敵中突破撤退

島津兵庫頭義弘の部隊へも関東の諸勢が押掛けて戦うが、中でも井伊直政は松平下野守忠吉を同道しているので特に粉骨を尽くし、家中の者達も負傷や討死が多かった。　勿論手柄ある人々も数人いた。　義弘は元来剛将であり、その配下の諸士は云うまでもなく、足軽や中間に

至る迄良く働いた。　しかし上方勢が全て敗軍となり薩摩勢も大半は討れたので、義弘は最期の一軍（ひといくさ）して討死しようとしたが、甥の島津中務太輔豊久が強く諌めて義弘を立退かせ自身は僅か十三騎の従士と共に踏み留まり討死を遂げた。　松平下野守は自身手柄も有るが手疵を負い、井伊直政も鉄炮疵を負ったのも義弘の部隊と戦った時である。　この時義弘家老の長寿院盛淳と云う者は島津兵庫頭義弘と名乗って討死したと云う。

その間に義弘は戦場を遁れ土岐多良の山中を経て高宮河原へ出た時五十余人が付随っていた。家臣達は飢えに苦しみ、高宮の宿中を探し求めたが食するものが何もなく、仕方なく牛を殺し其肉を食べた。又旗や馬印なども無いのでその牛の皮を剥ぎ竹の先に掛けて馬印とした。　甲賀谷へ掛け退却する途中、所々で土民が常の落ち武者と思い武具や刀脇差を奪い取ろうと手向かったが全て切り払い首（p355）五ツ討取り道端に掛けて晒し、土民一人を生捕り、松の木に縛りつけた。それから奈良を通り堺へ出て大坂に置いた証人達も引取り、船で無事薩摩へ帰国した。

註１　土岐多良　現大垣市南部、高宮　現彦根市付近、甲賀谷　現滋賀県南部甲賀市付近

註２　島津義弘（1535－1619）この時六十五歳

十一―五　合戦終わって

以上の次第で反徒方の軍勢は全て敗走したので合戦の始めに手柄のない者達も、我も我も
と逃げる敵を追討したので、どの陣も先手は勿論各家の旗本陣まで手薄になった。　その中で
加藤嘉明だけは石田の先手を追い崩し、家中の侍達も多くの手柄を得たが猶も敗軍の敵を追討
に進むので、嘉明自身が馬を乗廻して追討中止を高声に命令したので家中の者皆追留をした。
夫により先手、旗本の総人数が一所に整いたいへん見事だった。　それだけでなく嘉明は朝の

内は非常に美しい甲冑を着ていたが、　敵が敗軍となると目立たぬ威し毛の具足に着替えた。
この二つの事は暫くたった後、　京都二条城で家康公に側衆が雑談として申上げると、全体に
左馬助（嘉明）は全ての事に巧者であると云われた。
著者註　　実不実は分からぬが咄を聞いたので書き留める

註　加藤嘉明（左馬助 1563－1631）秀吉の子飼家来、この時伊予松山（六万石）城主、後会津藩主

関ヶ原の合戦で反徒側の死亡者二万八千余、関東方討死の人数三千七百人余と旧記等にも記し
人々の口からも伝えられるが、明確な数字はない。

合戦が終わって後、諸大将は皆床机所へ参集して、今日の戦いに勝利した祝いを口々に述べると
家康公は、私の指揮した合戦と言う事ではなく、偏に皆さんの軍勢で勝利を得たものですと誰にも
一様に応対した。　中でも織田有楽斎が子息河内守を同道して、石田家老の蒲生備中の首を家来
に持たせて御前でその首を請取り、是は三成の家来（p356）　蒲生備中ですと言えば家康公は、
老体らしからぬ働きをされたと応じた。　その時迄は頭巾を被ったままだったが有楽斎に向い、
昔から勝って甲の緒を締めよと伝えられるからと頭巾の上に甲を被り、緒をさっと仮に結んだ。

註　織田有楽斎長益（1547－1622）信長弟　この時五三歳

そこへ村越茂助が筑前中納言秀秋を同道して来たのを家康公は見て、床机より下りて甲は被った
侭で緒の結目だけを解いて中腰になり、貴殿は今日大きな戦功があり以後に遺恨はありません
と云うと黒田長政が色々仲介し秀秋は芝の上に平伏していた。　この時長政は家康公に向かって、
三成の居城佐和山には三成の親族が籠城している様です、もし同城を攻めらる時は私（秀秋）
の部隊で攻落させて下さいと秀秋が願っていますと申上げると、それは更なる満足であると応じた。

秀秋の後に脇坂中務も御前へ出た。

著者註　この咄は世間で流布する記録にもあるが、少し違いがある。　佐和山の城攻は直接秀秋へ命じたとなっているが、そうではなく黒田長政が秀秋の願と言う事で申上げた。　その理由は秀秋が国元を出陣する時、　黒田如水（長政父）が秀秋の家老平岡石見と相談して、若し秀秋が関東方に付くなら、その取計らいをすると様にと如水より長政の方へ事前に連絡した。しかし秀秋は伏見城を攻め、その事を後悔して降参する旨を長政へ頼んだ。　長政はそれを申上げたたが内府公は納得せず、秀秋は自身の行跡が良くない、一度太閤の勘気を蒙り筑前国を取上られ越前北の庄に蟄居の身と成った（p357）。北の政所（秀吉正妻、秀秋叔母）より私に善処を頼み大谷刑部と相談して秀吉の怒りを解き再び筑前の守護としたのは皆私が世話した事である。　其恩を忘れて反徒側に属して伏見城の寄手幹部となり、私の留守居達四人の者を攻殺した。　今頃になり後悔したと云っても許せないので秀家、三成等と同じく秀秋も今度打果そうと決めているので放置せよのと事だった。

長政が色々と詫びを云って漸く家康公に納得してもらったので、明日関ヶ原一戦で裏切る時は一角の働きが必要と秀秋の家老達に伝え長政は自分の侍迄も付けて置いた。　しかし行動開始は遅れるし、其上大谷や平塚などの小身者の部隊へ掛り二度も追崩されるなど不甲斐ない様子である。　見兼ねた内府卿より付けて置れた奥平藤兵衛を討死させてしまった事は申分け無いとなった。　長政も気の毒に思い、秀秋の為を思い佐和山城攻めの事を願った。そんな訳で翌十六日の佐和山城攻めの時、長政は後藤又兵衛に指示して組の足軽及び侍の一隊を秀秋の陣所近くに配置した。　この事は旧記等の書物には無いが大道寺内蔵助が中西与助へ語った事を書きとめた。　関ヶ原陣の時内蔵助は福島に属したが、其後黒田長政

へ属した時に黒田家の古参の者から聞いた咄ではないかと思う。

この時の事についてある時土居大炊頭が寺田与左衛門や大野仁兵衛などへ以下語った事がある。　最近ある人から関ヶ原合戦物語と云う書物を借りて若者に読んで聞かせた。　私は（p358）台徳院様（秀忠）の御供をしていたので関ヶ原合戦の次第は見ていないが、その場に参加した人々から直接話を聞いたので見た事とほぼ同じである。　書の内容をそれと比べて見ると少々の違いはあるが大体は相違なく随分よく記してある書である。　しかし中に大きな違いと思われる所がある。　その理由はその書物にも書載ている様に、其時の外様大名の中で両加藤、福島、浅野、池田、黒田、細川の人々を七人衆と名付けて、三成を始め大坂奉行の面々とはたいへん仲が悪く、七人は権現様（家康）の側にあった。、その当時私もその様に聞いていた事である。

この七人衆とは分け隔てなく一同に親しくされたが、ある時台徳院様が御年若でもあり浅野幸長と細川忠興の両人と特に親しくしていると聞かれ、榊原康政を呼んで御縁者の池田輝政を始め七人衆とは同様に親しくするべきなのに、そうではないと聞くがそれは宜しくないと云われた。　それゆえ七人衆の中で一人格別に御誉めになり、その仁の手を取って、其方の家は子々孫々迄も大事にすると云われて御腰に差した吉光の脇差を手ずから其仁の具足の上帯に指されたと云うのは関ヶ原の時では無いと思う。　七人衆の内加藤清正一人は在国で残る六人列座の中で一人の事を特別扱いにされる事はあり得ない。古い書物など見ればわかる事だと大炊殿が語ったと大野知石が私に語った。（p359）

筑前中納言秀秋が内府公へ御目見する様子を其場で見た福島政則は黒田長政に向かい、

今日の合戦は内府卿の勝利とは云っても、未だ公方将軍になった人でも無いのに、中納言と云う官位のある秀秋が中腰の内府卿に芝の上で平伏するとは見苦しい景色ではないかと云った。　長政は、そうですね、　鷹と雉子が出会ったと思えば良い事ですと答えた。　政則は、それは貴殿の贔屓口上です、鷹と雉子程も違いはなかろうにと政則は云った。
これは関ヶ原陣以後、浅野幸長が親父長政へ初て会った時、合戦の次第を雑談するのを側で聞いたと徳永如雲斎が語った。

宇都宮で上杉家の監視をする結城秀康公から派遣されていた真砂作兵衛と名与次兵衛両人は関ヶ原では旗本の御徒衆の中に交り勤めていた。　家康公に召し出され、この合戦の詳細は後ほど連絡するが、勝利した事を急いで帰って秀康公に報告する様にとあったが、両人共に少々手疵を負っており道中を急ぐ事が難しいと申上げたところ、それでは代りの者を送るので両人は疵の養生をして帰る様にとの事だった。

御前へ参集した法印衆が口々に、此上は凱旋のお祝いを行いたいものですと言えば内府公は、勿論一戦には勝ったが、皆さんの人質として大坂に置れている妻子方の安否を確認する迄は安心できません、　近日上方へ登り妻子方を皆さんに無事引渡した上で勝利の（p360）祝いをおこないますと挨拶があった。
著者註　この件について織田有楽が三輪大学へ云った事は、　関ヶ原一戦の時誰も妻子の事を思い出す者もないところ、　内府公がこの様に云われたので、皆が妻子の事を思い出して、さても思いやりのある内府公のお言葉かなと骨髄に染みたと感じたのは私ばかりではなく皆が後々迄語った。　大将の一言と云うのは実に大切な事だと有楽斎が語るのを聞いたと三輪大学が浅野因幡守へ語った。

東軍先手として戦う各大名家の陣には夫々に目付が一人配属されたが、　筑前中納言秀秋軍の検使は奥平藤兵衛だった。　秀秋が反徒方を裏切り大谷軍を攻めた時、大谷、平塚、戸田の家来が良く働き筑前勢は追立られた。　それを見兼ねて藤兵衛自身が鑓を取って敵を突き、筑前兵を叱咤して駆け廻ったが終に討死してしまった。　この事が家康公の耳に入り、不憫に思い藤兵衛の跡を継がせようとしたが子供が無いので、代わりに母に老後の為として近江国の中で三百石の地を与えた。
註　上記奥平籐兵衛の事は原文では第十一巻の冒頭にあるが、読み易くするため現代文訳は「戦い終って」の此処に移した。

十一―六　佐和山城攻め

慶長五年九月十五日、家康公は関ヶ原戦場を出発した。　藤川に大谷吉継が捨てた陣小屋が有るのをその侭本陣として用い一泊するので皆無造作な事と申上げた。
翌十六日の早朝に内府公は藤川を出発し、正宝寺山に陣を据え、筑前中納言、黒田甲斐守、田中兵部、藤堂佐渡守、井伊直政などが摺針、鳥井下からり二手になり佐和山城へ押掛けた。中納言秀秋の軍勢は大手口から攻め掛けたところ、城兵は鉄炮を放し厳しく防いだので筑前勢は負傷者や死人も多く出たが、稲葉と平岡両家老を始め、家中の侍も前日もたついた働きをした事を悔み今日は勇を奮った。　其上黒田長政の家臣の後藤又兵衛が長政の命で部隊を張出して筑前勢に弛みが出たら代わって一働きしようと構えて秀秋の先手の者達と並んでおりこれも筑前勢の励みとなった。
註　摺鉢＝摺鉢峠、鳥井下＝鳥居本宿（中仙道）　いずれも彦根東側

其日の晩方に至って使番衆を派遣し、今晩は各部隊共引揚げ明十七日（p361）未明より攻撃すると触れさせたので、　諸部隊共に攻め口を引揚げて城を取り囲んで夜を明かした。
その夜中城兵の頭分の者である山内上野と長谷川左兵衛と云う者が出奔し、其外の城兵も寄手の大軍を見て辟易しており、華々しい防戦を遂げる様子でもない。　そこで三成の父隠岐守兄石田木工頭両人方から井伊直政へ使者を出し、城中諸人の命を助けて戴ければ、親族は残らず腹を切るとの申出があった。　その事を報告すると、願いの通りにせよとなり隠岐守、杢頭、宇多下野、長田桃雲以下各々切腹し、十七日即刻佐和山城は落去した。

その後直ぐに近江国永原へ陣を移したところ、大垣城への寄手松平丹波守、水野六左衛門両人より言上があり、　大垣籠城の中で秋月長門守、相良左兵衛、高橋右近太夫の三人より書状で申入れがあり、　此度敵対した事をお許し願えるなら、本丸に籠る福原右馬之助を始め垣見熊谷、木村等を全て討果して忠節を示したく存じますと伺ってきましたとの事である。　井伊直政がこれを報告すると、両人の計らいに任せよとの事だった。
そこで九月十八日相良、秋月、高橋方より本丸へ使者を立て、福原を招いたが、彼は来ず垣見、熊谷、木村父子などが来たので、相良と秋月は申合せて彼ら主従共に討取り、松平丹波守、水野六左衛門、西尾豊後守方へ通知した。

これに依り寄手三人に中村一学、津軽右京亮の部隊を分け、相良、秋月、高橋等を先手として本丸を取囲み一斉に攻め込んだ。　しかし福原自身が馳せ廻って指示し、城兵が厳しく防ぐので津軽の隊長桜場左衛門次郎等始め寄手も多く討死（p362）したと言う。
この時西尾豊後守が計略を廻らしたので同廿三日福原は城を降り、出家して道蘊と名を改めて

伊勢の朝熊へ蟄居した。　大垣寄手の面々から井伊直政へ落城を報告し、道蘊御助命の件を各々からも願ったが、　福原は三成に近い縁者でもあり、　其上大奸者であると日頃内府公も良く知っていたので取上げはなく、終には切腹となった。

九月十九日晩方、内府公は草津へ陣を移した所へ勅使が下向してきて宣旨及び勅答の事は旧記にもあるのでここでは記さない。　その時世間や旗本での噂として、今度の一戦勝利のお祝いとして初めて勅使を請けた事は、徳川家繁昌の前触れであり目出度い事と云われた。

この草津の駅で内府公は大野修理を呼び、其方は大坂へ行き秀頼の母義淀殿へ伝える事は、今度秀家や三成を始め悪逆の者が相談して、秀頼の命令として諸大名に呼びかけ私を亡き者にしようと企て天下の騒動となりましたが、去る十五日濃州関ヶ原にて一戦を遂げて反逆の者達を全て鎮圧しました。　今度の件について秀頼卿の名判がある書状も有るが、これらは全て反逆者達の仕業である以上、幼年の秀頼卿へ対して遺恨はないと云う事を尼奥蔵主を始め、奥向の老女達をを呼出して十分に申し聞かせよとの事である。　大野が大坂城へ行って是を伝えたところ、淀殿はたいへん喜んだという。

又草津の本陣で内府公は以前から出入りしていた呉服商や猿楽師などを召出して京都の様子を尋ねた。　彼らの報告は、　多分関ヶ原で（p363）敗れた反徒側の落人でしょうか、この二三日以来洛中へ入込んで寺中や町屋へ押込み狼藉があり、諸人は困っておりますと口々に訴えた。
そこで奥平美作守に板倉四郎右衛門を添えて所司代の代行を指示した。　其外大身大名の福島左衛門大夫、黒田甲斐守、池田三左衛門、浅野左京大夫にも洛中守護の部隊を連れて来るよう指示した。　又その他諸事検討の役人として大久保十兵衛と加藤善右衛門の両人が

任命された。　又旗本の足軽大将である伊那図書、近藤登之助、加藤源太郎の三人は大津の八町に番所を造り、関東方の諸軍勢を濫りに上方へ通行させない様に言渡した。

著者註　上記は永原の陣所で言渡されたと旧記ではなっているが、草津で言渡されたと米村等は云っている

九月廿日大津の城へ陣を移す。

註　大津城は関東方の京極高次の居城

落穂集第十一巻終

落穂集第十二巻（p364）

十二―一　秀忠の合流と北陸の戦後処理

慶長五（1600）年九月廿三日、秀忠公は信州木曽路を通って直に大津へ到着したが、内府公は持病が起こったとの事で面会が無かった。　供の人々にも面会は無いので秀忠公は夜に草津の宿に帰った。

著者註　この件に付いて旧記では、秀忠公が真田攻めで時間を取られ関ヶ原の戦いに間に合なかった事で、内府公の機嫌が悪く面会出来なかった。　そのため大津には泊る訳にも行かず草津へ帰ったとなっているが、そうではない。　京極高次が大津城に籠ったとき、大津の町屋を焼いてしまい宿泊する宿や下宿もなかった。　そこで本多上野介が世話して本陣だけでなく供の人々の宿まで草津近辺の村々に（p365）割り当てて草津へ帰ったのである。

その日の夜中本多上野介方より、内府公の持病も快復し面会されるので明朝大津へ来て下さい、その時今度御供した面々にも面会されますとの事である。　翌朝大津の城へ上り、面会の節、供の人々にも目通りがあった。　秀忠公が、私は此度関ヶ原の陣に遅れ、大切な一戦にお役に立たずたいへん御迷惑を掛けましたと申上げると内府公は、参陣の時を伝えた使いの口上が違っていたのは致し方ない、　一般に天下分け目の合戦等と云うものは囲碁の勝負と同じ事で、その碁にさへ勝てば、たとへ相手の方に目を持つ場所が幾つあってもそれは役に立たない物である。　関ヶ原の一戦にさへ勝てば、真田の様な小さな大名がどんなに城を固く守っても自然と城を明渡して降参するしかないのだが、向こうに控える供の中でその様な事を貴殿に言った者は居ないかと内府公は尋ねた。

秀忠公はそれを聞いて、その事は戸田左門が云いましたと云えば、　彼はどの様に云ったかと再度質問があったので上田において左門が言上した事を細かく報告した。　内府公は、控えている人々に向い、左門と声を掛けたが遠くて聞こえないので返事もなかった。　そこで秀忠公が大声で、左門御呼びであると云ったので左門は出て来た。　左門が内府公の側に行くと、御前にある菓子を両手ですくって左門に与え、　小身では口もきけないだろうが、やがて口が利かれる様にしてやるぞと云われた。　左門は余りの感激で有り難い事ですと云う事も出来ずに（p366）いると　秀忠公が代って、左門は有り難いお言葉で感謝しておりますと代弁した。

著者註　この咄は世間に流布する旧記等では見当たらないが確実な事と伝えられ、慶長六年に左門は大津の城在番としていたが、現在の大津の城の場所が良く無いので膳所へ移すため城地の選定、城の設計などについて左門に提案させた。　財力のない小身者であり普請中は奉行並に扱われ費用等は全て上から出された。　左門は夫までは武蔵国川越の鯨井五千石だったが、膳所近辺で三万石が与えられ城主に任命された。　これは大津での言葉が実現したものと思われたので書記した。

内府公が大津城に逗留している間に加賀中納言利長が土方勘兵衛と共に参上して、一戦勝利の賀詞を申上げると共に北陸方面の状況を委しく報告した。　その中で大聖寺の城を攻落し反徒側の山口父子を討果した事は喜ばれた。　又前田利長が述べたのは、　不肖の弟である能登守は大聖寺城を攻める時迄は私の忠実な味方として目覚しく働きましたが、その後反徒側に誘われ自分の領地に籠りました。　不届な事と思い勘兵衛に頼み、二度に渡り能登国へ行き色々異見をさせましたが承引せず、敵対する様子を見せ困っておりますと云う。　土方勘兵衛も同じく

私も二度行って色々説得しましたが納得せず、利長も御前への申し訳が立たないと非常に悩んでおりますと述べた。　内府公が、人はそれぞれの考えがあるので止むを得ないと云うと土方は、能登守については確かに（p367）反徒の一味では有りますが、　家来達は全員利長に属して行く様にと指示しておりますと云えば、それ以上の言葉はなかった。

此時利長が申上げたのは、小松宰相（丹羽長重）は初め反徒側の仲間でしたが浮田秀家や石田三成の邪な謀と知り、前の非を悔んで土方も知る通り私の方に降参して、越前に出陣する時は先手を受持ち忠義を励むとの事なので和議を結び面会しました。　その時関ヶ原の一戦御勝利となり忠節を尽す場もなくなり、私の方へひたすら恭順を願っています。　関ヶ原一戦以前に降参している事でもありますから恩赦を戴きたく存じますと云う。

内府公は利長に、貴殿が言われるのは尤ではあるが宰相を赦す事は決して出来ない。　理由は宰相の親丹羽長秀が死去した時、武将の態度では無かったと云う。　その事が秀吉の不興を買い領知を取上られ今の長重が苦労していた。　私は親の長秀と親しかった関係もあり、色々面倒を見て秀吉にも取り成し、小松の城主にもなり官位も宰相迄昇進した。　この恩を忘れて反徒側になり、其上貴殿に弓を引いた事は重罪であり死罪に相当するものであると云う。

利長が色々詫びていた時秀忠公が出座したのを幸に、秀忠公にも何とか長重助命をお願いして戴きたいとの事で秀忠公も取り成し、土方も頻りに御詫びを言うので漸く内府公も、利長の達ての願いであれば助命しようと云う事になった。　そこで城は利長の家来に明渡し、長重自身は早々加賀の地を立退かせる様にと土方勘兵衛へ指示があった。

註　丹羽長秀は信長の重臣だったが、信長死後秀吉に付く。　癌を患い自分で癌の内臓を取出し

それを秀吉に送って死んだという説がある

利長は更に、越前北の庄城主青木紀伊守もご赦免願いたいと私の方に願いが来ておりますと云った所、青木の（p368）類は外にもあるだろうが、死罪は赦しても反徒の一味である以上は、どの道城を明渡して退散するべきであると内府公は言う。　土方は、紀伊守は病身なので倅の右衛門佐を今度利長に添えて上らせました、何とかお許しの方向が出ますれば忝い次第ですがと云ったが、全く同意がなかったので、右衛門佐も止む無く越前へ帰った。

著者註　これらの次第は旧記にも載っているが少し宛違っている。　此書に記したのは内藤善斎が浅野因幡守へ語った事を書留めた。

松平丹波守、水野六左衛門及び西尾豊後守は大垣城を在番の松平周防守へ引渡し、大津へ参上して同城の落去の次第を直に報告し喜ばれた。　その時お尋ねが有ったのは、前の報告に津軽勢の働きが見られたが、津軽右京からの報告が無いのは何故かとの事である。　丹波守は、仰る様に私共も右京の参陣がないので不可解に思っておりましたが、彼等の頭分の者に尋ねたところ、右京亮も出発予定でしたが急に領内で一揆が起こり、その処理を行った後出発するので先発の部隊は一時も早く出る様にとの事で私達のみで参りましたとの事です。　侍達は言うまでもなく、足軽や長柄の者に至る迄良く働き、本丸を責める時桜場左衛門次郎と云う頭の侍一人が討死しましたと報告した。

それでは其者達は今何処にいるのかとお尋ねがあったので、大垣落城以後は私共の方へも連絡がありませんので、国許へ帰ったか或いは未だ此辺に居るのか不明ですと答えた。　内府公は、遠国者の事であり、全てに不案内だろうから其者達の居所を尋ねて、早く津軽へ帰国させるのが

宜しいと云われたので六左衛門は答えて、津軽者の持参した長柄鑓の鞘は金の錫杖ですから、直ぐに分かると思いますと申上げた。　内府公、居所が分かったら彼等が津軽から大垣へ何処を通って来たのか、越後辺一揆の様子に付いて知る事があれば尋ねよとの事である。

そこで方々尋ねたところ、草津の宿より一里計り隔てた村の寺を借りて津軽者が止宿しているのが分かった。水野六左衛門が彼等を呼びに行かせたところ、一町田何某と云う者が出張してきたので越後辺の一揆の様子が分からぬか尋ねたところ一町田が云うには、上杉殿からの扇動で一揆が起りましたが、越後の堀殿を初め其外溝口殿、村上殿等の軍勢で一揆を鎮圧したと旅行者から聞きましたとの事だった。　水野はその旨を報告すると共に書状を添えて彼等を津軽へ帰した。

著者註　この件は旧記等の表現では大垣寄手衆の中に津軽右京と記してあるが、右京亮自身は出陣していない。　私が若い頃安芸国広島で兼重勘九郎と云う浪人がいたが、　彼は小幡勘兵衛殿の門弟であり水野日向守（勝成）方に属して島原の乱にもお供をした者である。その当時彼の刈谷以来の仲間が生存しており雑談した由を私に語ったので爰に書記す。

内府公が永原に着陣した時田中兵部大輔へ、石田三成を何とか生捕にする様にと指示したが、田中は家来達を方々へ派遣し終に三成を探し出して囚人として大津城へ差出した。　内府公は大変喜び、直ぐに鳥居久五郎を呼んで、其方の親の仇であるから預けるとの事で、その夜は鳥居の宿所に留置し衣類や食物等不自由なく世話した。　翌日鳥居は本多上野介を介して、私の親彦右衛門は御奉公の為に死んだものです。　（p370）石田は今度反徒の親玉であり天下の罪人であり大切な囚人です。　私の親の仇であるからと御預けになったので、有りがたく一晩は私の手元に置きましたが、何とかして外の方に御預け頂きたいと願った。

内府公も了解して本多上野介へ預け替えた。

籐堂佐渡守高虎が大津で夜話の会に出た時、大垣城に立て籠もった垣見や熊谷等の話題が出た序に内府公は、其方の親友の毛利民部はどうしているかと尋ねた。　高虎は、関ヶ原で敗れた連中は今頃九州方面に逃げているでしょうから、関東方の勝利は九州でも聞いている事でしょう。　日頃仲の悪かった石田を初め福原や垣見などの様子を聞き毛利は嘸喜んでいると思います。必ず彼は近日中に御勝利の祝賀に参上すると思いますと答えた。　内府公は、今頃九州の様子は如何だろうか、民部の様な小身者は軍勢も少ないので心配な事だと云った。

著者註　この事からすると今世間で流布する旧記等に、秀家、三成等に味方して大坂へ上った九州勢の中に毛利民部と記載されているのは間違いと思われる。

註　毛利民部高政（1559 - 1628）此時は豊後日隈城主、　朝鮮へ目付として秀吉に派遣されるが石田派の同役福原、垣見などと意見が合わなかった。

大津八町の新番所において伊那図書が当番の日、京都より福島政則が伺う必要のある用事で、佐久間佐左衛門と云う侍を内府公へ使者として派遣した。　その時新番所を守っている足軽が、何方の家来がこの大切な御番所の前を馬に乗って通るのかと咎めた。　佐左衛門は、私は福島左衛門大夫の使者である、　この関所は何方の関所で乗馬で通過するのを咎めるかと互いに（p371）云い争いとなり、番人の中で粗忽な者が棒を持出して、こいつにものを言わぜぬと掛って来たので佐左衛門は下馬して通過して使者の役を勤めた。　その時伊那は少々気分が悪く番所で臥せていたが、番人共の大声を聞いて戸を明けて番人達を叱るのを、佐左衛門は伊那自身の指示で番人が此様な態度をとると誤解した。

京都へ帰ると佐左衛門は政則の家老福島丹波に逢って事情を委しく報告し、その場で番人達

を討果そうと思いましたが、大切の御使に行く途中なので曲げて我慢しました。　しかし大津の番所で棒で脅されては男が立ちませんので切腹しますと云う。　丹波は直ぐにその事を政則に報告すると、政則は番人が伊那の指示であると言う佐左衛門の報告に大変立腹し、我慢ならぬと言う事であれば、その通りに切腹させよ、下手人は三日以内に取ってやるから安心せよ、との事で佐久間は切腹した。

政則はその後委しく書状に認め井伊直政へ使者を送った。　直政も驚いて関係者と相談し、政則と日頃親しくしている者二名を京都へ派遣し、伊那図書配下の足軽の中で対応した者二名を死罪に処す事で解決できないか打診した。　しかし政則は納得せず、全く私にとやかく言わず我慢せよと云うなら別だが、侍の下手人の代りに足軽程度の首を取っても済むものか　皆さんも良く考えて欲しい。　直政の方からの返事次第で私は高野に住居する覚悟を決めているとの事である。

政則の口上を大津へ帰り報告すると直政は御前へ出で報告した。　その時左衛門大夫は今度関ヶ原の戦功に誇って我侭（p372）を云っていると思われますと側の人々が言えば内府公は気色を変えて、たとえ戦功が有ろうが無かろうが人の主人たる者の身となれば、自分の家来の侍が他家の足軽等に棒であしらわれたら我慢する事は出来ない。　其上あの番所は我々父子の上洛前に諸人が勝手に京都へ入込まぬ様にするためだけの番所である。　私が今度の一戦に勝利したと云って伊那図書配下の足軽風情の者迄が権力を振い、私が言いつけもしない下馬咎めをするとはとんでもない事である。　つまりこれは頭達の指示が徹底していないからであると言われ下手人の事には言及がなかった。　しかしこの事が伊那図書に伝わると図書が自害したので問題は解決した。

著者註　この事は世間流布の記録では、内府公が政則の言い分は不届と腹を立てたと記し、

並びに図書にも切腹を命じたとあるが、そうではないと、八木但馬守が浅野因幡守へ語った事を書留めた。

十二―二　家康大坂に入城、真田家の処置

九月廿四日、毛利輝元は大坂城西の丸を出て木津の下屋敷へ閑居したので、池田輝政、福島政則、浅野幸長、黒田長政、有馬豊氏、藤堂高虎などが立合って大坂城を受取った。
同廿五日　秀頼は拓榴大炊助に大野修理亮を添えて使者として、今度の反乱について秀頼は幼年故、全く意図は知らず全ては石田治部少輔三成の悪意から起こった事であると述べた。此日に増田右衛門尉長盛は一命を助けられ、郡山の城は池田輝政に渡して高野山へ住居する様へ伝えられた。(p373)
同廿八日　勅使が大坂城へ下向し、内府卿が当城に帰られたことを賀した。

十月朔日、今度の反徒側の主導者である石田三成、小西行長、安国寺恵瓊の三人は洛中大路を引回された後、　六条河原で首を刎られた。　奥平美作守信昌の従士が警固した。

加賀中納言利長は大坂の屋敷に移っていたところ、　内府公より榊原式部大輔を使者として、今度の北陸方面における軍功を賞して廿万石余の加増の地が与えられ、　自由に帰国して良い旨伝えられた。　又舎弟の能登守利政は領知が取上げられたが、孫四郎と名を改めて京都に登り、其後は東坂本に居住し一生安楽に過した。

丹波国福知山の城に小野木佐渡介が立て籠もっているのを、細川越中守忠興単独の軍勢で

攻めたいと願ったが許可が出て出軍した。　この理由は老父長岡（細川）幽斎が丹後田辺で籠城した時、小野木が寄手の主将として攻殺そうとした事に対する遺恨からである。　そこで山岡道阿弥が彼地へ行き小野木を説得して城を渡させ、其後山岡より小野木助命の願いが出されたが赦免がなく、小野木は東山浄土寺にて切腹した。

伊勢国鳥羽の城に籠った九鬼大隅守嘉隆は、　盟友の紀州堀内安房守が関ヶ原で反徒側として敗軍となったので城を明けて退散した。　東軍に属した子息九鬼長門守守隆は父嘉隆が去った鳥羽に帰城すると直ぐに大坂へ行き、池田輝政を頼って父大隅守の助命を願ったが赦免がでない。　そこで更に福島政則にも協力を得て漸く赦され、其上二万石の（p374）加増が下され守隆は忝い次第と喜んだ。
その頃大隅守嘉隆は豊田五郎右衛門と云う者の所に蟄居していたが、豊田が謀って殺害して其首を大坂へ持たせて送った使者と、大隅守赦免の書状を持参した使者と伊勢の牛崎の茶屋で行き違った。　子息長門守は非常にがっかりし、豊田を早速斬罪とした。
註　九鬼嘉隆は1593年に家督を守隆に譲った立場だが、父子で夫々西、東軍に分かれ、鳥羽城主守隆が家康の会津攻めに従軍した留守に鳥羽城を堀内と共に攻取り籠城した。

京極宰相高次は大津の城を反徒側に和談の上明渡したところ、関ヶ原合戦での関東方勝利が聞こえ、もう一日籠城を続ければ更に忠節が尽せたのに残念な事だと家中後悔したが、既に城を出た以上どうにもならず紀州高野山へ登った。
内府公は大津に滞在中井伊直政に指示して、高次に早々山を下りて関ヶ原勝利を賀する様にと言わせたが高次は、　籠城を完遂せずに城を明けて退いたのに、何の面目で内府公へお目に掛る事が出来ようかと答えて下山しない。　直政から再三書状を送り、内府公が大坂に入城した

事も高野山に聞こえてきたので、お祝いと且又井伊直政からの度々の連絡のお礼を兼ねて
多賀善兵衛と言う者を使者として高野から送ってきた。

多賀は早速御前へ呼ばれ、久しく面会していないので懐かしく思うので、早々下山を待っている旨直接に伝えられた。　多賀は御前を去ると次の間で井伊、榊原、本多三人衆と面談し、宰相殿が良い場所で籠城されたので、関ヶ原へ来るべきかなりの軍勢を喰留められたので、我々の合戦も楽になりました、　これも偏に宰相殿のお力と思いますので早速御目に掛かりお礼を言いたい
(p375) ので、近々下山される様にお伝えされる様にと井伊等が云う。　その時多賀は、皆さんもご理解下さい、大津城への寄手は目に余る程の大軍であり、近くに味方もないので加勢や後詰めも期待できません。　内府様が美濃方面へご出陣と聞いても、世間で言う雪道を草履で歩く様なもので破れ行灯の様な大津の城で高次であればこそ一日も長く籠城しましたと語った、　三人の老中達も、確かに貴殿の言う通りですと笑いながら応じた。
其後内府公は井伊直政を高野へ派遣し、必ず連れて帰る様にと指示を出したので高次は直政と連立ち大坂へ参上すると、懇ろな言葉と共に若狭国を拝領し直に小浜の城へ入部した。

内府公が大坂城西の丸に在城の間、本多忠勝は井伊直政と榊原康政の両人へ相談したのは、
信州上田の真田安房并左衛門佐父子は大罪の者ですが何とか助命される様に取持って欲しい
と真田伊豆守が相談してきましたが、私は伊豆守とは縁者の立場であり遠慮があります。　そこで
両殿様（家康、秀忠）にお願いして貰えないかとの事である。　両人も、貴殿が言う通り彼等父子は
大罪の者だが、親子だから伊豆守の身にしてみれば当然の願いだから、両殿様に申上げて見る
となった。　其趣旨を内府公へ申上げたところ、秀忠公が納得すれば良い、恐らく了解しないと
思うが先ずは相談して見よとの事だった。

これで内府公の方は大丈夫と見て両人は秀忠公に話したところ、たいへん不機嫌となり、伊豆守
は父子であるから助命を願うのは分かる。　たとえ内府公が承諾しても安房守は忝いと云う様な者
でない。　今頃になり助命を願う位なら榊原式部も知る通り、上田へ私が出陣した時に早速降参
しなければならなかった。　その時私に手向かい、その安房守に掛りあった為に私が関ヶ原一戦を
見届け出来なかった事は心外である。　たとえ内府様が赦すと云われても私からお願いして成敗
する程の者である。　再度云って来ても無駄であると云う事でこの状況を両人は忠勝に伝えた。

其後伊豆守は三老中列座の前へ出て、此間は老父安房守の件で何かと御苦労を掛けた事を中務
（本多）から委しく聞かされ、たいへん忝く思います。　秀忠公のご意見も極めて当然と思い、兎角
は申上げません。　榊原殿も御存知ですが、上田では毎日の様に説得しましたが同意なかった
ので止むを得ません。　もう助命の御取持ちは結構ですが、私からお願いがあります。　皆様に
お世話頂いた安房守が処刑になる時、私へ切腹を命じて頂きたく存じます。　謀反人の倅ですから
其様になっても人々は納得し、裁きの障害にはならないと存じます。　親安房守が生きている間に
私が絶命するのを見せた後で処刑して戴きたいと述べた。　その詞に康政は、貴殿のお願いは
良く理解できます、安房守助命は我々が請合いますから心配せぬよう、　貴殿は昔の源義朝にも
勝る人ですと応じ (p377)、　この事を両殿様に報告したところ、伊豆守の願いの通り安房守父子
は助命されて高野へ入山となった。　その時落髪黒衣になる必要はなく、その侭安房守で良いと
云う事になった。

著者註　この事は世間流布の書物には載っていないが、土井大炊頭が子息達へ毎度話し
聞かせるのを側で聞いたと大野知石が私に語ったので書留めた。

註　真田伊豆守は安房守の長男で本多忠勝の娘婿となる。　西軍に付く父と弟に反対し始めから東軍に属した

十月廿八日、後の尾州大納言義直公が誕生し、幼名を五郎太丸、右兵衛督と言った。
十一月十八日　秀忠公が参内
今度の反徒側の大名で国を失った者の地を関ヶ原で功績の有った外様大名達に分け与えられた。結城三河守殿へ越前国、松平下野守忠吉公へ尾張国が与えられたが、譜代の人々には未だ誰にも所替や加増はなかった。

十二―三　家康の論功褒賞

慶長六年元旦　大坂城では内府公の体調不良の為に参賀はなかったが、間もなく快復あり同月十五日、列候以下全てが登城して新年の慶賀を申上げた。
二月三日　秀忠公は池田輝政の宅へ茶会に行った。　これは先月十八日に輝政が内府公より飛騨肩衝の茶入を拝領したお礼である。　この饗応の様子は以前とは異なり、将軍が訪問する儀式と殆ど変わりないものだった。　関ヶ原勝利後外様大名の居宅を訪問するのは初めてである。
此月井伊直政は上州蓑輪より近江国佐和山の城へ十八万石で所替となり、　本多忠勝は上総の大瀧から同じ石高(十万石)で桑名の城へ所替となった。　その後大多喜で本多忠朝（忠勝二男）が五万石を与えられた。(p378)
其外譜代の人々が何人か及び外様大名達へも加増による所替があるか、或いは元の石高で城地が替わる事もあった。

三月廿七日秀頼は権大納言に任ぜられた（八歳）
同月同廿八日　秀忠公は権大納言に任ぜらた。（廿一歳）
同月廿九日　秀忠公が参内
五月十一日　羽柴利光が元服（十三歳）し侍従に任ぜられ、　内府公より松平の称号が許され松平筑前守と号した。　利光は前田利家の四男(1594年生)で利長の異母弟である。
六月廿八日　利光は養父前田利長の家督を継ぐ。　利光は後に利常と称する。
同月に内府公は戸田左門を呼び大津の城地を膳所へ移転する様指示し、采地三万石を与えた。
七月廿四日、上杉中納言景勝は会津より上京した。　これは昨年以来結城秀康公を頼り赦免を願っていたが、秀康公が種々取持ってその罪が赦されたものである。
八月廿四日、上杉家が是まで領知していた百万石を減らし、米沢三十万石が与えられた。
上杉家から上納させた城地は近国の大名へ代官や役人立合で受取らせたが、最上出羽守義光が受取る筈の須田と云う城では上杉家侍の河村兵蔵及び志田修理が在城しており、出羽守へ城を渡すのを拒んで立て篭もった。　最上義光の方より色々説得したが同意しないので義光も不快となり、　義光三男の清水大蔵太夫を武将として楢岡甲斐、本居豊前、鮭延越前、里見越後、志村伊豆等の頭分を始め総人数一万余りを須田の城へ向けた。　城主志田河村、須田の城より(p379)出て最上川を前にして対峙したが、川が増水して最上軍も渡る事ができない。
そこへ昨年降参した下治右衛門と言う者が十町（約千百メートル）余りも川下から猟船に乗て川を渡り須田勢に突いて掛った。　城兵も鉄炮を厳しく打掛けるので下の部下達に負傷者や死人が

多数出るのを見た清水大蔵は川を乗渡って治右衛門を援護した。　城兵も持ちこたえられず敗走すると治右衛門は城際まで追打して多数の首を討取った。　これを見て最上軍も全て川を渡り、戸沢九郎五郎従士の戸沢相模は城下の家屋に火を付けて攻め入れば城兵は防ぐ事が出来ず、志田と河村が降参したので清水大蔵太夫は赦して両人を囚人として最上へ軍勢を引揚げた。八月廿五日上杉景勝の旧領会津六十万石を蒲生藤三郎秀行へ下された。

九月晦日、秀忠公の姫君（この時三歳）が加賀松平利光〔前田利常、七歳〕へ輿入れとなる。大久保相模守忠隣、青山常陸介忠成、安藤帯刀、伊丹喜之助、鵜殿兵庫、久志本左馬助等が送り、　越前国金津の宿で大久保相模守が輿を渡し前田対馬守が是を受取る。　青山常陸助が貝桶を渡し長九郎左衛門が是を受取る。
此秋比叡山へ寺領三千石、豊国の廟へ社領一万石を寄付する事が発表された。
註　貝桶　貝合わせの貝を入れる蓋付きの桶で嫁入り道具の一つ

十月十二日、内府公は伏見城より東国へ出発、　翌十三日佐和山城へ到着した。　井伊直政の物頭役の侍達が城門の番所の前へ出て、駕籠が近づくと頭、同心共に皆平伏して（p380）いたが番人の足軽の中の一人が内府公の御目通りの時、何か云った者があった。　物頭達は調査したところ一人が出て、お調べになる事もありません、それは私ですと云う。　其上司の頭は驚いて、何と云ったのかと尋ねると、私は久しぶりにお目に掛ったので、久々に御目にかかりますと申上げましたと答えた。言語同断なうつけ者めと頭もあきれ果て外の番所に詰める同役達を呼んで、如何したものか相談していると、中の門の番頭は急いで本丸へ来るようにとの事である。　これはきっと例のうつけ者の事に違いない、先ず彼の刀を取上げ番人を付けて置く様にと言残すと急いで本丸へ出頭した。

直政は傍へ呼んで、先ほど中門をお通りの時其方の組の番人の中で、御久しくと云った者がある由だが、其方は聞いていないかと尋ねた。　仰る通り私も聞いて居ります、お通りの後調査しその者も判りました、　恐らく乱心したものと思われますので先ず刀を取上げ、番人をつけておりますと答えた。　直政はそれ聞いて、いやそんな事ではない、その足軽に知行を与えて侍に取り立ててやれを云われたので、新たな知行を百石とする。　有りがたく思う様にと云って宿所に帰す様にと直政が云うので頭もホッとしてその旨言渡した。

さて直政が御前へ出ると内府公は、先程の足軽には知行を何程与えたのかとお尋ねがあり、百石与えましたと申上げると、髪を掻きながらよくよく役にたたぬ奴だろうと云われた。
著者註　直政が若い時代井伊万千代と云った時、内府公お気に入りの児小姓の部屋が庭続きに有ったので、内府公が庭ずたいに部屋に入る時、例の足軽が髪結の草（p381）履取として直政へ奉公しており時々目通りへも出た事があった。　内府公が佐和山の城に入る時、物頭始め組の足軽達が皆頭を地に付けている中、その足軽一人だけ頭高にして目障りになり、　不審に思っていると前述の様な事を直政が申上げ内府公も昔の事を思い出した。虚実は不明だが私が若い時、或老人が語ったので書留めた。

十二―四　東北地方の東西対決と戦後処理

去年九月十五日の美濃国関ヶ原一戦の時、譜代大名の中には合戦に参加しなかった人々も多数あった。　その一は江戸城留守居の人々、その二は秀忠公のお供で中山道を上った人々、その三は上杉景勝の監視の為に宇都宮に残った結城秀康公に付添った人々、　その四は美濃

迄の道筋にある所々の城で在番を命じられた人々である。　年数も隔たっているので人々の記憶のために爰に記す。

又外様大名の中関ヶ原に出陣しなかった味方の多くは東北の大名衆で、大身では伊達陸奥守正宗、最上出羽守義光、越後の堀久太郎である。　この三人は上杉景勝退治として内府公が下向した時、最寄の攻口を担当する事になり、内府公が白川口を攻める日程に合わせ待機していた。　しかし上方の反徒退治が優先となり下野小山から引揚げる時、これら東北の人々も軍勢を一端引揚げた後油断なく上杉の行動を監視する様指示されていた。　そのため関ヶ原一戦勝利の情報が入った後迄も上杉家の押えとして南部、戸沢、六郷、本堂などは最上近辺に陣取り、最上義光へ相談しながら監視したので間違いない味方と認められた。　その中で赤高津孫次郎など始め小山からの情報で上方（p382）の大老及び奉行達が一致して内府公へ敵対すると云う事に驚き、義光に断りなく陣を引払う人々もあり、心からの敵対行為ではないが義光の強い不興を買い反徒側と見なされた。

その頃越後は景勝が過去支配した領知であり、其上上杉家代々持ち伝えた事でもあり、景勝が支配した頃郷村の役についていた郡奉行や代官手代などを撰び密に越後の国の村々で一揆を起こし、小倉主膳が守る下倉の城を取囲み攻めた。　堀丹後守直寄は坂戸の城でこの事を聞き、応援のため下倉へ馳行き、城外の山へ着陣した。　そこから城内へ使を送り、内外手筈を定めて一揆の勢を鎮圧しようとしたが、小倉は何を考えたたかその返答もせず城門も開いて突いて出て敵陣へ切込み討死をした。　丹後守は小倉の軽挙に怒り、一揆の勢へ向って自身鑓を取て突掛り家来達も粉骨を尽したので、忽ち一揆勢を追崩して多数の首を討取った。　これを報告したところ感状を下された。

又溝口伯耆守秀勝の居城新発田は会津領と川一筋を隔て究めて近くであり、　景勝方からも何とかして攻め取りたいと色々手段を廻らし、一揆勢を集めて押寄せるとの情報が入った。そこで秀勝は軍勢を率いて新発田を出発し、阿賀野の大河を渡り逆に攻めて一揆の兵と戦い忽ち勝利を得た。一揆勢の首を幾つか討取り見せしめの為に数ヶ所で獄門にさらした後、新発田へ引揚げた。　ところが越後三条の城は丹後守の兄堀監物の居城だが、爰でも一揆が蜂起して城を取囲んだと云う事が新発田（p383）へ知らされた。

秀勝は三条の城の応援に出陣しようと軍勢も揃えたが有力な家来達が押し留め、三条城に加勢と言う事も重要ですが、当城は会津領との境でもあるので出陣は見合わせましょうと云う。　秀勝は、諸君が言う事に一理はあるが、上杉軍が攻めて来るのではないかと恐れて応援を止めた場合、一揆勢が三条城を攻落せば監物を見捨てた事になる。　其上若しも上杉軍が攻めて来なければ私の軍事の失策となるだけでなく、内府卿への申し訳も立たないので応援には行かざるを得ない、もし私の留守を見かけて津川（上杉方）の城兵が一揆勢と呼応して当城へ押寄せた場合、城門を堅く閉じ、弓鉄炮で厳しく敵を防げ、　其内には私が取って返して追い払うので、城門を開き突いて出る様にと作戦を残して三条に出陣した。　その事が三条城の寄手に聞こえると急に囲みを解いて一揆勢が退散する、これ幸と監物は城内より突て出て一揆の兵多数討取った。

結局新発田勢は応援には間に合わなかったが、秀勝は城内へ使者を送り、今回出勢した証拠にと一揆勢の村々を焼き払って新発田へ引揚げた。　二度の出勢を報告書に纏め、加治丹右衛門と云う侍を使者として注進したところ感状を下された。　しかし丹右衛門は帰りの道中で一揆勢に取囲まれ主従共に打果された。（p384）

著者註　この事は其時代の事を書記した旧記の書面にもあらましは載っている。　爰で書留めた内容は、徳永下総守が新発田へ御預けになった時、　私の養父徳永四郎左衛門がその頃は曽我市太夫と名乗っていたが、下総守の供をして新発田に滞在中、溝口家の侍中に関ヶ原合戦時代の老人が数人居り、下総守方へ出入りして語るのを聞いた由で養父が私へ聞かせた事である。

今年秋田城介は古来よりの領知を召上げられた。　理由は関ヶ原へ出陣する様に内府公から云われた時、初めは承知しましたと請けていながら其後使者を送り、自分領内で浅利与市郎と云う者が一揆を企てました、浅利は誅殺しましたが其残党が居り領内が鎮まらないので今度の出勢は難しいとの断りを入れた。　内府公からは、勝手次第で宜しいとの返答は得たが、大身の秋田家が一揆程度を押さえる人もいないのかと咎められた事による。　しかし右大将源頼朝時代から続く旧家であり、本領は全て召上げるが別に五万石の地が与えられた。

註　秋田城介　鎌倉時代から出羽秋田城を管理する官名、此時常陸に所替となり生駒を名乗る

慶長七年正月六日　内府公は従一位に昇進した。

同月十九日　上京の為内府公は江戸を出発。

二月一日井伊直政が死去、四十一歳　　註　関ヶ原戦における鉄炮疵が原因と云われている。

四月十一日島津修理大夫義久入道龍伯へ薩摩及び大隅を安堵する書状が出された。

五月八日佐竹義宣の領地である水戸八十万石を召上げ、代わりに秋田廿万石を下される。

松平周防守、松平五左衛門、由良信濃守、菅沼与五郎、藤田能登が水戸城在番を命ぜられる。

(p385)　六月十一日本多上野介、大久保石見守へ命じて、奈良東大寺の宝蔵（正倉院）を開き蘭奢待を切らせる。　その時の勅使は勧修寺右大弁光豊、広橋右中弁総光との事。

註１　佐竹家は上杉家との密約も有ったと云われ、会津征討にも関ヶ原にも出陣していない。

註２　蘭奢待は正倉院にある香木で特別な権力者に切り取る事が許された、足利義満、義政、義教、織田信長等が知られている。

七月水戸で車丹波、其子所左衛門、馬場和泉、其子新助、大窪兵蔵等の浪人者が佐竹家の元軽輩などを集めて一揆を企てた。　大窪の家人が城に忍び入ったので松平五左衛門が番所で捕らえて糾明したところ全て白状して企てが露見した。　城番の者達が相談して取調べようとしたところ、その夜中急に一揆の勢が攻めて来て三の丸を取囲んだ。　城番達は弓鉄炮で厳しく防いだので一揆勢は戦えず全て敗走した。　その翌日主導者の車丹波を捕へて其外の者も召捕り江戸へ報告した。　江戸からは安藤五左衛門と久保甚右衛門の両人が検使として出張して一揆の幹部五人を江戸へ連行した。　江戸で奉行が立合い詮議した後五人は水戸へ戻され、そこで処刑された。

八月廿九日、伝通院殿逝去、七十五歳　　註：家康生母於大　（1528－1602）

十月十八日、金吾中納言小早川秀秋死去（廿二歳）、嗣子がなく同家断絶となる。　註　病死

十一月八日、松平三郎四郎（十一歳）が遠州掛川より江戸へ参上した。　本多佐渡守の報告で内府公は新城（二の丸）へ呼び、寒い時によく来たとねぎらい、　本丸の者は誰か居ないかと尋ねると青山七郎右衛門が本丸より参上していますと側衆が言えば御前に呼び出し、是は隠岐守の三男で遠州より（p386）来た者である、秀忠へ仕えたいとの願い故、私の寄子だとよくよく伝える様にとの事で、茶坊主の吾阿弥を付添わせ七郎右衛門と共に本丸へ上ると大久保相模守忠隣を通じて秀忠公が面会した。

十一月廿六日　内府公は上京のため江戸出発

同月、武田万千代公へ常陸水戸を与える（前下総国佐倉）
註１　松平隠岐守（定勝1560－1624）　家康の同母弟（家康母於大は久松家に再嫁）寄子＝仮親
註２　武田万千代　家康五男　武田信吉（1583－1603）　病死

十二―五　浮田秀家のその後

十二月、京都東山の大仏殿焼失
この大仏殿は秀吉卿が建立した時の本尊は土仏であったため、文禄の大地震の時崩壊した。
その時秀吉卿は、　地震に遭遇して崩壊する様な不甲斐なさでは三界の導師が勤る筈も無いと
弓に矢をつがえて崩れた仏像に向って打ち放し、皆河原へ捨ててしまえとなった。
其後信濃国善光寺の如来を迎へて大仏殿の本尊としたところ、間もなく秀吉卿が病気となり、
北の政所や淀殿などから、大仏の本尊を早々善光寺へ送り返す様にとあった。　その後は本尊
なしとなったが、外国に迄聞こえた大仏殿に本尊がないのも如何したものかと相談も色々したが、
其時代迄は仏師達も不勉強だったのか木仏に造る事を請負う仏師は無かった。

一方鋳物師達は仏殿は其侭で、本尊だけを金仏に鋳たてる事を請負ったので、それは喜ばしい
と大坂の奉行は金仏を発注した。　本尊の下地を材木で組立て、その上に塀を作る時の様に土を
塗って鋳形を拵える。　本堂の後ろに山を築いてその上に溶鉱炉を築いて、仏像の頭上より溶けた
鋳物を流しかけると云う事であり、見物（p387）の貴賤は群集して見ていた。　そこで銅湯を流し
掛けたところ、どうした事か銅湯が土形の中に流れ込み、下地の材木に火が付き一度に燃上がり
仏殿迄全て焼失した。　この時大坂から見分に来ていた薄田隼人正から委しく聞いたと牧野
是休斎が語った。

註　本件は豊臣家の事業

十二月廿八日、島津忠恒が伏見へ参上し、浮田秀家が薩州へ逃下り私の領内どこでも良いから
置いて呉れとの頼みがありその様子を聞いた所、近藤三左衛門と黒田勘十郎と云う家来の侍が
付いておりますが両人共無刀の状態です。　勿論秀家も目の当てられぬ程の風情だと報告を
受けております。　彼は特別な罪人ではありますが、何とか恩赦をお願いしたいと訴えたところ、
窮鳥が懐に入れば猟師も是を殺さずと云う詞もある様に、貴殿が秀家の助命を願うのも当然では
あるが、今度の天下騒動の根元は全て秀家一人の所行である。　その仲間の石田や小西なども
死刑に処した以上、棟梁の秀家の助命は難しいとあったが、忠恒が熱心に色々御詫びするので
貴殿がそれ程言われるなら助命も考えよう、先ずは薩摩から呼寄せられよとの事であった。

暫くして秀家父子と両人の家来が大坂へ到着したので、その事を忠恒より申上げたところ両人の
家来を召出し、秀家が関ヶ原から敗走する様子や両人共刀をなくした次第など委しく尋ねられた。
両人が言うには、中山の郷と云う所で村人が多数出て、刀を渡さねば一人もここを通さぬと
云うので主人の為と思い、私共刀を片目の村人に渡しましたとの事である。　調べてみると確かに
この刀も脇指も出てきた。　そこで三左衛門は徳川家に採用され、黒田（p388）勘十郎はハ島津家
に採用となり、浮田父子は一命を助けられ八丈島へ流罪となった。

後世秀家の消息について、或時江戸の町人で八丈島から帰った者があると花房志摩守が聞き
其者を呼寄せ、　八丈嶋で浮田八郎と言う人に会わなかったか、まだ無事に居られるか等尋ねた。
その町人は、　確かにお元気です、私は時々参上してお話相手をしておりましたが殿様でしたか、
八郎様が私に云われた事は、私もこの島を赦され今一度日本の地を踏み、花房の家で米の飯の

白いのを腹一杯食べて死にたいと常々云って居られましたと語れば、志摩守は老眼に泪を浮べ、彼には目録など与えて帰した。　志摩守は其日の夕方土井大炊頭を訪ねて彼の話を語り、願わくば白米廿俵宛浮田が存命の間、協力したいので御許し下さる様に取成して下さいと頼んだ。

大炊頭も当然の事と思い、同役達へも相談して見ると言えば志摩守は重ねて、御存知の通り私は老人で明日をも判らぬ身ですから、何とかして一刻も早く御相談下さいとの事だった。　翌日の夜御用があるので来る様にと大炊頭から連絡があり参上すると、　貴殿の願い通り今日同役とも相談して上の許可も出たので、早速勘定頭へ通達して浮田八郎が存命の間白米廿俵宛伊豆の代官から頼む様にと通知したとの事である。

虚実は判らないが著者が若い頃聞いた話であり書留めた。(p389) 家光公代の始め頃と言う

註１　浮田秀家（1572－1655）　備前中納言で反徒側の看板

註２　花房正成（1555－1623）　元浮田家家老だったが秀家の代にお家騒動で追い出され、家康の旗本となった。

註３　土井大炊頭、秀忠、家光代の筆頭老中、家光在位（1623－1651）

伏見城で討死した四人の留守居衆の子息達へこの年元の知行のと同じだけ加増となった。

中でも鳥居左京亮は元の三倍になる加増で十万石下され、其上岩城へ入部するに当り、亡父彦右衛門を追善するための一寺を建立する様にとの事である。　仏具料については公義より寄付されると言渡されたので、岩城へ入部すると直ぐ寺を建立したところ知行百石の寺領も下され、則彦右衛門の戒名を寺号として長源寺とした。

十二―六　家康征夷大将軍を拝命

慶長八年二月十二日、内府公は征夷大将軍として牛車兵杖を給り、同じく淳和・奨学両院別当、源氏長者右大臣に任ぜられた。

同日越前中納言秀康公は参議に任ぜられ、従三位に叙せられた

今年板倉四郎左衛門勝重は従五位に叙せられ、伊賀守に任じ京都所司代の本職に任命された。

四月廿二日、秀頼卿(十一歳) 内大臣に任ぜられた。

七月廿八日、秀忠公の姫君（七歳）は秀頼卿〔十一歳）に輿入れした。　此時家康公（将軍）は伏見に在城し秀忠公は江戸に在城した。　秀忠公の御台所は姫君見送りのため上京し、逗留中に女子が誕生した。　この姫君は成長後京極忠高の室となる)。　姫君〔千姫）は船で大坂城へ入り大久保相模守忠隣が輿に付、その時応接の為西国大名が川辺を警固した。　黒田長政は弓鉄炮長柄等を備え、堀尾信濃守は人足三百人に鋤を持たせ船の通れない所は土砂を掘除く様に指示した。

船が到着すると大久保忠隣が輿を渡し、浅野（p390）幸長が受取った。

この輿入れ時、大坂城の大手門より玄関迄の間の通路に畳を敷き、其上に白綾を敷くという事で準備したが、片桐市正がその様な美麗は将軍の好む所では無いと強く言って止める事になった。

八月十日、　後の水戸中納言頼房公が誕生し、幼名は鶴松丸と云った。　註　家康十一男

慶長九年二月四日、　江戸より諸方への道中筋に一理塚を築かせた。　大久保石見守が監督し、同年の五月下旬には全て完了した。　石見守は一里塚の上に何か木を植えては如何でしょうかと伺ったところ、それは良い事とあったので、何の木にしましょうかと伺ったところ、よい木を植えよとの事だったが石見守は、榎を植えよと聞き違い、熱心に榎を植えさせたと言う。

四月廿日、参議秀康公が越前国拝領以後初て江戸へ参向したので秀忠公は品川迄出迎えた。
二の丸の御殿に滞在されよとの事で、大手門前の大久保相模守の屋敷を明けて、秀康公の供衆の宿として渡した。
七月十七日、江戸城内で家光公誕生（秀忠長男）
此日伏見では将軍〔家康〕が宰相秀康公の亭を訪問し、能興行などの接待があると諸人は思っていたが、以外にも相撲見物となった。　加賀の力士順礼と越前の力士追手の三番勝負だが、追手が三番共勝て勝名乗りを上げた。

今年十二月、松平伯耆守忠一が家老の横田内膳を成敗した。　理由はこの頃忠一の行いが乱れ何かにつけ手荒い事を（p391）を好み、亡父式部少輔（一氏）の代から勤める古老の者達を役からはずし近習も遠ざけ、役に立たぬ者ばかりを側近として使い出世させた。　内膳はこれを歎いて直接又は書状により意見したが忠一はそれを憎み、　出世させた安井清太郎、近藤善右衛門、天野宗葉、道家長右衛門等と相談し横田を殺害しようとした。　しかし四人の中近藤善右衛門だけは同意せず色々反対したが、　忠一は承諾せず残る三人と打ち合わせて横田を城中へ招き料理を食べさせ酒も出し、その隙を見て忠一が刀を抜いて横田に斬り付けた。

横田は疵を負いながら席を立って次の間に退くのを、　忠一と三人の者達も横田を追って次の間に出た。　そこで横田が刀を持せて置いた小童が主人の刀を引抜いて忠一に切付けるのを宗葉が右の手で是を受止め疵を負った。
近藤善右衛門は前から忠一を諌めたが聞く耳持たず、その日横田の訪問に三人の者が出ると聞きこれはもしや前からの計画で若輩の忠一が武功の横田を殺害するのではないか、　と気を付けて近くで聞耳を立てていた。　案の定騒々しくなり、やはりそうかと長刀を持って出て横田を切殺し、

例の小童は安井や道家などが切り殺した。

内膳の嫡子である横田主馬は是を聞て居城である飯山の城に取籠ると、忠一の家来の中にも柳生五郎右衛門など始め数人が主馬に味方して飯山城に立て篭もり大きな騒動となった。
隣の出雲辺にも聞こえ、堀尾帯刀と同信濃守父子が軍勢を引連れ伯耆へ向い、　忠一の部隊と共に飯山の城を取囲み急襲すると（p392）城兵も鉄炮を放して厳しく防ぐので寄手の中でも死傷者が多数出た。　しかし多勢に無勢であり防ぎきれず、城将主馬は従卒と共に自殺して終わった。

この事が江戸に聞こえると将軍は機嫌悪く、　前述四人の者及びその外数名呼付けて詮議があった。　横田内膳は将軍も御存知の者であり、最近家老も勤める者であるが何か不似合いな所行でもあったのか、その点を明白に言上する様にとあった。　三人の者達は事前に相談して若しお尋ねがあれば横田の行いが良く無い事など取繕って答える予定だったが、近藤善右衛門もその場に居るので作り話をする事もできず、内膳の行いが悪いとは思いませんと答えた。

重ねて詮議があり、横田は式部少以来の家臣でもあり其上公義で御存知の者であるが、伯耆守が若気の至りで成敗すると云った時、誰も相談して止めさせようとしなかったか、又は止めたが伯耆守が承知しなかったのかとお尋ねがあった。　近藤が同席に居るので、止めましたとも言えず三人は無言で赤面したので詮議も終わった。　暫くしてから三人共死罪となったが近藤善右衛門だけは何のお咎めもなかった。
翌年の春伯耆守が参勤の時、　品川より内へ入る事を遠慮する様にと云われ、品川内に寺を借り蟄居していた。　身上を失うか又は知行高を減らし所替なともあるのでは、と江戸中で噂されたが以外に暫くして御許しが出た。（p393）

註　中村式部少輔一氏は豊臣政権の三中老の一人であり家康よりの立場で東軍味方だったが
関ヶ原合戦直前に病死した。　中村一忠（又は忠一）は一氏嫡子で、父の功績により米子
十七万石当主（1590 - 1609）となり、この時十四歳。

十二―七　徳川家の隆盛と世代交代

今年松平三郎四郎定綱に下総国山川領内の内五千石が与えられる。
慶長十年正月九日　将軍（家康）は上洛のため江戸城を出発
二月廿四日、秀忠公が江戸を出発し、京都に向かう
四月十日、　将軍が朝廷に参内する
四月十二日、秀頼卿が右大臣に任せられる（元内大臣）　註十二歳
四月十六日、秀忠公は征夷大将軍源氏長者淳和奨学両院別当を勅許され、内大臣に任ぜられ
正二位に昇進
同日結城三河守秀康公は権中納言に任ぜられ、松平下野守忠吉公は左中将に任ぜられ従三位
に叙せられる、　上総介忠輝公は左近衛権少将に任ぜられる
註１　松平定綱　家康異父弟（久松）定勝の三男　（1592 - 1652）
註２　秀忠は家康三男　二十六歳、　結城秀康は家康二男三十一歳、松平忠吉は四男二十五歳、
松平忠輝は六男十三歳

今年大御所（家康）は榊原式部大輔康政の娘を養女とし池田輝政息男右衛門督利隆に嫁がす。
輝政の室は大御所の姫君であるが、利隆は別腹で中川瀬兵衛清秀の娘の腹に出生した。
輿入れの日は青山播磨守忠成が輿を運び、土井大炊頭が貝桶を渡す。　安藤対馬守、鵜殿

兵庫、伊丹喜之助などが輿に従う。　浅野弾正、黒田長政が餐膳の相伴をして加藤清正、浅野
幸長、蜂須賀至鎮、加藤嘉明など接待役で前代未聞の婚礼だと話題になった。

慶長十一年四月榊原康政病気の由が将軍家(秀忠) に報告されたので、酒井雅楽頭、土井
大炊頭を館林の城へ見舞いとして派遣した。　医師の延寿院玄朝も上意により館林に詰めて
(p394) 治療に当った。　度々上使により病状を尋ねた。
同年五月四日榊原康政が死去した（五十九歳）。　阿部備中守正次を上使として喪を尋ねた。
同年九月昨日島津忠恒が伏見城へ呼ばれ、大御所の指示で松平の姓が下され家久と号する

今年浅野弾正長政は常陸国真壁に五万石、近江の愛知郡で五千石を下さると上意があるのに
請けなかった事が大御所の耳に入り弾正に、其方は真壁城地を辞退したそうだが其方一代の
問題ではない。　紀伊守（長男幸長）は国主であるが、他にも右兵衛と采女の二人の子供が居る
のに余計な辞退である。　将軍（秀忠）が呉れると云うのは幾らでも貰って貯めて子供達に譲る
心掛けが必要だ、との御意があり翌日になって請けた。　後日紀伊守が病気で死去したが子供
が無く、　舎弟の右兵衛長晟が始め秀頼に仕え其後北の政所に付いていたのが紀伊守幸長の
家督を継ぎ、三男采女（長重）が弾正隠居跡の真壁を拝領した。

慶長十二年三月五日、松平薩摩守忠吉公は江戸で病気となり、快復したとの事で尾張に戻る
途中、　品川の駅で死去した（廿八歳）ので遺躰を増上寺に移し葬送した。
遺体を増上寺に移した時、尾張犬山の城主小笠原和泉守が葬儀の役人を呼んで、殉死の面々
が入る棺四人前準備する様にと指示した。　役人は了解しましたと席を立ち聞合わすと石川主馬、
稲垣将監、中川清九郎の三人の外には居ない。　これは和泉守の思い違いではと (p395) 再度、

お供の人々の棺を貴殿は四ツ必要と云われますが三人の様です。　他の事と違い棺を余分に準備するのは如何なものでしょうと云えば和泉守は、私の云い付けに余計な気を遣うなと人前で言われて役人も不快に思い、殉死三人は誰々と判っていますが、今一ツの棺には誰が入るのですかと尋ねた。

和泉守は、其棺が必要な事は私に考えがあり準備をするのだ、万一其棺へ入る人が無ければ此和泉守が皺腹を切て棺を塞ごう、心配せずに早々準備せよと云うので棺の数四ツを用意したが三ツは塞がったが残る一ツは不要である。　方丈の片隅に押込んであるので、例の役人が仲間に向かって、棺の余分は不要と私が云うのに余計な事を言うなと、うつけ者の様に和泉守に言われたが今でも棺は余っている。　人前で私に云った口上の手前、たとへ御家老であれ皺腹を戴きたいものだと広言した。

この時和泉守息子の監物は、薩摩守忠吉公の機嫌を損ねて奥州松島に蟄居していたが、薩摩守の死去を父和泉守が早飛脚で知らせたので殉死する覚悟で増上寺に駆けつけた。　和泉守はこの事を方丈へ伝え、監物は落髪して長上下（出家の服装）を着して太刀の折紙を持参し、存応和尚の位牌に向って、小笠原監物は御勘気を赦されお供にお連れ戴き忝い次第と披露した。その後で親の和泉守が出て（p396）同じく存応和尚の仏前へ向って、和泉守の倅監物は御勘気を赦されお供に連れて戴き忝く思いますと云った。　其夕方監物は切腹し例の棺も塞がった。又監物の家来の佐々喜蔵と云う者も監物の為に殉死した由である。

同年閏四月八日中納言秀康公が越前北の庄の城で逝去（三十四歳）し、その家臣土屋左馬助、永見右衛門等が殉死した。

秀康公は病中に於佐の局と云う大御所も御存知の女中を駿河へ派遣して口上に、去三月五日に尾張の薩摩守殿が死去され、私も病気がはっきりせず快気に見通しも立ちません。　在世の内にこの事を申上げたく思い局を派遣いたしましたとある。　局が駿府へ上りこの事を申上げると家康公は驚いて、私には子供は多いが中でも秀康は惣領に生れ、其上度々私の為役に立った者なのに越前一国だけを与えて置いた事は今更悔まれる。　今度病気の快気の祝儀として廿五万石の地を加増して百万石にするので其方も急いで帰りこれを報告せよと上意があり、近江と下野の中で廿五万石とある書付を局に渡した。

局は喜び急いで帰る途中、岡崎の宿で秀康公が逝去した事を聞き、駿府へ取て返し直に御城へ上った所、大御所は囲碁を打っていた。　そこへ局が参上して中納言は養生叶わず逝去した事を伝えると大変悲しまれた。　局は例の加増の書付を取出して、大切の御書付ですからと差上ますと云えば、女性の身で気配りが良いと受取られた。
此事を越前の家中の人々が伝え聞き、局の余計な機転の利き過ぎと言い合った。

慶長十三年四月廿四日、右兵衛義直公へ尾張国を与えられる（其前甲斐国を領す）＊家康九男
同年十月四日　秀忠公に女子（後の後水尾天皇中宮、東福門院）江戸城で誕生

慶長十四年二月廿一日、島津家久は琉球国征伐の件で両御御所（家康、秀忠）へ伺いを立てたところ、その様に任せるとの事だった。
同年九月、西国（九州、四国、中国）の諸大名が所持する五百石以上の軍船は以後禁止となり、全て召上げ駿河や江戸へ回航する事が命ぜられた。　その責任者として九鬼長門守重隆に向井将監と久永源兵衛の両人を添えて、三人が淡路国へ渡海して調査した。　これら大船の内

一艘（紀伊国のものと云）は池田輝政に下され、翌年に二艘は九鬼重隆に下された。
同年十二月駿河、遠江の両国を頼宣公へ与える。
註　家康十男、後の紀州家
此年江戸城本丸と西の丸の間に新に舞台が出来、能興行があり両御所が桟敷で上覧し譜代及び外様の諸大名も見物も招かれ料理も出された。

落穂集第十二巻終

落穂集第十三巻（p401）

十三―一　大御所駿府にて政治を取る

慶長十五（1610）年閏二月二日、堀越後守忠俊の家臣堀監物と其弟丹波守が兄弟間で争いを起こした。　忠俊の一門は此争いが内々で解決せず公義の裁許と成れば、越後守の身上にも支障が出ると恐れ、色々仲介をするが丹後守は受け入れず終に駿府へ出頭し大御所へ訴えた。
此日御城へ堀兄弟を呼んで諸大名列座の中で兄弟が対決する事になった。　その時丹後守が言上した事は、　監物は国で私的に浄土と法華教の僧達に宗教論争を行わせ、是非を判断して浄土宗の僧十人に縄を掛けて殺害した事を訴えた。　大御所は障子を隔てて聞いていたが自身で障子を開けて（p402）不機嫌な様子で、其宗論の是非を判断したのは誰かと尋ねた。
監物は、知者により其是非を判断して非の方を処分しましたと答えると再度上意があり、争論は天下の禁止事項である、それを妄りに行わせ其方の悪意により是非を判断して僧達を殺害するとは言語道断の不届きである、　この一事だけで十分であり外の事を聞く必要はないと障子が閉められた。　監物の負裁判となり、監物は最上出羽守へ御預けとなり、越後守は家臣の論争を鎮める事が出来ない器量なしであり、　国郡の主として置く事は出来ないと越後の領地を召上げられ岩城へ配流となった。　丹後守は罪科は無いとは云え、五万石の領地は取上げ代わりに信州の内に新たに三万石が与えられ以後直参となった。
同月三日、上総介忠輝公に越後国が与えられた。　夫までは信州川中島が領知だった。
八月六日、島津家久は琉球国の中山王を携えて駿府を訪れ、同八日に登城した。　中山王は

大御所に拝謁して段子百巻、羅紗百十二尋、蕉布百巻、大楽布二百巻を献上した。
註１　松平上総介忠輝　家康六男、後に改易となり自殺
註２　1609 年の薩摩の侵攻で琉球王国は薩摩の属国となった。

十月十八日、本多中務大輔忠勝が死去した、行年六十三歳。　其子美濃守忠政が後を継ぎ伊勢桑名十万石を拝領した。
この年井伊掃部頭直孝（井伊直政二男）へ上州の内に二万石が与えられた。
この年秀忠公より山内対馬守に松平の姓及び諱の字が与えられ、忠義と号して四品に叙し土佐守に任ぜられた。

慶長十六（1611）年三月六日大御所は上洛の為駿府を出発し同十七日に京都到着した（p403）
同廿一日勅使が訪れ、大御所を太政大臣に任じ菊桐の紋を勅許となる旨が伝えられた。
大御所は太政大臣を辞退し、新田家の元祖大炊助義重を鎮守府将軍及び亡父広忠に大納言の贈官を勅許される事を願った。　又菊桐の紋の事は有りがたい事であるが、　源家は新田と足利に分れて両家は互に武威を争った。　後醍醐帝の時足利尊氏に菊桐の紋が免許された以来は足利家の氏族が古来より是を用いており今になって初めて新田の家にこの紋が勅許となっても、当家の名誉とならないので、この事を奏達願いたいとなった。
三月廿日、新田大炊助義重に鎮守府将軍が賜られ、　松平広忠に大納言を贈られる旨勅使大納言兼勝が伝えて来た。
註　徳川家康は三河岡崎の城主松平広忠の子であるが、新田氏の末裔と言う事になっている。
新田義重は源義家(八幡太郎)の孫で新田氏の祖（1114 - 1135）

三月廿八日、秀頼卿は大阪城を出て二条の御城へ上って大御所と面会して接待を受けた。
秀頼卿が大御所に面会する為に上洛する事は今まで前例もなく、　上京は如何なものかと側近は疑問視した。　しかし浅野幸長、加藤嘉明の両人が上洛面会せぬ場合には秀頼卿の為に宜しくないと強く進言した。　福島政則は病気と称して大坂に残ったが、加藤肥後守清正、同左馬助、池田輝政、浅野幸長等が秀頼卿の乗輿に付添い皆二条城に控えた。　肥後守清正一人が城内迄行き御前へも呼出され刀等拝領した。　秀頼卿は二条より直に北の政所（秀吉正妻）の亭へ行き、成長後初めての面会となった。(p404)
秀頼卿が二条城参上の時、中将義直公（家康九男、後の尾張徳川家祖）及び少将頼宣公(家康十男、後の紀州徳川家祖）が途中迄迎えに出たとの事
四月二日、今度秀頼卿が上洛した返礼として、義直、頼宣両公に大坂へ訪問させ贈り物等持参した。

三月六日、浅野弾正長政死去、行年六十五歳。
同年六月廿四日、加藤肥後守清正死去、行年五十歳。
同年九月廿八日、将軍家の姫君（その時四歳、後の高田殿）は三河守忠直へ輿入れし、越前へ向かう。　土井大炊頭が輿に随い、其外渡辺山城守を始め数人が添えられた。　駿府に一日逗留したが、二の丸で大御所が歓待したとの事。
九月廿五日、広橋大納言兼勝と勘修寺中納言光豊の伝奉衆より、春日若宮両社の千木折落れました、これは古来より天下の凶事ですと連絡して来た。　その時大御所は、これら両社共に建立以後数年を経ているので朽折れる事もあるだろう、　将軍家へ訴えて修復を願うが良いと答えた。
此年越前国松平三河守忠直の家来久世但馬（一万石を領する）と岡部自休と云う奉行職の者と

諍いがあり、家老の今村大炊、清水丹後、林伊賀、中川出雲等は自休に荷担した。　今村と同職の家老本多伊豆及びその外牧野主殿、竹島周防等は元々自休側に非があり但馬に誤りがない事を知っており、家内の評議が二ツに割れて結論が出なかった。　忠直は今年十七歳の若輩であり正しい判断もできない中、　但馬に非が有ると聞惑い但馬を成敗しよう討手を向けた。

そこで但馬は従卒百人余りを従え、飛（p405）道具（鉄炮）を用意して自宅屋敷に閉籠った。その為北の庄中の諸侍が我も我もと馳付て塀を乗越えて久世但馬の家人従卒を全て成敗したので但馬は自殺した。　しかしその後も争いは収まらず越前家中の騒動は続くが、この事は江戸へ聞こた。その時伊予守忠昌（忠直弟）は十六歳の若年だったが将軍家(秀忠)に可愛がられて毎日登城していた。　ある日老中列座の場で、私に御暇を下さいと申し出たので老中は、それは何の用で何処に行かれたいのかと尋ねた。　忠昌は、この頃北の庄家中で大へんな騒動が起こっていると聞きます、　御暇を戴き私は越前へ行き、兄三河守と相談して何とか収めたいのですと云う。

老中方は、さても貴殿は奇特千万な事であると皆感心して将軍家へ報告したところ、大御所へも報告された。　大御所もたいへん感心はしたが、あの子倅が行ったところでどうにも成るものでもない、裁判の為双方共早々に来させよとの指示があった。　そこで当事者双方が江戸へ下って一日西の丸で御前対決となり、その結果本多伊豆守が報告した通りで決着が付いた。今村大炊を始めその仲間は全員配流となり、　本多伊豆、牧野主殿、竹島周防は越前へ帰した。

註　越前北の庄（後の福井）では城主の結城秀康（家康二男）が死去し、嫡男忠直が継いだ直後お家騒動が起り、結局家康の裁判となった。

慶長十八（1613）年正月廿六日、池田三左衛門尉輝政が播州姫路で死去した、行年五十歳

七月九日、大久保石見守の息子藤十郎と外記兄弟が成敗された。父石見守が今年四月廿五日死去したが、死後悪事が（p406）が露見した為という

八月廿五日、浅野紀伊守幸長が紀州和歌山で死去した、行年三十八歳。　嗣子が無い為弟の右兵衛長晟を駿府へ呼び、兄の後継を命じ紀州を与えた。

註　大久保石見守長安は能楽師だったが、財政手腕を家康に見込まれ異例の出世をした。しかし彼の死後、在任中の汚職などが露見し、子供達迄成敗された。

十二月六日、大御所が関東で鷹狩をして駿府へ帰還する為、途中の相模国中原に到着した日、馬場八右衛門と云う者が大久保相模守忠隣に異心がある事を言上した。　そこで本多佐渡守へ内密に調査を命じ、それから江戸城へ戻る為稲毛に到着したが、将軍秀忠とここで落ち合い閑談した後、大御所は江戸城へ入った。

慶長十九（1614）年正月十七日、大久保忠隣を京都へ派遣し、キリスト教を厳禁する様にと指示した。

同月十八日、最上出羽守義光が死去した、行年六十九歳。

同月廿日、大久保忠隣の罪科の調査が終わった。

同月廿二日、　安藤対馬守、本多出雲守、浅野采女正、松平越前守、高力右近大夫の五人へ忠隣が在城する小田原城を請取る様に命じた。　忠隣の二男右京亮と三男主膳は武州川越へ預けられ、嫡孫の仙丸が父加賀守忠常の跡を継ぎ二万石を拝領した。　しかし祖父忠隣は蟄居を命じられた。

二月二日、大久保忠隣は井伊右近大夫直勝へ御預けとなり京都を出発し近江佐和山へ行く。

大久保相模守が御預けとなった日、誰が云いだした事か忠隣は何の罪も無いのに江戸で人の讒言で身上を失った。　今度供で上洛した家来達が徒党を組み（p407）、主人忠隣を奪い取って旅宿に火を付け禁中へ立て籠もると噂が流れ京都中の騒動となった。　忠隣はこれを聞くと江戸から持参した弓鉄炮、長柄槍、持槍等に至る迄全て縄で縛り、使者を添えて所司代の板倉伊賀守方へ持ち込ませたので、その噂は消滅した。

其後井伊直孝は用事があり上洛して佐和山の城へ立寄り忠隣へ面会した時、貴殿は功績ある人なのに何故こんな事になったのですか、何か思い当る事はありませんか、と日頃親しくしている相手なので尋ねてみた。　それに対し忠隣は、全くの所私には覚えの無い事ですと答えたので直孝は再度、本当にそうであれば何か申し開きする事もできるでしょうに、そのまま黙っているのは理解できない事ですと言う。　忠隣は、確かに貴殿の言う通りです、明日にでも上より詮議があると云う事であれば申開きもできるでしょうが、私の方から申し開きはしない覚悟です。　もし申し開きが通ったとすると、上（大御所）が讒言に惑わされたと世間で言われる事は明らかです。それは決して上の為になりませんと答えたので直孝は深く感心したと言う。　虚実は判らぬが世間で云われた事なので書留た

註１　大久保忠隣（1553－1628）　家康譜代の家臣で大久保忠世の嫡子。　嫡男忠常は病死

註２　井伊直孝（1590－1659）井伊直政二男、長男直勝が病弱な為、井伊家の本家を継ぐ

三月七日、高山右近はキリスト教から改宗をしないので南蛮国（フィリピン）に追放された。松倉豊後守が島原の城を拝領した時、公儀（将軍家）へ申請し、南蛮国を自力で占領したいと云う希望で調査の為に侍二名、足（p408）軽廿人程、高山を訪問する名目で南蛮国へ派遣した。しかし一人の侍は船中で病死して吉岡九左衛門と云う者がフィリピンに着岸した。　右近に面会

したが日本で言うなら長崎の様な場所でかなり大きな家に住んでおり、朝晩の何の不自由も無い様に見えた。

南蛮の都（マニラ）辺に寄付ける様子はなく、松倉豊後守からの書状も封の侭で贈り物等と共にその地の奉行か目付の様な者が六七人来て受け取り、　都へ持たせた様であった。　都は余り遠くは無いようで往復五日程である。　書状と贈り物は少々が都送られ、残りは高山に帝王から賜られた様である。　九左衛門は別宅に置かれ、高山の前に出る時は南蛮人が四五人程宛側に付いているので到底秘密の相談はできなかった。　又その時召連れた足軽廿人の内十八人余りも船中にて死亡したと言う。

海路に松の生えた島があったが其松の木の上に布で覆った様に大蛇がいた。　この蛇どもは船を見掛けると海上を泳いで来て船の後に付いてくる。　船員達は慣れているのか、握飯を紙に包み薪に結付て投げ出す。　すると大蛇は銘々是を咥えて島へ戻って行く。　船頭によれば、これはあま龍というもので何の悪さもしないと云う。　長さ二間余あり日本の蛇とは大きく異なり、頭に毛が生えている様に見え、四足で眼は特別光ると言う。　私（作者）が若い時広島で吉岡九左衛門から直接聞いた。　九左衛門は知行（p409）千石で浅野家で先手物頭の組頭を勤めていた。

十三―二　国家安康鐘銘事件

慶長十九年三月九日、将軍秀忠は従一位右大臣に昇進する

同月廿一日、京都大仏の供養が有るとの事で秀頼卿の名代を兼ねて大仏建立の総責任者の

片桐市正及び同主膳、其外諸役人が大坂より京都に行き、　導師は三宝院と如法院の両門主及び其外著名な僧徒が参集して大きな催しが予定された。　ところがその前日板倉伊賀守から片桐に、明日の大仏供養は延期されるのがよい、理由は清韓長老が書いた大仏の鐘の銘の文句の中に所庶幾者国家安康と有るが、これは秀頼卿が大御所を調伏する為に大仏を再興する様に聞こえます。　駿府では前将軍(家康、大御所)はたいへん立腹しているとの事です。　今無理に供養を進める事は宜しくありませんと云う。

市正は、云われる事も解りますが、この鐘の銘は秀頼自身の意見でもなく、つまる所韓長老の不手際です。　既に全ての準備も調い明日が供養ですから、今延期する事は困難です。　全ては私の責任にして先ず供養を行い、その上で将軍、大御所からお咎めがあれば私の落度として切腹する覚悟ですと言う。　伊賀守は、　その様に成されては貴殿の申分は立つかも知れぬが、私は不肖と云えども所司代職を勤める身ですから、前将軍(家康)を調伏の為とある大仏殿の供養を中止せず供養を行わせたとなれば(p410)私の立場は全くありません。　通常でも供養の時は人混が多く与力同心等を警固に出しておりますが、この様な状況では尚更やるべきではありません。　兎に角延期されるのがよい、それは秀頼卿の為ですと云うので市正も止む無く供養を取止めた。
大仏近所では十日程前より準備をした売店を急に取り壊し、遠方より上洛して集った貴賤、僧俗共に興味を失い離散した。　そのため国家安康の鐘の銘の事は諸国一様に話題となったと云う

米村権右衛門は以下語った、私の前の主人大野修理亮と片桐市正は初め関係も良好でしたが後に仲が悪くなりましたが、　これは大仏再興の時分からです。　片桐の考えは異国に迄聞こえた大仏殿が消えるのも如何なものかと再興すべきとの意見でした。　一方大野は異国に迄有名となり日本国の看板ともなるものなら将軍家(徳川家)で建立するのが宜しい、　以前の大仏殿は太閤の

威勢で建立したものだが、今の秀頼卿の立場では再興する理由がないとの考えでした。　一方の家老片桐が奉行として建立を執行する事になり、内心では悔しい思いもありました。　特に大坂城中の金蔵から大量の金銀が大仏建立費用として度々流出するのも修理が気に入らなかった所ですが、　鐘の銘の事で問題が起きた頃から特に仲が悪くなりましたと。

大阪冬夏両陣の原因はこの大仏鐘の銘及び棟札の文字であると世間で言われ、その時代の事を(p411)記した書物でも見られるが、　或いは一説では加州中納言利長(前田利長)に秀頼卿と母淀殿が故太閤以来の事を述べて近い内に何か頼みごとがある旨伝えた。　利長からの返答では、近く何か御頼みとの事ですが、もし財政的に苦しく金銀が必要と言う事であれば一年間ですと云った書状について本多安房守に駿府へ報告させた。　大御所は次第に歳をとり、今後の事を心配したと云う。　虚実は判らぬが書留める。

著者が若い頃大坂物語と云う書物が上下巻あり、この外には大坂両度の戦いを書記した書物は無かった。　そこで阿部豊後守忠秋殿が老中の時、万年不休と二階堂才兵衛と云う者二人に命じ難波戦記と云う書物を出させた。　この不休は阿部備中守正次に気に入られ、常に側近に侍り古い咄を聞いていた。　又自身の才智もあり、諸大名方の家々に伝えられた事を聞き合わせて書記したので難波戦記は当世の正記録とも言うべき物である。
従って大坂両度の陣については特に書く必要もないが、万年不休や二階堂が聞き落とした事や聞き間違いと思われる事等を少々以下に述べる。
註　　阿部豊後守(忠秋 1602 - 1675)老中期間 1633 - 1666　阿部正次(1569 - 1647)　大坂城代

大仏鐘の銘の申訳のため片桐市正、同主膳及び大野修理の三人が駿府へ派遣されたが、三人

は府中へ入る事を遠慮して鞠子の徳願寺に止宿した。　その趣旨を本多上野介方へ連絡した処、上野介は、そちらでお待ち下さい、こちらから伺いますとの答え、この事を大御所に言上すると安藤対馬守直次、成瀬隼人正政成（p412）及び上野介が鞠子へ行き詳細尋ねる様指示あった。彼等が鞠子へ行き、片桐等三使に対して伝えた事は、私達は未だ上意をはっきりとは聞いてはいないが、　秀頼卿の行跡が宜しくないと駿府に聞こえ江戸からもその様に報告されている。内容は諸国の浪人を呼集め、又近習の人々に武器の準備をさせて偏に合戦の用意をしていると聞く。　其上今度大仏の鐘の銘及び棟札等に認めた文字は何れも将軍、大御所の考えに反するとの事、皆さんはどの様に考えているのかと質問した。

これに対して三使の答えは、新に武器を準備し、諸浪人を呼集めていると云うのは皆人の噂です。大仏鐘の銘に付いては秀頼が考えた事でもなく、単に筆者の誤りです。　その為韓長老も連れて来ておりますので調査して下さいとの事である。　韓長老は此時彦坂九兵衛へ預けてあり、上野介宅へ呼寄せて質問もした。　三使は四月中より六月迄鞠子に滞在したが、特に何も沙汰が無いので片桐より上野介に返答を頼んだ。　上野介はその旨申上げた処、大御所からは返答は無く、以下の様な意見があった。

故秀吉の末期の遺言により、幼少の秀頼を守って天下の諸大名も尊敬する様にした事は偏に私の功績ではないか。　それを慶長五年には秀頼の命と称して、毛利・浮田・上杉等の大老職及び石田・増田・長束以下の奉行達が相談し、諸大名を語らって何の咎も無い私を討果そうとし、濃州関ヶ原で一戦となったが、私に武運があり小勢で大軍を切崩した。　徳川家の運を開く上は（p413）その時秀頼も討果した方が良いと皆が云ったが、秀頼は未だ幼年であり其上故太閤の事を思えばこそ助命したものである。　のみならず大坂の城地を替えずに其侭差置き一国の主とし、更に縁組

迄した事を有りがたく思うべきで、次第に老衰する私や新将軍も同様に大切にすべきである。ところが諸浪人を集めて武器をを貯え、其上今度鐘の銘や棟札の認め方などは思いも寄らぬ事である、　そうではないかと大御所が言われたと上野介が語ったので三使共に恐縮して以後は静かに逗留した。

註　秀頼の正室は将軍秀忠の娘千姫で大御所家康の孫になる

そこで六月末になり大御所は上野介へ、片桐兄弟と大野修理共に当地に居て大坂は大丈夫かと尋ねられたので上野介はその事を通知した。　三人は相談の結果、片桐市正だけを鞠子に残して置く旨上野介に伝えて、修理と主膳は大坂へ帰り詳細を報告した。　秀頼卿、母公共に心配になり八月上旬に大野修理の母大蔵卿、渡辺内蔵介の母正覚比丘尼、渡辺筑後の母二位の局の三人を駿府へ派遣した。　この三人は以前も時々駿府城を訪問したが、今回は遠慮して七間町と云う所に宿泊して、上野介及び阿茶の局の両人に案内を頼んだ。　早速面会許可があり三女中は登城して御前に出ると大坂の事を色々尋ねられ以前と同じ様に親しい様子だった。　大御所の機嫌を見ながら、今度大仏の銘と棟札の文字がお考えに合わなかった事を秀頼、母公共にたいへん（p414）困惑している事を申上げた。　大御所はそれを聞くと、母公はさぞ心配している事だろうとそれ程機嫌も悪くない様に見えたので三女は喜びその様子を市正にも告げ大坂にも報告させた。

其後三女中は上野介へ、そろそろ鷹狩りの季節ですから御暇したいと云った所、皆さんは此処迄来た事でだから序に江戸へも行き大坂では皆無事だとと云う事を語ってはどうか、と大御所の意見もあり江戸までの道中は万事を上野介が手配して三女中は江戸へ向かった。

十三―三　片桐旦元市正の苦心

其後本多佐渡守と天海上人が二人連れで鞠子へ来て片桐市正と面会した。　佐渡守は、今度大仏の鐘の銘と棟札の書様及び大坂城中へ武器の集積は偏に合戦の準備であると天下の人々の口に上り、　世の中が騒々しくなるのも当然です。　今になり貴殿が幾ら弁明しても夫は無駄です。　何とか貴殿に考慮戴き将軍の気持ちを変える方法も無い訳ではありませんが貴殿はどう思われますかと問う。　市正は、皆さんにそう云われても、差当たり私の思い付く事も有ませんが、もし良い案がありましたら遠慮なくお聞かせくださいと答えた。

佐渡守は、それでは私の考えを三つ云います。　一つは秀頼を侘しい所へ所替をお願いするか、次は他の大名と同様に江戸へ参勤し、往復の折には駿府に暫く逗留されて前将軍の御機嫌を伺うか、又は母公を江戸に証人として差し出すか、この三つ以外は（p415）思いつきませんと言う。この時天海僧正が云うには、佐渡守が云った三ケ条の中で、母公を江戸へ下向させる事は太閤の時代にも大政所（秀吉母）を岡崎の城へ差出された前例がありますと述べた。　市正は聞いて、この三ヶ条共にお二人の思い付きだけではないと推察しますので確かに承りました。　しかし直ぐ返答も出来ませんので、十分考慮して後日に御相談しますと云う事で、両人は駿府へ帰宅した。

其後八月十五日になると上野介方より連絡してきて、徳願寺は少し遠く頻繁な会合も難しいので府中（駿府城下）へ来られるが良いとの事で市正が府中へ移ったところ、九月九日の諸大名出仕の時、市正も登城せよとの仰があった。　市正が登場して表向きの挨拶が済んだ後、大御所は市正を召出し、長い間滞在している事を聞いたが大儀である旨の上意があった。

其後大御所は市正に尋ねた事は、最近大坂では諸国の浪人やあぶれ者が大勢入り込んでいると聞く。　秀頼が彼等に扶助を加えて抱えていると云うがこれは何の為か。　又武士であれば

武器の準備をして置く事は当然ではあるが、最近になり秀頼の旗本の侍達が大坂町中で人々が怪しむ程武器を買い集めているのは何の為か。　其上今度大仏の鐘の銘と棟札の認め方はこの家康を調伏する宿願だと世間では広く言われている。　其方はこれ等を如何思うか等である。

市正が謹んで答えた事は、　上意のご趣旨は当然とは思いますが大坂に諸浪人を集めている事は秀頼の招きによるものではありません。　大坂や堺は下級の者達が生活するのに便利であり、その上奉公を願う浪人達は九州、四国、中国（p416）の諸大名家の情報を取る為に、我も我もと入り込んでくるものです。　万一秀頼に反逆の志が有れば故太閤に恩がある大名方も多い事ですから、同意するかどうかは別に彼等に頼むはずです、縁もゆかりも無い浪人を招き集めその力で徳川家に敵対する事考えられません。　秀頼の方からの依頼状が一通でもあるか、諸大名方へお尋ねになれば明確になります。　それから大仏鐘の銘の事は秀頼の考えで指示したものではなく、全て筆者の不手際でございます。　もし密に御前様を調伏しようと云う気持ちがあれば、天下の人々の耳目に触れる京都大仏の鐘の銘等に書く訳がございません。　これ等の事をご理解下さる様お願いしますと述べた。

大御所は、秀頼に反逆心がある事は間違いが、其方がそれ程述べる上は先ずはその通りとしよう。ところで秀頼は江戸の将軍（秀忠）と同じ様に私へ孝心を尽すべきものなのに、それも無く当家へ敵対の様子が世間では言われている。　私も七十歳になるので明日は分らない、私が死んだ後将軍と秀頼が不和になり天下の騒乱となるのは鏡に見る様に明らかである。　秀頼と将軍に水魚の交りをさせ天下泰平の計がなければ成らないが、其方も深く考えて見られよと云った。

市正は聞いて、上意の事は御尤もですが、天下泰平の大儀を私如きの愚案では到底及ぶもの

ではありません。　しかし秀頼が大（p417）坂の城地を去て外へ移るとか、又はこの駿府や江戸に参勤して親交を深めるとか、或いは母公を江戸へ差出すとかあれば自然と天下の噂も止むとは思います。　しかし此三ケ条は皆軽い事ではなく、私の一存で決める事は出来ません。　大坂へ帰り秀頼並びに母公へも伝えて、其上で私が参上するか、又は大野修理が参上し委しく言上致しますと答えると大御所も機嫌良く、親しみある上意があり市正は御前を立った。

市正は上野介へ向って、貴殿もお聞きの通り三ヶ条に付いて私の考えを述べた中で、母公を関東へ送る事は先例もあるので多分問題ない様に思います。　その場合江戸の品川辺に四五町（五百メートル）四方程の屋敷を与えられるのでしょうかと尋ねた。　上野介がその点を御前に出て伺いを立てたところ、どれ程でも望み次第との御意があり市正にその旨伝えた。

大御所は再度市正を呼び、いつでも好きな時に大坂に帰る様にとあり、其上紅裏の付いた紋付の小袖を下さったので、それを戴いて御前を立ち帰宅した。　市正は元々本多佐渡守の縁者であり其上長年親しくしてきた人々も多かったが、徳願寺で蟄居の様子なので皆が面会を控えていた。ところが御前向に別条はなさそうと見えたので、人々の贈り物や手紙などがどっと押寄せた。

その頃江戸に向かった三人の女中が帰って来て七間町の旅館ではなく大野壱岐守屋敷へ落着登城して江戸の様子等を報告した。　御城の女中方とも雑談したところ、大坂の母公（p418）様もやがて江戸へ移られるとの事ですから、今後はもっと気安く時々お目に掛れるでしょうと、皆が集り喜んでいた。　三人の女中はたいへん驚き疑心を持って市正の旅館を訪問して様子を見たところ、諸方の贈り物や書状が山の様に積上げられ室内は非常に賑わっていた。　益々疑念が沸き情報を集めたところ、市正殿は大御所様にたいへん気に入られて御紋付の小袖なと迄頂戴したとの事を聞くと三人の女中は市正を疑い憎んた。　この事から全てが起り終に秀頼が滅亡

する事になった。

著者註　この事は趣難波戦記や其外の記録等にも書記してあるが、少しづつ違いがあるので明確ではない。　私が若い頃牧尾又兵衛と名乗る薄田隼人に奉公した者が語ったもので、その時代に生きた者であるから、実説かも知れないので書留めた。

十三―四　和平派片桐市正の失脚

片桐市正は九月廿三日に大坂へ帰り、直に出仕して例の三ヶ条について述べた。　しかし三人の女中が先に戻り市正の事を種々悪し様に報告していたので、　秀頼、母公共に何も尋ねず大切な事であるから吉日を撰んで母公に面会の上で相談するので先ずは帰って休息する様にと市正を帰した。　その以後片桐を成敗しようと云う相談が始った。

秀頼卿は大野修理、木村長門、渡辺内蔵介三人を使として織田常真を訪問させ、片桐の誅罰に付き意見を聞いた。　常真は頭を振って云うには、勿論三人の女中の言葉に偽りはないだろうが、片桐は故太閤が取立た者であり、其上武名（p419）も世に聞こえています。三女中の一方的報告だけて死罪にするのは人聞も悪いでしょう。　七組（秀頼旗本）の中で誰でも良いから、有能の者を選び片桐の云分もよく聞いた後で、どの様にでも処分にするのが良いと答えた。　三人の使いが報告すると、秀頼卿も常真が云うのも当然と考え、速水甲斐守時之に細かく言含め片桐方へ派遣し対談させた。

片桐が甲斐守に云うには、貴殿がよく聞て報告して欲しい。此方の旗本の諸士が武器を準備している事、諸方の浪人を招き集めている事は皆事実であり申開きのしようもない。　鐘の銘や棟札も

韓長老不手際とは云うが、下書を提出した時私を始め何の気にも留めず国家安康の二字を鐘の面に彫付させ天下の人々の耳目に触れ世間の批判を受けた事も申訳の立たないものである。そこへ天海上人と佐渡守両人が伝えた三ヶ条の趣旨は自分達の考えとは言うが、前将軍の内意である事は間違いない。　これを一ヶ条も受けられませんと云えば破談となるのは明らかである。そこで母公を江戸へ預けることを私が承引したのは考え有っての事である。　具体的には江戸品川に四五町四方の屋敷を下されたいと上野介を通して云ったところ、幾らでも望み次第に渡すとの事だった。

其屋敷を受取り地形を整え石垣等を築くのに一年程も掛り、其後家屋建造するために大坂より材木等を廻して屋形を建てるのに一年は掛る。　其上で母公は御病気です（p420）と云って又一年も移転を延期する。　かくして三四年も過ぎる間にどの様にも方策を考え故太閤の恩を蒙った大名の五人から十人も味方に引入れ軍忠を尽させるべきである。　何のゆかりもない浪人達を招き集めてその力で両将軍へ敵対して一戦を遂げる等は思いもよらぬ事であると此旦元は考える。貴殿にどう思われるかと説得したので甲斐守は大いに納得して帰った。

甲斐守が帰った時丁度織田常真も天満から訪問し秀頼の前に居た。　そこへ甲斐守が出て片桐が述べた事を細かく報告すると秀頼もそれは当然と思う様子が見えたので、大野と渡辺両人進み出て、片桐は関東の一味である事に間違いない事で自分の過ちを隠す為に今色々理屈を云いますが裏切り者不忠の者に間違いありません。　この様な者を其侭助けて置く道理は有りませんと強く主張するので秀頼も迷い、常真も興ざめの様子である。

木村長門守は、今甲斐守が報告した事に付いて私にも考えがあります。　内容は三女が市正に

先んじて帰って報告した事を聞いた時には、両将軍の考えも事を荒立てる様子も無いように聞こえました。　しかしその後天海上人、佐渡守両人が市正へ述べた事からは、両将軍の怒りは軽くない様です。　これは一事両様と言うものです。　つまり片桐は武名も高く古老の者ですから、御前（秀頼）のお考えに反したので誅罰され、亡き者なる様にと云う謀計かも知れません。　異国、本朝共にこの様な事は多くあります。　申上げる迄もありませんが十分ご賢慮の上相手の手に乗らぬ様にして下さいと云った。（p421）　常真も、其方の云う事も当然と同心し秀頼も納得した。

その後大野と渡辺は閑所に集って話合った事は、常真は小牧合戦の時に前将軍の厚意に預っているので是は関東側である。　木村は元来大臆病者であるから、当面当地に異変が起こることを恐れてとやかく云うのである。　君命を受けない所もあると言う古人の詞もあるが、秀頼卿の仰と称して市正に討手を向けよう。　しかし常真へは此事を言わぬ訳にも行かぬと、大野と渡辺両人は常真方へ行き説明した。　常真は、片桐が明確に謀反と有ればとも角、秀頼の考え次第です。今後両将軍へ敵対となった時、何でも私に仲介と言う事は堅く断ります。　理由は私は老人で閑居している身として、そんな大きな役を担えば世間の目も如何と思います。　決して賛成できませんと両人に断り、以後は病気として閑居した。

さて大野方から明廿四日母公と対面の上駿府への返答を相談したいので登城する様にと連絡があり、市正はその支度をしていた。　そこへ廿三日の夜半頃、石川伊豆守から常真へ書状があり常真はそれを見ると家来の雅楽助に其状を持せて片桐方へ送った。　市正は雅楽助に直談の上返答し、家来の小島庄兵衛を片桐主膳方へ行かせた。　そこで主膳を始め片桐の親類縁者及び其外の親しい者が馳せ集まり、市正は夜中より病気で伏せているので今日の（p422）登城は難しいと断った。　大野修理と渡辺内蔵介は疑念を抱き、常真か伊豆守の両人から内意を洩らしたに

違いない。　此処まで来たら放置できないと、片桐の屋敷の隣にある織田有楽屋敷の内に討手の兵を集めた。　片桐方でも上下共に甲冑を帯びて討手が来るのを待構えているので、廿四日の晩方から其夜中迄大坂城中はたいへんな騒動となった。

その時秀頼の近従今木源右衛門と云う者が片桐方を訪問の上対談して細かく聞き、その内容を秀頼へ報告した。　秀頼はそれで納得して市正へ自筆の書状を送り、市正は涙を流して感謝したと云う。　この上は有楽斎の屋敷に居る討手さへ引取るなら、自分の方に集った人々も退散させると云う事になり、討手が引揚げたので片桐方も解散して城中は静かになった。
その時大野と渡辺は秀頼卿と片桐が和睦した事をたいへん憤り、　片桐が管理する番所にいる番人を皆追払い、その跡で番人を入れ替え、更に本丸に部隊を集め、何が何でも片桐を討果す構えを見せた。　そのため市正の方も又々前の様に加勢の人数を集め再び騒動になった。

片桐は大野と渡辺方へ使を立て、我々兄弟を讒言する者が誅罰すると云って討手を向ける事を承ったのでお待ちしましょう。　何時でも部隊を向けられよと云うので両人は益々腹にすへかねて討果そうとしたところ、　七組の頭達が相談して、今度の騒動はあながち秀頼の考えから出たものではない。　大野渡辺と片桐の遺恨によるものであるから、我々が関与する事ではない。　我々は秀頼公さへ守護すれば（p423）良いと云って取りあうものがなかった。　其上大野と渡辺が片桐の宅へ押掛て一戦に及ぶ最中に呼応して、城中に居る片桐一派の者が所々火を掛けて裏切る等の噂もあり、其事を気遣ったか決着は延引した。

秀頼旗本七組の中でも堀田図書と伊東丹波の両人は、是程の騒動を我々が他所事と見なす事も問題である。　何とかして仲裁しなければと云えば、皆が当然だと云うので両人は片桐の宅へ

行き本心を尋ねた。　片桐は、私には何の誤りもないのに悪人共が讒言をして誅罰されるべきと言い、彼等が討手として攻めて来ると聞いたので、　奴らを向かえて一戦をして気持ちよく討死する以外は何もないと云う。　両人は打つ手もなく帰って皆に話すと速水甲斐守は聞くや否や片桐の考えはこの前と替わっていない、　私の老後のひと働きとして片桐と大野の両人に会って和談を調えねばと席を立ち、直に片桐宅へ行き面会した。

速水甲斐守は色々説得し、御息の出雲守を私に預けませんかと言うと片桐は、それが秀頼公の為になるなら出雲守は貴殿へ渡しましょう、　しかし大野が何を考えるか予想できないがと云う。甲斐守は、七十歳になる私が貴殿を色々宥めて、大野が納得しなかったらその侭で済みますか、その点に付いては私に任せなさいと言う。　そこで片桐が甲斐守に出雲守を渡すと則自分の家に送り、自身は大野の宅へ行った。　大野に面会の上、種々意見を延べ（p424）て大野に納得させ、息男の信濃守を受取り、自分の家に預かった上双方の和談を調え先ずは収まった。

其後十月一日の早朝に片桐旦元は上下三百人余甲冑を帯び、鉄炮の火縄に火を付け大坂城の玉造リロを出、　河内路を経由して鳥飼の渡りを越えて茨木の城へ帰った。　其夕方になると石川伊豆守も大坂を立去り、織田常真も天満の屋敷を去って京都へ上り、津の幸庵の元に閑居した。　そこで種々の噂が飛び次第に大坂は騒がしくなってきた。　片桐と大野の子供達は大坂の町外れで互に取替たと旧記に表現あるが違うとの事である。
著者註　これらの事は難波戦記を始め其外旧記にも記されているが異説もある。　片桐市正が大坂城を立去った事が大坂一乱の根元でもあるので、旧記と比較する為に私の聞いた事をここに書留たが虚実は分らない。

十三―五　大坂冬の陣の臨戦態勢

其頃大坂へ諸浪人が方々から寄集り、中でも著名な浪人は毛利豊前守勝長、長宗我部宮内少輔盛親、　真田左衛門佐幸村、同大助、山口左馬助（大聖寺城主山口玄蕃二男）、仙石宗也後藤又兵衛基次（元黒田甲斐守家老）、明石掃部全登（浮田秀家家老）、小倉作左衛門行意（蒲生飛騨守家老）等何れも秀頼の招きで集った。　その中で毛利、長宗我部、真田は三人衆として皆が尊敬していた。

大野修理、渡辺内蔵助等は相談して、諸浪人ばかりでは城中が手薄になると言う事で加州利常（前田）、島津家久、伊達陸奥（p425）守、浅野但馬守、松平武蔵守（池田）等を始め故太閤に由緒ある大名衆へ秀頼卿書状に名作の刀脇指等を添へて使者を送り頼んだが、誰一人として協力を申出る者は無かった。　その為益々諸浪人を手厚くもてなした。

其頃大野修理は本心では後藤又兵衛と明石掃部両人を三人衆の仲間へ加えて諸事の相談相手としたいと思っていた。　しかしこの二人は元陪臣であるので三人衆には遠慮があるからと断っていた。　一方城中での評判は、三人衆は何れも関ヶ原一戦の時には関東へ敵対したが真田殿は親の時代の事であり、両将軍の憎みも軽く、其上兄の伊豆守、叔父の隠岐守は将軍家に奉公しているので真意は分らない。　それなのに本当の味方と思われているのは間違いではないかと言う説もあった。　それを真田幸村は伝え聞き、心外に思いながら過していた。

そんな或る日城の構えに続いた山の出先に誰が行ったが分らぬが城の設計をして竹木も少し集めてある所があった。　幸村はこれを出丸として自分一手で籠り関東勢を引受、晴れやかな

一戦を遂げて人々の悪口を漱ごうと思った。　そこで同席の毛利、長宗我部とも相談し、大野へも語った後、出城を設計し工事に取り掛かった。　ところが後藤基次が薄田隼人に会って、私が思付き、出丸を構築しようと設計し竹木等も少々集めて置いた場所を誰かが設計も捨て、集めた材木等も外へ運び出して工事をしようとしている。　仮令お上の用地であっても（p426）一応は届けるべきであり、まして他人の行いとすれば理不尽であり我慢できない。　明日にも自分の部下を連れて其場所を取り返さずには置かないと言う。

薄田隼人は後藤に、貴殿の立腹は当然です、私が聞いた以上は良い様に取り計らうので、明日になり私の方から連絡しない内に早まった行動は取らないで下さいと断った。　それから登城して緊急の会議を始めて皆が相談して明石掃部を呼んで、有楽、雲生寺を始め毛利、長宗我部、大野薄田等が口を揃えて、貴殿より他に後藤を説得できる人はいないので何とか丸く収めて欲しいと頼んだ。　そこで明石は後藤の小屋へ行って種々宥めたが、真田殿の所行と聞いた以上猶更我慢できないと言って納得しない。　その為山川帯刀、北川次郎兵衛の両人を明石に加えて説得し、今後は後藤を三人衆の一列に加えると言う秀頼卿の内意に任せて後藤は矛を収めさせた。明石も同列に加わり其後は五人衆と云った。　これに毛利、長宗我部、真田等も後藤、明石が同列に入る事に反対もないので兼々大野が望んだ体制となった。

著者註　この件は旧記等には見られないが、米村権右衛門が語ったので書留めた。

この様な状況では関東との対立が収まらなくなり、両御所（将軍、大御所）から必ずお咎めを受け討伐の軍勢を向けられる事も有り得ると、秀頼卿の近習達は相談して籠城の準備を始めた。先ず河口へ奉行を派遣して兵糧を買集め、又大坂町中の米、大豆等を城内へ取り込み、僅か四五日の間に三十万石の兵糧を確保した。（p427）

関東へ廻る御城米二万石余り大坂にあったが、板倉伊賀守は今度籠城の入用に城内へ取入れと言って大野方より川舟に積み、京都に運んだ。　この時の伊賀守の計略を諸人は誉めたと言う。又板倉伊賀守は家来の朝比奈兵右衛門と言う者を浪人に見せ掛けて、伊東丹後守が抱える部隊の一員として入り込ませて大坂城中の様子を報告させた。　次の夏の陣の時は秀頼の船奉行樋口淡路守配下として朝比奈を付けた。

十月一日、駿府城では観世三十郎の能舞台が予定され、松平右衛門大夫が準備を進めたが夜中から雨が降出し翌朝には降り止んだ。　その朝京都より早便で注進が来た時、大御所は大奥にいたので、本多上野介は阿茶の局を通し書状を渡したところ、上野介を奥へ呼び暫く面談の上指示があった。　上野介はその後表大広間で指示書を調えたが。成瀬隼人正は尾州へ行っており、安藤帯刀と上野介の両名の判だったと言う。　その趣旨は、駿府から京都迄の各地城主は準備出来次第上京する事。　藤堂高虎、井伊直孝、松平下総守は東寺より上下鳥羽の間に布陣して非常体制に備える事。　松平隠岐守は伏見城をしっかり守る事等である。

しかし上野介がこの指示書を説明する時、松平右衛門大夫は御前へ出て、雨も晴ましたので能を御覧になりますかと伺った。　大御所は、近く出陣する身であるから能など見物はできないと言う事で初めて城中の諸人が知って驚いた。

十三―六　第一次大坂戦争（冬の陣）始まる

堺の代官芝山小兵衛方より片桐の茨木勢に加勢の依頼があった。市正は大坂を立退く時家財雑具等を芝山へ預けており、その上前からも親交があったので（p428）市正は捨てては置けぬと

松尾兵左衛門、今村三右衛門、日比加左衛門、十川久兵衛、河路五兵衛以下侍分の者三十二騎、足軽五十人、雑兵含め二百人程加勢に送った。　その中で多羅尾半左衛門と富田太郎助の両人は妻子を堺に置いているので断って侍達に先んじて出発したが、本道の通行は難しいので尼ケ崎へ廻り、城主建部三十郎政勝に船を借りて堺へ渡って芝山の家へ行った。　しかし小兵衛は既に高野山へ立退き、　跡に大坂方の者達が入り込んでいた。　それを見て急いで今井宗薫方へ行くと宗薫は早くも大坂方に生捕られたとの事なので、如何したものかと思っていると大坂より入込んだ警固隊の牧島玄蕃と赤座内膳の部隊が押寄せてきた。　そのため多羅尾は家に火をかけて自害し、富田は何とかその場を逃れた。

外の茨木勢は尼ケ崎へ行き、城主建部に船を借りて堺へ渡ろうとしたところ、近辺の村々で貝を吹き鐘を鳴らして一揆を催す様子である。　茨木勢は渡海を中止して尼崎の城中へ入れて欲し旨建部に頼んだが、松平武蔵守方より加勢として来ている池田越前、南部越後、田宮対馬などが同意せず建部の思う通りにも行かない。　その内時間も経過して一揆方から大野修理方へ告知したので、大野の部隊が馳せ来て一揆と一体となり押掛けてきた。　茨木勢は止むを得ず伊丹迄引下がったが、大坂方が烈しく攻めてくるので伊丹の村へ入ろうとしたが、村入り口の木戸を堅く守り村に入れてくれない。　仕方なく又茨木の方へ退却するのを大坂方と一揆方が烈しく押寄せたので、片桐の茨木勢は神崎（p429）から伊丹茨木の道筋の間で大部分討たれて二百計の人数の中で殆ど茨木へは帰らなかった。

片桐は大いに腹を立て、京都所司代の板倉伊賀守にこれを報告すると、板倉は宿次の飛脚便で駿府へ報告した。　大御所は機嫌悪く、尼ケ崎在番の者達が片桐の家来達を保護せず、味方を捨殺したと言う事は何を考えているにかと松平武蔵守（池田利隆）に厳しく尋ねよと指示した。

そこで板倉伊賀守より武蔵守の陣所、西の宮へ使者を送り、その事を伝えたところ武蔵守は大へん困惑して幹部の侍を尼ケ崎へ派遣した。　城主三十郎は未だ若年であるから万事相談の為として古老の面々を加勢として駐在させたのに、茨木勢を大坂方に討たせて城中の者が見殺したとあっては我々の立場がないので、この点を必ず説明せよと言った。

城兵達は集り相談して、片桐の家来達が一揆勢に取囲まれた事は見たが、　当城は海港の守りを怠る訳に行かない、　敵地でもあり城内に人数も少なく、城中より人数を出して茨木勢を救おうとすれば、　一揆勢との戦い半ばに若し海手より敵が攻寄せてくれば城の防御も難しいと思い茨木勢が討たれるのに掛り合わなかったと言う事にした。　其時田宮対馬と云う者は、その答えは良く無い、尼崎は大坂に地であるから加勢等も十分に行ない堅く守る様にと、　武蔵守殿が御暇の時大御所からの直接に言われている手前、　城中が手薄と言う口上は武蔵守殿の立場を悪くすると云って（p430）彼一人同意しない。

そこで田宮は、片桐の部隊を救う為に城中より人数を出せば大坂勢も更に人数を出すだろう。そうなると城中よりの加勢を更に出さざるを得なくなる。　その時大坂方の別軍が当城へ攻寄せた場合に城中には手薄で防ぎ様が無いのは明らかである、其上茨木勢と云っても片桐の侍達を誰も知らない。　城中の人数をおびき出すための大坂方同志が戦い見せかけて居ないとも限らない。所詮茨木勢を見殺したと言う事は我々の落度となるが、　万一当城が大坂方に奪われた場合は武蔵守殿の落度となり、天下の為に宜しくないと対馬が熱心に語るので城中の者はこれに決めて返答する事にした。

その趣旨を武蔵守より伊賀守へ報告して、更に駿府城へも伴大膳と云う者を使者とし報告した。

直ぐ大膳は大御所の御前に召し出されたので、今度の尼ケ崎城の事を細かく言上した。　大御所の上意は、尼ケ崎城中の者達が片桐の部下達を見殺しにした事を今になって色々言訳をしても、武蔵守に前に指示したが頼りない事だと席を立とうとする。　そこへ大膳は大御所の膝元近く迄這寄って平伏して、武蔵守は確かに姫君様の御腹より生れた方ではありませんが宮内、左衛門督両人とは血を分けた兄弟ですから、御前様の縁者に間違いありません。　それなのに只今の上意はお情けのない事と存じますと言う。　すると大御所は、其方が西の宮に帰ったら、尼崎についての報告（p431）は了解した。　城兵達の言い分も当然なので今後共、他の事は良いから城を堅く守る様に指示する様伝えよと上意があった。　大膳は有りがたいと涙を流して御前を立った。

註　松平武蔵守（池田利隆 1584 - 1616）は池田輝政と前妻糸姫との子、左衛門督（池田左衛門督忠継(1599 - 1615)　宮内　池田宮内少輔忠雄（1602 - 1632）　忠継、忠雄は輝政と督姫（輝政後妻、家康娘）の子

其後大御所は側衆へ、其方達はあの大膳の人となりを知っているかと尋ねた。　皆、存じませんと答えると、あの大膳は元々池田三左衛門輝政の馬の口取をする中間だった。　長久手一戦（家康と秀吉の戦い）の時、親の勝人と兄の紀伊守父子（秀吉方）共に討死した事を聞いて、一所に是非討死しようと馬を乗り出そうとした時大膳は、その様に親子三人共に死なれたら池田の家を誰が継ぐのです、決してなりませんと云って馬の口を取って味方の方へ走り出した。　輝政は怒って、おのれ、馬の口を放せと鐙で口取りの頭を蹴ったので直ぐ大きく腫上ったが、それでも馬の口を放さず撤収した。

終には三左衛門に池田の家を相続させたので今では伴大膳と名乗らせ、知行も与え重い役職にも就けている。　微賤の時から主人の為に身を返り見ない所の有る者であると上意があった。

十月十一日、大御所は駿府を出発、尾張宰相義直公は名古屋より出馬、遠江宰相頼宣公は駿府よりお供したと言う。　同月廿三日京都に到着し二条城へ入る。
将軍秀忠公は十月十四日に江戸城を出発、留守は竹千代君（後家光）、国松君（後駿河大納言）越後少将忠輝公、松平下野守、鳥居左京、奥平美作守、内藤左馬、酒井河内、福島左衛門大夫、加藤左馬、黒田甲斐、平野遠江守等に指示し、十一月十日伏見城へ到着した。(p432)
註　大坂の陣は直接秀頼を攻める為、豊臣恩顧の大名、福島、加藤、黒田等は留守をさせたものと思われる。

十一月十五日朝八時、　大御所は二条城を出馬し、お供の人々は皆小具足だけで甲冑は着けていない。　お供の中で使者の米倉六郎右衛門は伍の字の下に米倉丹後と書き、真田隠岐守は地黄八幡の指物の許可をもらい是を使った。　小栗又市は物頭であるが使者も兼務する様に指示されていたと言う。
この日木津へ着陣して名主の家へ立寄、お供の人々も暫く休息して間もなく奈良へ向かったが、お供は漸く五十騎程で其外は後から段々馳せ付けてお供した。　其夜は中坊左近方に宿泊し延命喜四郎入道が出て咄をした。

大坂方では真田左衛門佐幸村の出丸の工事が終わりそこへ移るに当り、誰か私の相談相手を願うと言うと、黄母衣衆の中から伊木七郎右衛門を真田に加へられた。　石川肥後守は自身で真田に断り、願ってこの出丸に籠ったと言う

中国の軍勢も全て大坂へ着陣した。　松平左衛門佐忠継は神崎河を渡り、戸川肥後守、花房助兵衛、同志摩守が後に従う。　助兵衛は老衰で歩行も出来ず、備中の知行所に蟄居したが、

大御所から松平左衛門督方へ内意があったので、忠継は使者を送り今度大坂へ同道する様にと云ったが、歩行も出来ず家の中も駕籠で移動する程なので戦場へ出ても何の役にも立たないと堅く断った。　しかし大御所の内意でもあるので忠継より再三使者を送って頼むので止むを得ず志摩守を伴って出陣した。(p433)（

松平武蔵守利隆もほぼ同じに着陣したが、忠継の軍勢に先を越され大いに腹を立てた。　中島の瀬に臨み斥候を派遣したところ、大坂方の織田有楽、雲生寺を始め其外大坂七組の面々が見廻りとして中島の向こう側に控えているとの事である。　利隆は河を渡って一戦を行おうとした時、家康旗本からの検使城和泉守が強く止めたので利隆と互いに問答になったが時間も経過して夕暮になり、大坂方城兵は段々引揚げたので利隆の軍勢は空振りとなった。
一方忠継は又軍勢を進めて中島下流の瀬を渡って進み、城兵十人程を討取った。　この時石川主殿頭や毛利伊勢守の豊後勢は神崎川を越て中島に至る。　武蔵守と有馬玄蕃頭軍勢は天満へ向かうと、城兵は小勢では守り切れぬと見たか天満を焼いて大坂城中へ引揚げ、寄手がその跡へ入れ替った。　左衛門督忠継は住吉（家康本陣）へ使者を送り、神崎中島を乗取り敵兵少々討取った事を言上すると大御所は機嫌が良かったと言う。

落穂集第十三巻終

十四―一　両御所（大御所、将軍）の大坂出陣　（p434）

慶長十九（1614）年十一月十五日将軍（秀忠）は伏見を出発し、その夜枚方に宿泊した。十一月十六日朝十時、大御所は奈良を出発した。　この時本多上野介が、爰から御供の皆に甲冑を着させましょうかと伺ったところ上意は、以前関ヶ原一戦の時、　江戸から来た人足御用を勤める金六が具足を着て走り廻るのを村越茂助が見咎めて、町人の身分で具足を着用するとはけしからんと云った所、今後を見て下さいと云った。　二日程すると道端の松の枝に具足が一領掛っているので誰の具足か持ち主を探したところ金六のものと分った。　そこで金六を呼出して調べたが、今まで着用していましたが走り回るのにたいへん邪魔になり、身体も痛くなるので脱捨てましたと云ったと言う。　此辺より（p435）大坂迄は道のりも遠く、甲冑を着ていては疲れるので未だ着用を待つようにとあった。　その夜大御所は法隆寺に泊り、将軍は平岡に泊った。

十七日大御所は住吉へ移り、　将軍は平岡から平野へ陣を移した。　大御所は法隆寺出発に際し、これ以後は諸軍勢に甲冑を着る様にと指示した。　この時金地院、林道春、興庵寺が甲冑を着て御前へ出ると、私の幕下でも三人の法師が武装していると笑った。　この日住吉へ着陣した時、将軍（秀忠）が訪れ対面し、尾張殿（義直）、駿河中将殿（頼宜）も参会したと云う。

十九日午前十一時、大御所は茶臼山へ行く。　此山は元来は荒陵との事で天王寺から五町程南西に位置し、一般には茶臼山と云っていたが、これを勝山と改めた。　この時将軍も同行し、尾張殿、駿河殿を始め譜代大名衆が御供をしたと云う。　ここで各軍の配備が決められ、大御所

の左は尾張宰相殿、右は駿河中将殿に横田甚右衛門を加え、軍奉行は永井右近とし、将軍の左は高木主水組、右は阿部備中組で後には水野隼人、青山伯耆、本多三弥が加えられ軍奉行は安藤対馬守となった。　この配備の書付を大御所自筆で将軍へ渡した。　大御所は素肌に鷹の羽のちらし付で花色の羽織を着、帰りがけに堀端を見廻った。　それを見て城中から鉄炮を烈しく打出したが静かに見分して住吉へ帰った。（p436）

船奉行の向井将監、九鬼大和守、千賀与八郎、小浜民部等は相談して新家村の敵と戦い、夫々勝利を得て野田、福島、新家村の三ヶ所に陣を構えた。　この辺には大野修理の指示で大安宅船及び其外番船を数十艘用意していた。　十九日の未明に九鬼の家来達が大安宅へ乗移るのを見て小浜と千賀の配下が先を越されたと怒って船の矢間から鉄炮を打ち掛けた。　九鬼の配下は大安宅の上へ乗り上り、船鉤で敵船を引寄せ、鎗や長刀で突き立てるので敵船は皆敗れたので九鬼の部下は自分達に船印を敵船に掲げた。

その時向井将監は小船で来て敵船へ乗移り、向井将監一番乗りと大声で名乗りを上げた。　九鬼の家来達はこれを聞いて、是は我々が捕獲した船なのに貴殿が一番と名乗る事は出来ません、この船に乗せて置く訳に行きませんと云う。　将監は、九鬼は未だ来ていない、私が早く乗ったから一番と名乗ったもので問題ない筈であると云う。　九鬼の配下が尚も納得せず文句を云うと、将監は刀の柄に手を掛けて無礼者と云って切り捨て様とする。　そこへ小浜や千賀も飛んできて仲裁するところに九鬼も来た。　小浜、千賀は九鬼に向かい、貴殿の家来が乗っ取った船に将監も同時に乗移り一番と名乗ったので貴殿の家来と争いになった。　将監が早く乗り移ったのを私も見たので将監に渡されてはどうかと言う。　九鬼大和守はそれを聞て、船の一艘や二艘はその通りで良いでしょうと応じて決着したと言う。

註　安宅船　安土桃山時代から江戸初期の軍艦（全長五十メートル程、二百―三百人乗り）。もっと小さくて動きの早い軍船として関船や小早は多数あった。

廿四日大御所は、大野壱岐守経由で前にも連絡あった和談について書状では解決しないので、織田有楽斎か大野修理の配下で誰か（p437）信頼出来る者を一人宛出す様にと指示し、本多上野介は与助と申者を使に出した。　有楽斎方からは村田喜蔵、大野方からは米村権右衛門の両人が大坂城中より来て上野介と面会した。　和睦の条件を細かく説明し、其上今度秀頼卿から諸大名へ依頼した書状に対する返書の報告が各大名から来ている物を両人に渡した。　これに依ると大坂城中へ心を寄せている大名は一人もないので、若し諸大名が徳川を裏切る事に期待しても無駄である、　和談などはタイミングもあるので今決心すべきと伝えた。

其後城中より前述両人が来て、大御所や将軍が来られた以上、外曲輪の矢倉を取払う事を伝えたが上野介は、外曲輪は当然であるが、二の丸三の丸の曲輪も破却する様に云われていると答え和談は延期となった。

廿五日大御所が茶臼山へ行くと諸大名も群参し、帰る時将軍が進上した黒粕毛の馬に乗ろうと引寄せたところ城の方へ向かった嘶いた。　敵陣に向かって嘶く馬は珍しいものだと上意があった。　藤堂和泉守は、是は目出度い事の印ですと言えば大御所は機嫌よく近辺を二度程乗り廻り諸大名は蹲踞してそれ見ていた。　私が若い頃は馬上で鷹を使い、鷹が取った鳥を馬上で処理したものだが、今は馬に乗るだけでもたいへんだと上意があった。　和泉守は、お元気な事ですと応じた。

十四―二　今福、鴫野の戦い

大阪方は志貴野（鴫野）と今福両所の堤に堀切柵をつけ昼（p438）夜番兵を置いて守らせていた。この事が報告されると、直ぐに踏破れとの上意があり、上杉方へ佐久間河内と小栗又市、佐竹方へは安藤治右衛門と屋代越中が検使として派遣された。

廿六日早朝、佐竹義宣旗下の先手の隊長渋江内膳、梅津半右衛門は今福堤の柵を破って押入ると番兵矢野和泉、飯田左馬、平瀧の文殊院、粉川福常坊、鹿瀬内孫市等が弓鉄炮で防いだが敵わず矢野和泉、飯田左馬等が討死した。　今福口は破れて城兵は全て敗走し、佐竹勢が片原町へ押入ったとの報告で城中は動揺した。

木村長門は銀の瓢箪の馬印で配下の者達を率いて今福へ向かった。　これを秀頼卿は菱矢倉の上から見ていたが、側に居た後藤又兵衛に、木村は少数に見えるので其方も加勢せよと云う。そこで後藤は矢倉を下りて馬に打乗り、部下を宿所に返して組の者達皆今福へ行く様にと触れ、私の具足も持って来るようにと云いつけた。　組の者達も駆けつけ、京橋の上で具足を着て今福へ向かうと、木村は既に柵一重を取返し、更に佐竹勢と鉄炮を打ち合っている。　後藤が駆け寄り木村に、貴殿の部隊は先程からの戦いに疲れているだろうから私が入れ替わります。　これは秀頼公の指示もその通りですと云うと木村は、貴殿は多年の功労ある人です、私は今日初めての一戦の機会であり今後の経験としたい。　今敵を圧倒するところをお見せしたいので暫く待って下さいと云ったが（p439）、その通り機会を見て自身で鎗を取、配下を纏めながら遮二無二突いて佐竹勢を追いたて、其後は後藤の配下も参加して戦った。

その時佐竹方の渋江内膳は鳥毛の羽織を着て馬を乗廻して味方に指示していたが、只者には見えないので、木村と後藤配下の者達が我も我もと内膳を目掛けた。　そこで木村の配下の士に

井上甚兵衛と云う者が鉄炮を持っているので木村はこれを呼び、あの鳥毛の羽織を着た馬上の敵打てと命じた。　甚兵衛は鉄炮を柵の横木に載せて狙い澄まして発砲したところ、渋江の胸板を打ち貫き、渋江は落馬して絶命した。　その時後藤又兵衛も鉄炮に中ったが、其疵を探って見ると以外に軽傷だった。　後藤が、未だ秀頼公の運は強いと言うのを聞いて、今度の戦いは後藤一人が担っている様な言い方と噂した。

佐竹義宣が江戸を出陣する時は秋田からの部隊が到着して居らず、江戸駐在の人数だけ引連れこの戦いに参加したので第一小部隊である。　其上渋江等が討死したので合戦も危なくなった。川向こうでは柳原遠江守の先手部隊三百人程が待機していたが、私の指示無く戦いを挑む事は決してならぬと兼ねて遠江守から命じられているので今福の競り合いを見物していた。しかし佐竹方が不利になるのを見て榊原先手の者達は我慢できず、三百計の中から河合三弥、貴志角之丞、渡辺八郎五郎、清水　久三郎、白井平左衛門、佐野五右衛門、伴五左衛門、村上九郎兵衛等が真先に川へ乗入れ、残る面々も我も我もと川を越へて掛って来る。　そこで木村も後藤も今日の戦いは是迄として（p440）部隊を引揚げた。　佐竹勢も押掛け一戦を挑んだが朝昼二度の戦に疲れ引分けとなった。

榊原勢先手の隊長伊藤忠兵衛が、私が指示しないのに皆が抜け駆けをしましたと報告したところ遠江守は不機嫌で、人は軽く法は重い必ず処罰すると云ったが、　其日の晩方佐竹義宣方から使者があり、　今日の一戦で味方が苦労しているところを御家来衆の加勢で運が向いて喜んでいますと云って来たので抜け駆けの者達もお構いなしなった。

註　榊原遠江守（康勝 1590 - 1615）　榊原式部大輔康政の三男、翌年の大坂夏陣後病死

同廿六日鴫野口へは上杉中納言景勝の部隊が未明に押寄せて柵を破り攻入った。　大坂方の番兵竹田兵庫、小早川左兵衛、岡村百之助以下防戦したが敵わずに柵の内へ引き退き既に敗走し始めた時、天満の工事に居合せた秀頼親衛隊七組の青木民部始め速水、中島、野々村真野、堀田以下の面々が鴫野口へ馳せ向かった。　城中にも是が報告されたので渡辺内蔵助、木村主計、竹田永翁、大野修理の配下の者達が駆けつけ上杉勢と戦った。　城方の竹田兵庫、同大助、小早川左兵衛、岡村百之助等が討死をし上杉方が勝利を得た。　城方は敗軍したが中でも渡辺内蔵助部隊の敗走ぶりは見苦しかった。　合戦詳細は難波戦記等の書にも記述ある。

鴫野と今福における朝昼二度の合戦の状況を秀頼卿は菱矢倉の上から見ていた。　特に今福の件は後藤が直接秀頼卿に報告した事もあり、以後木村は益々覚え目出度く、一方渡辺は日頃の大言に反してたいした事もない。　秀頼卿も見限った様だと城中の諸人の態度も木村を誉めて、渡辺を悪く言う様になった（p441）

廿七日は雨が降り松平陸奥守方より、今日のしめりは幸です、風向きも良く天満、船場辺りに放火してはどうでしょうかと伺う為山岡志摩と云う者を派遣した。　山岡は大御所陣所へ参上して猪の着物を門前に置き陣営に入った。　御前にでる時本多上野介が、使者は土足の様子ですと報告したが其の侭面会した。　山岡を久し振りで御覧になり、たいへん健康そうだと上意があり湯漬などが振舞われた。　山岡はこの時八十を超えた年齢だった。

註　山岡志摩（重長 1553 - 1626）　松平陸奥守（伊達政宗）の重臣、この時は未だ六十代の筈。
　家康とは関ヶ原戦の前後面会している。

陣営中に御使番の小栗又市、佐久間河内、山本新五左衛門の三人が集っていたが、小栗が

山本に向って、今度の御使番衆の中に臆病者がいる、　諸大名の陣所へ御使に行っても防弾用の竹束から外へ出る事もできず諸家の物笑いになっている。　これは同役の我々に取て恥ずべき事であると云う。　佐久間は聞かぬ振りをしていたが、　山本は日頃小栗と親しい仲であるので聞咎め、貴殿は良く考えずに人の事を言う、誰が命を惜しんで臆病となる者があるかと苦々しく云った。　又市は笑って、貴殿の事を言っているのではない、臆病者の咄をしているのだ。　臆病の覚へが有る者こそ聞咎める筈だと大声で云う。　この時御前には本多佐渡守、同上野介、西尾丹後守の三人が居たが、上野介が立って次ぎの間に行き何事かと尋ねた。

この人が斯々云々と説明すると上野介は笑いながら三人の前に来て、皆さんの様な古参各位が武道の事を厳しく云われ、若い者達が発奮する事になれば上の為にも喜ばしい事です。　そんな穿鑿はどんなにされても（p442）良いでしょうと云った。　其後御前から御酒を戴き、寒くなると老人は特にたいへんだと思うので諸番の中から若い者を一人宛撰んで御使役とするので、その様に心得よとの事であった。　但し伍の字の着物は若い者には未だ使用させないとの事である。

大御所が鴫野口を巡見して上杉景勝の陣場を通った時、直江山城守が指揮して城へ向って一斉射撃を行い、景勝も出て面会した。　その時、其方家中の士は下々に至る迄たいへん骨を折り、昼夜の勤務御苦労であると上意があった。　景勝は、皆子供の喧嘩の様なものですから、それ程骨折でもありませんと応じた。　大将が巡見する時に城へ鉄炮を打掛けるという事は故実であるがさすがに上杉家程の事はあるとの上意があったと云う

十四―三　大坂城攻撃開始

中井大和を召して来月四日（十二月四日）勝山へ陣を移すので、船場辺の町屋を取り壊して陣営を構築する様に指示があった。
堺や大坂近在の百姓を召出し、年内から真桑瓜の種を多く準備し来夏に諸国の軍勢が食べるに不足ない様、作付けするよう指示して瓜種を用意して支給した。　これを聞いて寄手（関東方）もこの在陣は長くなると予想し、城中（大坂方）へもこの咄が聞こえて上下共に飽きてきた。
註　中井大和守（正清 1565 - 1619）　家康側近の大工棟梁、畿内近江六国の大工を支配した。

十二月二日、城方の後藤又兵衛は巡回して京橋を始めとして各橋を全て焼き落させたが、本町一つは残っている。　又兵衛は何故この橋だけ焼かないのだと咎めれば、大野主馬（p443）は、この辺は私の持場であり貴殿の指図は通用しないと云う。　後藤は、全ての橋を焼くのは私の一存だけではなく、　上からの指示であるので我侭は許されませんと口論となった。　そこへ塙（ばん）団右衛門が駈け付けて後藤に向かい、橋については拙者が機会を見て焼かせるので貴殿は先ず帰られよ、という事で又兵衛が帰ったので其場は治まった。　主馬はその時から是非一夜討を掛けたい考えがあり橋を確保したものと言う。
註　大野主馬（治房 1570 - 1615）　大野修理亮治長の弟、主戦派の中心人物

両御所（将軍、大御所）共に陣替を行うので、十二月一日二日両日の間に先手の各部隊は城近くに陣を移す様にとの指示と共に、諸軍勢とも整然と静かに移動せよと使番衆が云い廻った。そこで諸軍共に物静かに陣替をしていたが、井伊掃部頭部隊だけは陣替すると直ぐに城中へ一斉射撃を行い勝鬨を上げた。　これにより城中は勿論、寄手の諸軍共に色めき騒いだので将軍も驚き、　直孝（井伊）は兄の代理で佐和山の部隊を引連れて来たので、目立ちたがって

やったのだろうが大御所の御機嫌が心配だと本多佐渡守を急遽呼び、　掃部の指示ではなく先手の隊長の不始末ですと報告して井伊家家老の一二名の落度で治まる様に取り計らえとの事で佐渡守が住吉の大御所本陣へ参上した。

佐渡守も御前で何と云おうかと思案していると、其方は何の用で来たのか、　多分今朝陣替の時、掃部の部隊が一斉射撃をして勝鬨を上げさせた事ではないか、　さすが掃部(直孝)は兵部(直政)の子だけの事はある。　陣替の時城中へ一斉射撃で一味付けた事で将軍も感激して、(p444)其事を知らせに来たかと上意があった。　そこで佐渡守はにっこり笑い、その事です、親子様の考えが是ほど同じになるとは不思議な事です。　将軍も掃部の指示をたいへん感心して、報告の為私を遣わされたのですと申上げた。

真田丸から見て南の方にある伯母瀬の笹山と云う小山があり、ここへ城中から時々足軽を出し鉄炮を打たせた。　加賀筑前守利常（前田家）の家老本多安房守は配下の部隊と打ち合わせ十二月四日の夜明け前、伯母瀬山を取巻いて草を分けて探したが人一人も発見できなかった。その時本多と並列に布陣していた山崎長門入道閑斎はそうとは知らず、本多に先を越されたと思い急に部隊を進め、伯母瀬山を駆け抜けて真田丸(出丸）へ押寄せた。　それを見た本多は山崎には負けられぬと未だ暗い内で行く先もよく分らぬまま真田丸堀際に押寄せた。　急な事で鉄炮の楯とする竹束なども用意もないまま堀際に集った。　それを聞き越前(松平忠直)や佐和山（井伊直孝）の軍勢も駆けつけたので出丸の堀端は寄手の軍勢で隙間もなかった。

註　真田丸　真田幸村が大阪城南東（玉造口）の外側に築いた出城、　第十三巻に見える

間もなく東の空が白んでくると、出丸の矢倉の上から雨が降る様に鉄炮が打ちかけられたので、

寄手の軍勢に無数の死傷者が出た。　両御所は機嫌悪く使番衆を派遣し早々引揚げる様触れさせたが、互いに先に引揚げる事を恥じてぐずぐずしている。　そこで家老安藤帯刀直次を呼び、其方が行って引揚げさせよと指示があった。　直次は、誰の家中であろうと一番に押寄せた所から引き上げよと命じたので先ず加賀の部隊が引き、続いて夫々引揚げた。　其後加州利常を始め越前忠直（p445)、井伊直孝等へ、誰の行動で一番に攻め掛ったのかと調査があったが、皆同じく家中の若者達がやった事ですと言訳して決着した。

其時井伊直孝の家老木俣右京は一番に押掛け、其上負傷もした事が将軍に聞こえ、掃部の家中で模範となるべき者が何と言う事だ、今後外様大名の統制の為にも有ってはならぬ事で掃部頭に厳しく云うべきと考えた。　この事が大御所に聞こえると安藤直次を通じて、一般に戦場に臨み身命を惜しまずに人に先駆ける事は中々できぬ事だから放置せよと良く将軍に伝えよとの上意だった。　木俣右京が特にお咎めも無いと云う事になり、掃部頭も負傷の見舞いに木俣の小屋を訪れた。

同じ井伊家家老の川手主水は是を聞いて、最初から命令を守っていた私が誉められる事もなく、軍律を乱した右京が親しくされるのでは私の立場がない。　私の部隊だけで真田丸に押寄せて討死せぬ訳に行かぬと準備を始めた。　直孝はこれを聞いてたいへん驚いて主水を呼び、私が間違っていた、堪忍してくれ。　今後何かあれば必ず其方を先手とするからと云う事で収まった。翌年夏の陣の時、若江で主水が態と討死したのはこの事が原因と皆が言い合った。

この出丸を攻めたとき諸部隊の中で勝れた働きをした人々は多いが、中でも松平出羽守直政は其頃未だ若年だったがその活躍、及び幡勘兵衛景憲は酒はやしの旗差物を堀底へ落したが、

塀裏からの烈しい鉄炮の中で取って帰った事などがその頃賞賛された。(p446)

註１　松平出羽守（直政1601－1666）　結城秀康三男、後松江藩主

註２　小幡勘兵衛（景憲1572－1663）　後甲州流軍学者として著名、作者大道寺友山の師

松平肥前守利常の攻城陣地の見分の為、使番の井上外記と安藤治右衛門の両人が訪れた時玉造り口の辺に城兵十人程見えた。　外記は鉄炮で敵一人を手際よく打倒したのでかなり遠いのにと皆が腕を誉めた。　治右衛門は外記に、貴殿は鉄炮の達人なのに余計な事をする。　理由は明日から此辺の陣地は難しくなる。　敵兵一人討取った事から敵は間合いを見る事ができると云った。　果たして翌日大御所が此処を見廻った時、御供の北見長十郎(後の名前五郎左衛門)の振袖に城中から打った鉄炮の玉が中った。　長十郎は少しも騒がず、その袖を見せ、此処には鉄炮の玉が来ますと云ったが大御所は退避しなかった。　そこで安藤治右衛門は、井伊掃部頭の攻城陣地には鉄炮玉が烈しく来ますが少しご見分されますかと言うと、それでは行こうと馬で立寄ったがそれ程鉄炮玉は来なかった。

大御所が茶臼山へ行きその後城の堀際近く迄馬を乗寄せた所、　城中の者が気付き矢ざまを開き或いは塀の上に乗り鉄炮を烈しく打ち出した。　お供は馬の口にすがり、危険ですと云ったが聞き入れず皆手に汗握っていた。　そこへ横田甚右衛門が進み出て、生れつけ此殿はこの様な矢鉄炮の厳しい所がお好きなのだ、皆そこから下がりなさいと云って馬之口に取り付き、船場方面には城中から大砲を打出しており、味方がたいへん苦戦しています、少し御覧になりませんかと云い、馬の鼻を西側に向けたので、それでは其辺を見ようかと船場の蜂須賀阿波守（p447）の陣屋へ入った。

大御所の御前で本多佐渡守が、御前様は頻繁に城廻りを巡見されますが、将軍にも巡見にお出かけ戴きましょうかと伺った。　大御所は笑いながら、私は若い頃から敵と対峙しており、陣中に居た記憶はない、　しかし大将の考え次第であると上意があった。　佐渡守は驚いて早速岡山の本陣へ帰り報告したので、其後は将軍も度々巡見に出馬した。

十四―四　和談の動き

大御所の命令で備前島の菅沼織部の攻め口から大砲百挺を揃えて城中へ打ち込んだ。　又玉造口の攻口から千畳敷広間を目標に大砲を打ち込んだ。　ある朝城中屋形の三の間という所に女中が多数集り朝茶を呑んでいたが、そこへ大砲の玉が一つ飛んで来て茶たんすを打ち砕いた。　女中達は肝を潰して其悲鳴が淀殿の居間へも響いた。　夫以後淀殿も軟化して、何とか和談に持ち込めないか、秀頼卿の為ならば自身が江戸へ下ることも厭わないと言って織田有楽斎、大野修理にその旨を伝えた。　しかし秀頼が承知しないので、それでは近習の幹部に諫言させようと相談した。　しかし渡辺内蔵助は鳴野の一戦以後秀頼の信頼を失い、薄田隼人も馬喰か渕の出曲輪を取られた事で、日頃の力自慢程でないと城中の人々に云われているのを恥じて万事控え目である。　木村長門守は後藤が証人として今福での働きを秀頼に報告したので、従来に倍して信頼されているので木村に言わせ様となった。

有楽斎と修理は木村長門を（p448）閑所へ招いて、和談の上淀殿を江戸へ差出すべきと秀頼卿に申上げてくれと説得した。　木村は両人へ向かって、今皆さんの言われる事は最初に片桐が云った事と全く同じです、　今になってその様な事を申上げる事は私はできません、皆さんに何度でも申上げますが、　今此様になった事もつまる所秀頼様の運が尽きたと歎く

以外ありませんと言うので両人も呆れ果てた。　其後後藤からも強く進言したので秀頼も納得して和談に向けて動き出した。
著者註　この事は難波戦記等には見えないが、牧尾是休斎が語るのを聞いて書留めた。

城方の大野主馬は道頓堀筋を担当して守り堅めていたが、関東勢が船場を乗越えて土佐堀阿波座近辺迄占拠したので、兎に角下町筋は捨てて上町だけを堅め様という評議により、秀頼卿から其旨命ぜられた。　そこで下町方面を守っていた各部隊は了解したが、主馬一人は同意せず、此主馬一人は捨て殺しにして下さいと云って引払わなかった。　或日主馬を急な用事と云い城内へ呼寄せ、其留守の間に城中から隠密が出て今福方面から長堀に放火して焼き上げたところ、折から風が強く道頓堀筋は風下故一気に燃え広がった。　主馬の陣所へも火が掛ったので武器や馬具等は取り敢えず上町に移した。

塙団右衛門の部隊は武器だけは全て持って本町橋を渡り城内へ入った。　その時この口を担当している織田左門の家老、今中右馬之助が出入りを検閲しているので団右衛門は彼に、今宵のやり方は考えの浅い判断で残念な事だと云った。　そこへ織田左門が塙を見付けて、其方の（p449）差し金で主馬に強く意見をしたと云うが言語道断の失策だと云う。　団右衛門は怒って、是迄多くの戦いに参加してきたが、陣払いもせぬ内に自分の陣を焼く様な愚かな事は見た事がない、　さぞ関東方の笑い種になっている事だろう。　しかし此団右衛門の配下の者は矢一本も残していない、その事は後日明らかになるだろうと返答した。

そんな中蜂須賀阿波守が本町筋御堂辺に陣を構える小屋の前に、主馬の配下が退く時捨てた旗指物を立て並べて物笑いになっていた。　城中にもこの事が聞こえたので主馬は心外に思い、

塙団右衛門、御宿越前などと密談し、蜂須賀の部隊へ一夜討する事を企てた。　併し色々支障もあり延び延びになっていると十二月上旬の頃から和談の噂が頻りに出てきた。　明日にも和談が決まっては残念だと、十二月十六日の夜に決行と決めて内密に伺いを立てたところ、秀頼卿も賛成し、夜討の時門通行の為に林伊兵衛と云う目付役の侍を一人主馬方へ添えた。

秀頼卿の命として夜討の隊長は主馬組では塙団右衛門とし、夜討に出る部隊は八十人、但し年齢十六歳より五十歳迄の者だけを撰ぶと云う事だった。　この時若し負傷などした時のため家来一人宛連れて行く事も了解された。　そこへ米田監物と上条又八の両人が団右衛門方へ来て、夜討の人数に加りたいと云う。　又八は独身であるから了解したが、他人への配慮から（p450）その時に望んで参加した事にすると団右衛門が云うので、昼間から団右衛門小屋に隠れて居り夜皆と一緒に出て行った。
米田は部下を持つ身だからと参加拒否されたが御宿越前は、本町北の角の池田宮内少の陣は蜂須賀家の陣所に近いので、夜討を掛けた時池田の部隊が横から攻めて来る事も予想される、米田の部隊はその押さえとして参加されたいとの評定になり、米田部隊は夜討部隊が出払った後に付いて出発する手筈となった。　出発の時門の扉に塙団右衛門と御宿越前が鎗の石突を入れ違いにして一人宛出した。

蜂須賀陣場近くに寄って見たところ　篝を焚いて居る者は何れも眠って油断している。　そこへ押掛けたのでたいへんな騒動になったが、蜂須賀方の稲田修理及び同九郎兵衛父子を始め配下の者を手早く纏めて出合った。　中村右近は白い小袖を上着にして鎗を持ち一人で駈出すのを主馬組の木村喜左衛門が右近に鎗を付けたが、稲田修理が駆けつけて喜左衛門を突倒すそれを見て主馬組の牧野源太、畑角太夫、田屋馬之助等が駆けつけたので修理は引き退いた。

塙団右衛門配下の生駒又右衛門が最初に首を取り、主馬方へ持たせた。　又繰り込んで中村右近が倒れているので行掛りに首を取ろうとした所に、九郎兵衛十五歳が其辺に控えていたが是を見つけて、又右衛門を突伏せて則首を取り、右近の死骸を指示して引取らせたと言う。其夜団右衛門の配下が討取った首は廿三級だった。　今宵夜討の大将塙団右衛門と書付けた札を多数戦場にばら撒いたので団右衛門の働きは広く知られた。(p451)

稲田修理の老父宗心は嫡孫九郎兵衛の初陣が心配で、隠居の身だったが主人阿波守へ断り大坂へ来た。　陣中では九郎兵衛と一所に寝ていたが十六日の夜急にに起上って九郎兵衛を呼起して息子修理方へ使いを送り、今宵城中より夜討を掛けるかも知れない、外の陣に云わず自分の部隊だけは準備して置く様にと伝えた。　そして自身は九郎兵衛に具足を着けさせた。稲田修理を始め家来達も、昼も変わらぬ様な月夜に夜討があると宗心は言うが理解できない、少しボケてきたのでは思ったが程なく城兵が攻めてきた。　修理九郎兵衛父子は勿論、家来達も全て準備ができていた。　宗心は古老の者だけあって平常を知り、変を知ると云う兵法に通じていたのである。

其頃大御所からの指示で、今後各攻口は大砲だけでなく、鉄炮の一斉射撃を行い、時刻に関係なく鬨の声を揚げる様にと触れた。　全ての寄手がそれを実行したので城中の人々はたいへん困った。

十二月十八日本多佐渡守に指示して阿茶局を同道して京極若狭守陣所へ行き、若狭守の老母常高院を城中から呼出して和談の打合せを行い、両人は茶臼山へ帰り常高院は城内へ帰った。

十九日若狭守陣所にて常高院と上野介、阿茶局の会談があった。　関東方の軍勢で城の惣構を取払い、　城内の軍勢で二三の丸の塀・柵を取払わせ、そこに両御所が出馬して、その上で

誓詞を調える(p452)様にという事で大体決まった。

註１　常高院　浅井長政の三人娘の真中で京極高次の正室、姉は淀、妹は秀忠御台所、於江

註２　阿茶の局（1555‐1637）　家康の側室、雲光院

十二月廿日の朝本多上野介より有楽斎と大野修理方への申入れは、　上々様方は一旦は武力行使に及ばれたが、親子の契約のみならず縁戚関係も色々あり内々では和談も大体済んで居りますが、表向きに何も動きが無いのは御両所の考えで進めた内々の和談に何か問題があるのかと疑問も持って居られます。　早々に手続きをとられるべきで、延引すれば内々で済ませた御両所の立場がありません。　そのため内意を申入れますとの事である。

有楽修理両人共にたいへん驚いて村田喜蔵と米田権右衛門を送って返答した事は、上々様方のご内意が済んで居れば、下々がとやかく言う事はありません、我々が尊重する事は後ほど申し上げますとの事であった。

註　徳川家と豊臣家の姻戚関係　　秀頼の正室千姫は秀忠娘で家康孫、　淀と秀忠正室は姉妹

仲裁について満足との事で淀殿の方から大御所に常高院、二位局、大蔵局三人を使として時服三重、緞子三十巻が贈られたた。　これで上の方は通じたという事で其日有楽斎と大野修理から和談の件に付いては私共は少しも異論ないと云う確認のため、織田武蔵守（有楽斎子）と大野信濃守（修理亮の子）の両人を証人として差出したので、則本多上野介が預かった。

秀頼卿の判元を確認するため板倉内膳正が派遣された。

註　大蔵局（？‐1615）　大野治長、治房兄弟の母、淀の乳母

廿一日和談が済み誓詞の取替しとなった。　大御所の筆元拝見として大坂方から木村長門守と

郡主馬が派遣された。　誓詞の面に判を押した物を長門守が拝見して、秀頼はこれで何の依存も無いでしょうが、母公は女性であるので今少し御血判を鮮やかにして下さいませんかと云えば大御所は、　私は（p453）は年寄りで指に血もないぞと云いながら女中方に手を差出し、針で指を突き判形の上にたっぷりと血を注いだ。　上野介が取り次ぐと長門守は謹んで受取り上野介に、この様な和談が調った事は私なぞたいへん目出度い事で恐悦に存じますと云って御前を去った。この時御前伺公の人々は若輩の長門守は不遜の振舞いで無礼だと思ったが、その後上野介が御前に出た時、其方は長門の年を知っているかと質問があり、廿三四歳程になると聞いておりますと答えたが、美男のせいか夫より若く見える、　彼が年を重ねたらどんな人物になるだろうと上意があった。　それ以後上野介家中では長門守の事を皆留意する様になったと五十幡谷泉が語った。

註　木村長門守（重成 1593 - 1615）　秀頼近習

十四―五　大坂城総堀埋め立て

十二月廿二日、大御所は安藤帯刀、成瀬隼人、永井右近を召して大坂城諸口の陣地を引払い本陣に合流する様に指示し、松平下総守、本多美濃守に佐久間河内、瀧川豊前、山城宮内、山本新五左衛門等を添えて大坂城四門の警固を行い、　関係者以外の出入りを堅く禁じた。同廿三日より総軍勢で城の総構えの堀を埋め立てた。

廿四日織田有楽と大野修理が茶臼山へ御目見に参上して呉服三重宛献上した。　本多佐渡守と藤堂和泉守が挨拶に出た。　有楽斎と修理は大御所に面会し修理へは特に親しい言葉があったと言う。　織田有楽は面会終了後、　次の間で近習衆に向い和談が調い平和の世になり、老後を安楽に（p454）暮らせる事は私としても嬉しいと茶を立てる仕草をしたと言う。　この日今度戦に

参加した諸大名全員が茶臼山の陣営へ参上して、和平の悦びを申上げた。

大御所は蜂須賀至鎮を召して今度の軍功を賞美し、又同家の家来へも面会し、稲田宗心と林道感の両人には黄金百両宛下された。　稲田修理、同九郎兵衛父子は感状に刀を添えて下された。　其外山田織部、樋口内膳助、　森甚五兵衛、岩田七左衛門、森甚太夫等には感状に時服を添えて与えられた。　その時御側衆に、子供の名前を付ける時はよく考えるのが良い、あの九郎兵衛は当年十五歳と云うのに九郎兵衛等と大人っぽい名前を付けたのは残念である。何丸とか何若とか名付けて置けば今度の働きも特別に奇特な事と人々が思うだろうにと上意があった。

大御所は帰路に付く前、本多上野介正純を召して、当城の総構へは勿論、二の丸、三の丸の堀も埋めさせよ、埋め方は三歳の子供でも自由に歩行できる位の積りでと指示した。大御所が京都へ去った後、　上野介方から城中へ、二三の曲輪は城方で取払う約束ですが、遠国の軍勢は工事が終わる迄在陣するのはたいへんなので手伝って早く終わる様にと願うのでその意に任せたいと断り堀を埋め始めた。　有楽、修理方よりも奉行人を出して、和談の時に合意された事は二の丸、三の丸の塀を取払う迄で、堀迄埋めます（p455）と言うのは早合点で、それは不要として断る様に指示した。　しかし諸家から出した奉行役の侍達は口々に、その様なお約束と云われても私共は聞いておりません、堀を埋めさせよと主人達から言われておりますと答え、猶一層精を出して埋め立てた。　有楽、修理は怒って上野介方へ抗議したが、上野介は昨夜より酷い風邪で寝ておりますと取次の者が云って埒が明かない。　その内堀の埋立はどんどんと進んだ。

廿五日、大御所は大坂を出発して帰路についた。
廿八日、大御所は大坂在陣中に度々勅使を下されたお礼として朝廷に参内した。
慶長廿年（1615）正月三日、大御所は京都を出発し駿府へ帰城した。
正月十日、将軍の使者として安藤治右衛門と佐久間河内が駿府へ参上して、大坂城の壁を毀し堀を埋めた事を報告した。

将軍は更に岡山に在陣して、大坂城廻りの破却を指示し、正月十一日蜂須賀阿波守を召して軍功を賞美し、松平の称号を許すと共に感状及び刀等与えた。　又先日大御所より賞された家来の面々へも感状と拝領物を下された。　又佐竹義宣の家来梅津半右衛門、大塚九郎兵衛、黒沢甚兵衛、戸村十太夫等にも感状に呉服御羽織を添えて下された。　上杉景勝の家来杉原常陸、須田大炊、鉄孫左衛門等にも感状、黄金、呉服等が下された。
正月十九日、将軍は大坂より伏見城へ帰り、廿七日参内（p456）の後、翌廿八日京都を出馬し江戸へ向かった。

二月廿三日松平左衛門督忠継（池田忠継、家康外孫）は急病で備前の国で卒去、年十七才
此月大御所は駿府に井伊掃部頭直孝を召して、其方の兄右衛門大夫は常に病気で勤務も
侭ならず去年の大坂の陣（冬の陣）でも其方を代理として差出した。　外の事とは違い外様大名
達も知っている事である。　しかし病気では止むを得ないので親兵部（故直政）の跡取りは其方
にさせる。　其方の今の領知である上州安中三万石の所は右衛門大夫に代わりに与えると
言渡された。

掃部頭は安藤対馬守を通して、たいへん有り難い上意ではありますが、兄弟の倫理を乱し弟の

身として其家を継ぐ事は不義の至りですから御請けできませんと言う。　対馬守はその趣意を
報告したが大御所の許容がないので、曲げて御請けするよう説得したが掃部頭もこれは幾重にも
御辞退申上げると云う。　そこで対馬守は直孝に向かって、云う迄もありませんが、大事な事です
から十分考えて下さい。　若し貴殿が辞退したからと云って軍役等の勤めもできない人を其の侭
佐和山の城地に置かれる事はないでしょう。　そうなると故兵部殿の跡に上は貴殿を立てられた
が貴殿の辞退でこれが潰れます。　そうなると大勢の家中が非常に困難に陥る事が気の毒です
と対馬守が言うと直孝もたいへん困惑し、その様な事なら異議なく御請けしますと決着した。

三月五日、京都板倉伊賀守方より注進があり、大坂では再び（p457）反逆の兆しがあり、　米大豆
を買調へて城中へ取入れています。　昨冬埋めた堀の土を上げて浅い所で腰丈、深い所は肩を
越える程です。　浪人達も多数寄集り、京都を焼払うと云う風説も頻りの様ですと報告した。　しか
し
大坂城中ではこの情報が大御所に通じているとは知らず、青木民部少輔、大蔵卿、二位尼三人を
駿府へ派遣し、去年は旱魃と兵乱の為、摂津及び河内の耕作は損亡が多く、蔵入りの米は今迄
に無く少なくなりました。　城中が苦しんでおりますので御援助下されたいと云って来た。
大御所は先に伊賀守方からの注進に依って全て承知していたが、何も知らない事にして青木に、
私は隠居の身であるから江戸に行って将軍に頼むなら何か方策もあるだろうと応じた。　青木は
江戸へ向い両女は駿府に留った。
註；　豊臣秀頼の領知は摂津及び河内国の二カ国

四月一日、松平下総守と本多美濃守は京都東寺七条の間に陣取り王城警固を命ぜられた。
大阪城中では織田左門頼長が城中全軍の指揮を任される積りでいたが衆議が纏まらなかった。

左門頼長は、私は信長の甥であるから城中の指揮を任せらるべきであるが、認められないなら止むを得ない、　籠城する価値なし云って京都へ帰った。　織田有楽斎も正月中に京都へ退去した。

註　織田有楽斎（長益 1547 - 1622）織田信長弟、　織田左門（頼長 1582 - 1620）有楽斎の二男

十四―六　第二次大坂戦争（大坂夏の陣）の足音

大阪へ出陣として大御所は四月四日駿府を出立、同十八日に京都到着二条城へ入る。　将軍は四月十日江戸城を出馬し、道中急いだが大軍の事なので編成は捗らなかった。　その時巷では、大御所は大坂へ着陣次第、畿内と中国だけの軍勢（p458）で攻める考えではと予想もあった。　将軍はこれを聞いてたいへん驚き、自分が着陣する迄大御所の二条城からの出発を遅らせる様にと藤堂和泉守と本多上野介の両人へ内々で指示した。

四月廿一日、将軍は伏見へ着陣すると直ぐに二条城に行き大御所と対面した。　大御所は来る廿八日に大坂へ出馬するとの上意であるので、とも角もお考え通りと云う事にし其後藤堂和泉守を通して加賀、越前、出羽、奥州の軍勢が参陣するまで一週間程の出陣延期を交渉した。大御所の考えは、今度は城廻りの要害がないので、大坂方は籠城して防禦する事は止めて城兵は城外に出て一戦するという評議になる事は明白である、　遠国軍勢を待つ迄も無い。　仮令敵の人数がどれ程あっても野合の衆であるから片端から追崩して決着を付けるので、兎に角廿八日に出陣すると云う。

将軍は伏見へ帰り翌朝早天に二条城へ参上して、　昨日も申上げた通り、廿八日に出馬なさる

件は延引お願いしますと直接申上げた。　大御所は、前に和泉守にも云った様に野合の衆との合戦は人数の多少には依らない。　私も老年であり今度が最後の合戦となるので、私が先手を勤めるので、その積りで居られよとの上意である。　将軍は、お気持ちは分りますが、この様な事は諸家の記録にも記され末代迄残ります、　御前様が先手で私が後となれば天下の語り草になり迷惑此上もありません、（p459）これは幾度でも御断わりしますと云うが大御所は聞き入れない。

そこで大御所は本多佐渡守へ向かって、将軍はあの様に云うが、今度の一戦は私の一身に掛け先へと言うぞと上意があった。　佐渡守は御前に進み出て、その様に親子様同志で水掛論を為さっては解決しません。　先手は古法の示す通りに為さるのが良いでしょうと言う。　大御所は佐渡守の古法とは何かと問うと佐渡守は、私なぞが聞いているのは古来より先手は少しでも敵地に近い方が勤めると云います。　その場合将軍は伏見に在城ですから、先手を勤めるのが当然で大御所が先手をと言われるのはご無理ですと云う。　大御所は、佐渡守は以外と古法に通じていたかと笑い、それなら将軍が先手を勤めるのが良いと決まった。

この後佐渡守がどうしても廿八日に出馬されますかと伺ったところ、遠国の軍勢が到着しない場合五月一日迄延ばそう、今度は手間が掛らないので、兵糧補給運送などもせず各軍勢は手持ちの腰兵糧だけで出陣する様にと触れよとなった。　其後本多上野介が出て陣支度の事を伺うと全て五日分と指示あったが、その後米五升の積りで全て支度する様に台所方役人へ伝える様にと上意があった。

著者註　この件は旧記にも概略載っているが、爰に書留めたのは喜多見宗幽が浅野因幡守殿へ語った事である（p460）

四月廿三日、京極若狭守の母である常高院を通して城内へ和談を勧めたが秀頼卿、母公共に拒否した。
大阪城中では秀頼が古新の諸侍を呼び集め戦の評議を行った。　皆は天王寺に堀切をして逆茂木の柵を設けて一戦を行うのが良いとなった。　その時後藤又兵衛の意見として、平地の合戦で大御所と勝負を争う者がいるだろうか、否とても我々が及ぶものではない。　利の得失はあるが、国府越、くらかり峠、新条越、立田越等の険阻地へ軍勢を配備して防戦する以外考えられません。　大軍を平地へ誘い込み一戦をすると云う相談であれば此又兵衛は参加しませんと云うので、皆後藤に一理あると云う事になった。

それでは大和口の一の先手は又兵衛に任せようとなった。　配備の状況は一の先手後藤又兵衛に続き、薄田隼人、槙嶋玄蕃、井上小左衛門、山川帯刀、北川次郎兵衛、山本左兵衛、大久保左兵衛、吉田九郎八郎である。　二の先手は真田左衛門、毛利豊前、明石掃部、長岡与五郎、小倉佐左衛門、渡辺内蔵助、大谷大学、伊木七郎右衛門、大野修理は此手に加る事になった。

その時大野主馬方から先に間者として送り込んだ北村吉太夫と大野弥五左衛門の両人からの連絡があり、　紀州方面の一揆は順調で熊野と有田筋、高野山下の者達は皆大坂方の味方になります。　そこで泉州志達に在陣している浅野但馬守を大坂勢が攻めれば、後から彼等が押寄せて（p461）前後を挟んで但馬守を討果す事が可能ですとあった。　大野主馬はたいへん悦び、急に出陣の支度が調い次第出発して阿倍野で勢揃いすると触れた。

浅野但馬守の旗本は泉州志達に陣取り、先手の家老浅野左衛門佐及び浅野右近の両人は番頭、惣侍、足軽等を率いて佐野村へ進出して陣を構えた。　そこで左衛門佐に知らせた者が

有り、大坂方からの間者二人を捕らえようとした。　大野弥五左衛門は気付き逃げようとしたのでその場で切殺し、北村は生捕り牢に入れておいた。　この事は当分大坂方には知られなかった。

註　浅野但馬守（長晟1547‐1677）兄幸長が嗣子なく病死した為紀州の家督継ぐが、土着勢力の一揆に悩まされる。　後に芸州広島に加増所替

廿六日大御所と将軍は今度大坂に出発にあたり水野日向守を二条城内へ呼んで、其方は大和組の諸部隊を指図する様にと言渡した。　大和組とは松倉豊後守、神保長三郎、別所孫次郎、桑山伊賀守、同左衛門佐、本多左兵衛、多賀左近、秋山右近、藤堂将監、村越三十郎、甲斐庄喜右衛門、山岡図書、奥田三郎右衛門等であり、丹羽勘助、堀丹後守なともこの軍勢に加わった。

廿七日水野日向守は鳥羽を出発して大和路へ向かうが、大坂勢が生駒山を越えて放火をしていると聞こえたので道を急いだ。　その頃松倉豊後守は五条二見に在城していたが大坂勢が生駒山を越へて放火をしている聞き、自分の小部隊を率いて五条を出て大坂勢へ馳向った。道筋に居住する大和小身衆も早々出陣せよと触れたが、皆既に法隆寺へ寄集り不在である。その中で藤堂将監一人は松倉に加わり、奥田三郎右衛門は奈良より出て松倉に加った。水野日向守が京都より（p462）、松倉豊後守が南の方から駆けつけたので、大坂勢は両方の旗を見ると早々引揚げ新条越えをして河内路へ退いた。　松倉は烈しく追詰め六人を生捕、首一ツ取て京都へ差上げたので両御所は日向守と豊後守の働きを感賞した。

大坂から大野主馬と後藤又兵衛の両旗で大軍を率いて南都攻略を目指し郡山城を攻めたが、城主筒井主殿助は与力三十六騎と足軽迄を支配する身上だが郡山城を守る事が出来ない。

城を明けて福住へ退いたが、面目ないと云う事でそこで自害した
水野日向守は南都が心配で急遽駆けつけたところ、　南都の奉行中坊左近と藤村市兵衛が
長池迄撤退して来て日向守に出合った。　両奉行が云うには、大坂勢は大軍で奈良般若寺坂迄
乱入しました、中々手強いので此辺に陣取して様子を見てから動かれるのが良いでしょうと言う。

しかし日向守はそれに同意せず、大坂勢に南都を焼せては両御所への私の立場がない、討死
を覚悟して進軍する、　皆さんは南都を預ってるのだから、たいへんとは思うが案内をして欲しいと
云うと、心得ました云って両人共引返して進軍した。　そこへ松倉十左衛門(豊後守舎弟)と奥田
三郎右衛門方から早馬の使が来て、敵は郡山を焼払い陣を取ったが南都は未だ焼けていない、
我々だけでは最後迄持ち応える事は難しいので支給援護されたいとあった。　日向守はそれを
聞き、たいへん喜び益々奮い立ち道を急いだので其日の暮頃には南都へ到着した。　南都を
焼き払う予定で奈良迄来た大坂勢は早々郡山へ引取り、直に大坂へ帰ったという。

註１　筒井主殿助（定慶1556－1620）　大和郡山城主

十四―七　樫井の戦い

廿八日紀州へ向う大阪勢の大野主馬部隊の中で塙（p463）団右衛門が先手と指名された事に
対し、同組の岡部大学は心外に思っていた。　そこで大学は自分の部隊を残して、自身は二三
騎で馳出て阿倍野海道を和泉路へ入った。　団右衛門はこの事を知らずに堺海道を安立へ向け
進軍していた。　そこへ大学の部隊が塙の部隊を押退け先へ行こうとする。　団右衛門が見咎め
押留ると岡部大学の配下達は口々に、隊長の大学が先へ行ったのに、その部隊が後に残る理由
はありませんと言う。

団右衛門はそれを聞いて、隊長の大学が軍律を破り抜け駆けをしたからと云って、部隊全体が
規則を破ってよいのか。今日の先手は此団右衛門が担当するので先へ一人も通す事はできぬ
と断り、団右衛門の部隊が道を一杯にして進軍した。

其頃岸和田の城主は小出大和守で金森出雲守が加勢として籠り守っていた。　それを押さえる為
に大野修理の家老宮田平七は大津に陣を構えていたが、人数が少ないので堺の警固に当って
いた槙島玄番と赤座内膳の両部隊を宮田隊に加えた。　更にその援護として大野道犬斎が堺の
湊に陣を取り、堺の町を焼かせたので、其火の光で廿八日は闇夜だったが大坂勢は紀州へ向け
楽に進軍できた。

浅野但馬守長晟の先手部隊が佐野に在陣したとき、大坂方間者の北村の白状により紀州の一揆
蜂起計画及び大坂方が大軍で紀州に向かう事が明らかになったので、先手勢も志達へ引取る様
長晟の差図があり、浅野左衛門佐、浅野右近の両部隊は引取り、　亀田大隅守始足軽大将達は
佐野に残った。　大坂方の動きを監視すると（p464）、夜明けに大坂先手が攻めて来たので敵に
八町畷を越させて樫井村へ引入れ、頃合を見て志達より一直線に下って敵を悉く討取ろうとする
但馬守の作戦である。　そこへ岡部大学が塙団右衛門と先を争って金の馬櫛の差物にて一番に
馳来たが紀州勢の放し掛る鉄炮に中り負傷し進めず馬を返した。　大学の部下はそれ以上は進む
事もしなかった

そこへ塙団右衛門が漸く騎馬の侍五六騎を率いて樫井の町へ乗入れた。　ところが上田主水入道
宗古斎が鎗を持って待構えているので、団右衛門も従卒と共に一斉に突いて掛れば上田の家来
高尾小平太、水谷又兵衛、横井平左衛門等が主人の宗古と立並んで鎗を打入れる。　宗古は

団右衛門の家老三懸三郎右衛門と戦うが宗古の鎗が折れてしまい、止む無く組打ちとなり組伏せられる。　そこへ家来の横井平左衛門、横関新三郎が駆けつけて三郎右衛門を討取った。その時宗古も負傷したが軽傷で済んだ。

但馬守の隊長田子助左衛門、安井喜内、浅野左衛門佐の隊長松宮庄助、長田治兵衛、其外亀田の家来達が寄集り競り合った。亀田大隅も敵を突伏せたところ家来の菅野兵左衛門が駈付け其首を揚げると、次に掛ってきた敵を大隅は又突伏せ家人の吹田作兵衛に首を取せた。塙団右衛門は矢で負傷したところ浅野左衛門佐の家人矢来新左衛門が鎗で突伏せ打留めた。淡輪六郎兵衛も左衛門佐家人永田治兵衛に討たれ大坂勢は悉く敗北した。

一方大野主馬は先手で合戦が有った事も知らずに貝塚で地元の人の持参した弁当の接待を受けたいた。　そこへ（p465）淡輪六郎兵衛の下人達が逃げて来て、団右衛門、六郎兵衛其外主馬部隊の熊谷忠太夫、須藤忠右衛門等が討死した報告を受け、主馬は驚いて急いで樫井に進軍したが紀州勢は既に引揚けた後だった。　そこで長岡監物、上条又八郎、御宿越前等が馬を走らせ在所の者達を呼び、引揚げた紀州勢との間はどれ程か訪ねたが、既に一里以上隔たりがあるとの事だった。　又これより先の道は非常に険阻との事であり、其上夕方なったので追討はやらないと云う相談に決した。

主馬は大坂へ引揚げるとき家人に命じて、団右衛門の死骸だけは火葬にして樫井の宿の入口に埋め置いた。　其跡を尋ねた雲居和尚は旧友の因みにより石塔を建てたが今でもあると云う。この樫井の一戦で利を失い、大野主馬が大坂に引揚げると聞き、岸和田の押さえとして布陣した宮田平七を始め、皆が安立町迄引退った。

浅野但馬守は樫井で討取った首に使者を添えて二条城へ差上た。　大御所の悦びは特別であり感状を下され、二人の使者にも馬が与えられた。　その時塙団右衛門の首を見たいと云われたが本多上野介が内見したところ季節柄かなり腐食が進み、御覧に入れる状態ではありませんと報告して上野介の指示でしかるべく処理した。

出羽、奥州、加賀、越前の軍勢が追々京都に到着した。　両御所も近日中に大坂出陣となるので先手の藤堂高虎は四月廿六日に淀を出発し河内国須南に布陣した。　井伊直孝も伏見を出発し其外榊原遠江守康勝、本多出雲守忠朝等は（p466）竹田より出発して河内へ行軍した。

註　竹田　京都伏見

この時大御所は伏見城に入り、城内の船入の櫓から各軍勢の行列を上覧していたが、井伊掃部頭直孝の旗奉行孕石豊前と広瀬左馬は打合せて掃部幟を伏せて進軍した。　掃部頭は般若野宮内を呼んで、両御所の上覧だと云うのに何故幟を伏せるのか早く揚げよ伝えさせたが、旗の事は旗奉行に任せて下さいと云って揚げない。　掃部頭は怒って再度馬場藤左衛門を使いに出して是非幟を立てよと云ったがそれでも構わず、肥後殿橋を渡って後初めて幟を押し立てた。　これを櫓の上で大御所は見て将軍に向かい、　当城へ旗先を向ける事を遠慮して今旗を揚げたのは流石に信玄の家風に馴れた者達だけの事はあると上意があった。

註　井伊直孝の父直政は家康の命で武田家の精鋭山県三郎兵衛部隊を引取り配下としたので井伊家には信玄流の作法が残っていた。

落穂集第十四巻終

十五―一　道明寺の戦い

慶長二十年（1615）五月二日に大御所、将軍は京都を出発して大坂に向かう予定だった。
ところが四月廿六日に近江国の代官鈴木左馬助が戸田八郎右衛門と云う浪人に兄の仇との事で日の岡で討たれた。　戸田は山城の三井寺の方へ立退いたが、その時左馬助が持っていた書類箱を京都所司代の板倉伊賀守へ差出した。　その中に大坂城内からの密書があり、一揆を企てる廻状である。　調査の結果左馬助の舅である古田織部、茶道の木村宗喜を始め仲間廿四人が連座しており、糾明の結果の白状によれば両御所が京都を出発した後、帝を擁して二条城を攻め取り京都を焼き払う計画である。　この為二日の出発予定は延期され、木村宗喜を始め仲間廿余人は日の岡で磔罪に（p468）処せられ、古田織部にも切腹を命ぜられた。
この様な事もあり京都の事も心配であるので、　上杉景勝は大坂への出陣を中止して代わりに八幡辺に在陣して京都を警固する様に指示された。

五月五日朝十時に大御所は京都を出発し、尾張宰相義直、駿河宰相頼宣が御供したと言う。
将軍は大御所の出発に先立ち伏見城から出馬した。　その出立は山鳥の尾の羽織、羅紗の唐人笠の甲を着け、本多上野介が献上した桜野と云う馬に乗り、銀の天衝の馬印、金の扇の纏、二重ふくべの小印、五十振の中巻等、其外行列は昨年の冬の陣の通りだった。

同日関東方の水野日向守勝成は大和国の少大名達の総司令として国分に布陣し、本多美濃守、

菅沼織部正、松平下総守。徳永左馬助、遠山久兵衛等が続いて布陣した。
大坂方は後藤又兵が平野に陣を取った。　毛利豊前守と真田左衛門佐の両人も平野に来て、明六日の戦の時は深夜に軍勢を出して未明に国分山を越えて、何としても両将軍（現将軍秀忠、前将軍家康）の旗本を目掛けて戦おうと打合せて帰った。

後藤は宵から支度を調えて五日の夜半に平野を出発して松明を数多く燈して大和路に向って進軍した。　藤井寺に着いて後続部隊を待ったが遅いので、そのまま進み誉田の八幡辺で夜明近くなったので松明を消させて道明寺へ押掛けた。　後藤の軍勢の中、　両先手の古沢四郎兵衛は左り巴の紋の付いた旗、山田外記は釘貫の紋の付いた旗を押立て片山の上へ上り、左右に分れて布陣した。

関東方大和勢の中で奥田三郎右衛門は三千石の知行高だが、著名な浪人を五人養っており（p469）彼等を率いて片山へ向った。　この浪人の中で岡本加助は金の琵琶へらの指物を立て真先に進む、　桑山左近は奥田に向って、水野日向守が到着するまで待って一緒に攻め掛るべきと云うが岡本は、それでは時間が無いと云って片山の上に駆け上がるが後藤の先手組の打出す鉄炮に中り討死した。　これを見て奥田を始め残る四人の浪人及び奥田の従士が同時に鎗先を揃へて突掛る、

後藤の先手の者達数名と戦い、奥田方山田外記の配下の士が後藤方の佐伯次郎太夫等を討取った。　しかし大坂方は多勢であり、奥田は終に戦い負けとなり三郎右衛門を始め神子田井上下野、阿波仁兵衛等枕を並べて討死をした。　その時大和衆の松倉豊後守は後藤の左り部隊を追って本道を南へ進むが、　その後後藤の部隊が引返し松倉の部隊に突きかかる。

松倉方の天野半之助が留まり一番に鎗を合せ、其外の者も懸命に働いたが後藤方は多勢であり松倉の配下は皆討たれてしまうかに見えた。

その時堀丹後守が自身で鎗を取て真先へ進み横から後藤の部隊を突き立てたので、天野を始め松倉の部隊も丹後守部隊と一所に後藤勢を追い崩した。　その頃大和組、美濃組を始め奥州勢の片倉の部隊迄一斉に掛ったので後藤の左右の部隊は一挙に崩れる。　後藤の家老の古沢四郎兵衛を始め組の大方は討死し、其上後藤も鉄炮に中り歩行も出来なくなった。　後藤は其場を去らずに甲を脱いで家人の金森平右衛門と云う者に首を討たせ、遺言で首を具足羽織に包み深田に埋めさせたと言う。

薄田隼人は後藤に続いて自分の部隊を率いていたが、五月六日の早朝家来に向い、私は後藤と（p470）相談する事があるから先へ行くが、合戦前であるから直ぐに帰るからその積りでと云って馬を出した。　近習の若侍や歩行士など一人も不要と言い、　鎗持一人だけ連れて出発し自陣へは再び戻らなかった。　薄田は後藤に面談した後、戦い半ば頃の片山へ乗出し、水野日向守の軍勢に乗りかけた。　水野方河村新八郎が相手して互に鎗で争ったが勝負が付かず組打となった。隼人は評判の大力で新八郎を組伏せたが、水野の家来中川嶋之助と寺島助九郎の両人が間合いを見て薄田を討取ったと言う。

薄田隼人の討死の様子は牧尾又兵衛によるもので、牧尾は其日も隼人の供をしており、隼人が先に行くと云った時、お供したいといった六七人の内の一人との事である。　隼人は直ぐに帰るからと馬を乗り出したが帰りが遅く家中の者達は待ち兼ねていた。　その時道明寺方面で鬨の声や鉄炮の音が烈しくなり、　皆心配となり迎えに行こうと七人で相談したが外の侍達が我も我もと申し出た。

そうなっては隼人が事前に定めた部隊の手筈も成り立たなくなるのでどうしたものか思っていた。

そこへ友軍の部隊長の山川帯刀が乗馬で隼人に用があるとの事で尋ねてきたので、薄田は今朝夜明前に、後藤殿に相談があり出かけるが鎗持一人以外は供は不要との事で、直ぐに帰るからと云っておりました。先手の方では合戦も始った様に思えるので、近習の者が迎えに行こうとしたが外の侍も行きたいと云います、それでは部隊も乱れるのでどうかと結論が出ません。　幸あなた様が来られたので指図をして下さいと言った。　山川帯刀はそれを聞くと、当然（p471）帰る頃だがそれは不審です。　隼人殿は二の手だから先手の勝負を見て間合いを図っているとも思えます。何れにせよ合戦直前ですから陣を堅くする事が肝要ですと云う。

その時歩行士を預る権平と云う者が進み出て、私の預かる歩行士達は陣堅めに役立つ者達では無いので旦那を迎に行きたいと言う。　成程そうだと帯刀も言うので歩行の者は廿人程だが歩行士に準ずる者迄合わせ三十人余、茜の羽織を着ている者達を権平が引率して出かけた。　途中で旦那の馬を引いて帰る中間に合い、旦那は討死で鎗持も切殺され後藤殿も討死し、先手の部隊は全て破れたと聞いた。　薄田家中一同が力を落していると、　道明寺で敗れた部隊が大坂の方へ引揚げるのが見える。　この後に続く他の部隊の旗指物等も急に動きが出る様子もなく全体に敗軍となった。

薄田隼人は昨冬の陣で馬喰か渕の出丸を乗取られた時、大坂城中に用事があったが近所の町屋で遊女を愛し酒に酔っていた等が知られ、今度の陣では合戦初日と同時に討死しようと極めていたと云う。　これは牧尾意休斎が語った事である。

毛利豊前守は前日後藤と打合せた通りに天王寺を出軍して藤井寺辺迄進軍したところ、後藤が早くも討死したとの事で敗軍が崩れて来たので、打合せの作戦と異なる以上は真田を待つ事にしたが真田も来ないので力と落としていた（p472）。　関東勢は片山の一戦で勝利を得て勇み進んできたが、　真田左衛門佐（幸村）が七八千計の軍勢で押して来たので毛利も力を得た。真田と同じく福島伊予守、同武蔵、渡辺内蔵助、大谷大学、伊木七郎右衛門等も来たが毛利の部隊と一所には成らず誉田の方へ進軍して伊達政宗の先手に向かって対陣した。

大坂方が足軽を進めて鉄炮を打掛け後伊達方の片倉小十郎部隊と接戦が始るが、片倉勢が不利となり誉田の方へ崩れたが、片倉が指揮して軍勢を盛り返して真田の軍勢を押返す。此時城方の渡辺内蔵助が負傷した。　真田は池が有る場所に留まり金の蠅取の馬印を押立て、再び伊達方を追い立て奥州勢を誉田の町中迄追込んだ。　この時片倉小十郎と真木野大蔵が働きが目覚しかったと言う。　真田は毛利豊前と一手に成った。

この一戦の時真田の嫡子大助は十六歳の初陣だったが組討をして相手の首を取った。　股に鎗疵を負いながらも討取った首を鞍の塩手に結んで乗り付けた。　馬から下りると毛利豊前守や槙嶋玄蕃の両人が大助の側へ立寄り、　二人共扇を開いて大助を扇ぎ、良くやったと感心し、父の左衛門佐も嬉しそうに笑いながら、疵は浅いかと尋ねると大助は、軽傷ですと答えた。

この時左衛門佐は豊前に向って、私が時間を間違えて遅くなり又兵衛（後藤）、隼人（薄田）其外も討死と聞き、此上は作戦も考えず責めてもの申訳と思い一戦を行いました、何事も予定が狂った事で秀頼卿の運も尽きるか思いますと悔んだ。　豊前守は真田に、もはやこの後は分っているので此処で討死して（p473）決着しましようと云う。　真田も、私もそう思いますと云った

所へ、大野修理方より秀頼卿の命令との事で連絡役の侍達がやって来て、関東勢が段々押して来るので、早々此処を引払って城に帰る様にとの事である。　それでは其通りにしようと言う事になったが、若江や八尾方面の戦いの状況不明なので、真田も毛利も暫く帰城を見合せた。

十五―二　八尾・若江の戦い

五月六日の朝、藤堂高虎は千塚に布陣したが、五日の夜半に家老達を呼集め、明朝は何処へ軍勢を向けるか相談した。　その時渡辺勘兵衛が進み出て、此処から八尾、久宝寺の方は地形が宜しくありませんので道明寺口へ進発するのが良いでしょう云い、其通り議決した。翌朝になり勘兵衛は、私は先に行って道明寺辺を見通せる場所があるので見て来ますと馬を乗出し、例の小山の上から見渡そうと思い馬を早めた。　そこで偵察に出ていた浦井与右衛門に出会ったので様子を尋ねたところ、道明寺では大坂方の後藤又兵衛が進出し片山の上へ上り味方の大和衆と対峙して鉄炮を打ち合っている様ですと報告があった。

勘兵衛はそれを聞くと、今から道明寺口迄進軍している内に決着が付き戦いには間に合わぬと思いますがと報告する様に云うと山の上へ馬を乗り上げた。　すると片山の方角で鉄炮の音や人声が盛んに聞こえるので、帰ろうと思って西の方を見ると木村長門の軍勢が若江村から八尾堤迄一面に見えた。　急いで帰る途中で藤堂仁右衛門の部隊が道明寺を目指して進軍してくるのを勘兵衛が押留めると仁右衛門は、一時でも早く道明寺へ急いでいる軍勢を何故押留めるのかと咎めた。　勘兵衛は、その事ですが、（p474）道明寺では既に一戦が始っています。　ここから一里程の道を行くので間に合いません。　幸に近い所に敵の軍勢が居りますから、こちらで一戦する方が良いでしょうと指さして幟の先を見せると、仁右衛門も納得して部隊を留めて西向きに

進撃する支度をした。

勘兵衛は高虎の前で考える通りを述べたが高虎は、それはどうかなと疑問を持った。　勘兵衛は重ねて、この案は正しいと思います、敵方から仕掛けた一戦であれば御思案される事も無いでしょうと云えば高虎も納得して、先手の家老達へ使番を送り触れさせた。　勘兵衛が云うには此辺はたいへん足場が悪く、以前から戦いをする場所ではありません、　田の中の四筋の道を整然として静かに行軍し、横堤で到着する各部隊を待合わせて軍勢が揃ったところで攻掛る様にしたく思いますと云えば高虎も了解して是も諸部隊に通達した。

勘兵衛は自分の部隊へ帰ると具足羽織を脱捨て、糸たての指物で自分の旗を後の方に下げる様指示し南二筋の道を進んだ。　藤堂仁右衛門、同宮内、桑名弥次兵衛、渡辺掃部等の部隊を横堤で勘兵衛が押留めたが北二筋の道を進んだ。　藤堂玄番、同新七、同与右衛門の部隊も横堤では留まらず村々へ押掛けた。　これを見て南二筋の部隊も留まらずに進軍し、仁右衛門、弥次兵衛、宮内、掃部等は八尾の地蔵堂を目掛けて進撃し、勘兵衛はさんとあの村へ向って四筋に別れて進軍した。　高虎の軍勢は一所に纏まる事が出来ず、夫々の部隊が単独で戦う様になってしまった。

木村長門守重成は若江へ進出したが友軍の長宗我部盛親は未だ八尾におり、早くも藤堂の部隊が押掛けてきたので若江に行く事（p475）が出来ない。　長宗我部は陣立を東向に変えて家老の吉田内匠方へ使を出し、ここで一戦が始るが旗本が少数なので急いで集合して合体する様にと云ったが、吉田の前には渡辺勘兵衛が向かって来るので此方も手を放せず、夫々単独で戦うしかない旨返答する。

藤堂仁右衛門、弥次兵衛、宮内、掃部の各部隊は旗を押立て先を争って進み、中でも仁右衛門は只一人先を急ぐので弥次兵衛が追付き、何故そんなに急がれるか、余りにもに軽々しい行為は貴殿らしくないと云えば、我々にとって勘兵衛の云う事など聞いておれるかと云い脇目も振らず駈けて行く。　弥次兵衛も捨てても置けず乗り込み、両部隊の侍、従者二百人程がやみくもに進む。　長宗我部は三百余の軍兵を左右に立て自身が指揮を取、敵は非常に競い立っている様だから、十分近く迄引寄せて上から真下に落とし掛けて討取れと下知をした。　その命に随い甲を傾けて鑓ふすまを作って待って居た。

そこへ仁右衛門と弥次兵衛は馬を乗放して鎗を引さげ夫々名乗りを上げて突掛る。　長宗我部は弥次兵衛か名乗るのを聞付け、やあ桑名めが来たぞ、逃さず討取れと下知すると三百余の者が一斉に立ち上がり、えいやと声を上げて突掛けたので、藤堂仁右衛門、桑名弥次兵衛、其外頭分の侍八九人討死した。　残る者達は八尾の方へ崩れたが、長宗我部は勝に乗って追掛け藤堂の軍勢を小池の中へ追込み、　此処で藤堂方兵士六十三騎、雑兵二百余討死したと云う。

註1．　八尾市千塚

木村長門守は友軍長宗我部の部隊が合戦を始めたとは知らず、若江村に入り食事を取り暫く休息していた。　その時佐久間（p476）蔵人が馬で急いで乗帰り、今敵が間近く寄せて来ますと言うので南の方を見ると藤堂新七、同玄番が銀の牛の舌の差物を立て進軍して来る。　長門守は組の者に、皆静かに掛る様に下知して平塚五郎兵衛を添えた。　藤堂方はこれを見て掛ってきたが木村長門守配下の青木七右衛門が一番に乗入れて手柄を立てる。　藤堂新七は白縅子の羽織に金の御幣の腰差で名乗り掛けると木村の配下数名が立向かい新七を討取る。　藤堂

玄番も重傷を負い首が取られそうになったが、玄番の家来鷺川某が駈付けて上になった敵を討取り、主人玄番を肩に担いで一町程も引下ったが深手の為に死去した。　藤堂の軍勢が敗走するのを城兵が追ったが平塚五郎兵衛が采配を振って追い留め軍勢を引揚げた。

藤堂家の家老達が前述の様な状況で討死した事は理由がある。　主人高虎は渡辺勘兵衛に一万石の知行を与えて召抱え寵愛していた。　昨冬陣の時誉田で城方の紀州侍新宮左馬助が城中へ引退く時藤堂家古参の侍は何れも追掛けて打留めようと云ったが、勘兵衛の強い反対で新宮を討留めなかった事を残念がった。　高虎が是を聞いて、高知行を出して比丘尼を抱えたと呟いたとの事が伝わった。　勘兵衛はこれを気にして冬陣が終わった後で暇を願って出仕していなかった。　又この夏陣が起り止むを得ず出仕したところが、高虎が相変わらず寵愛して軍事迄相談するので、古参の家老達は空しくなり討死の (p477) 覚悟を極めたという。
万一これが事実なら其家の重臣達としては聊か短慮と言うべきものである。即ち己を潔くしようとして大事を乱すと古人の詞にも見える通りである。
註１　古人の詞　論語　微子十八より　其の身を潔(きよ)くせんと欲して大倫(たいりん)を乱る

井伊掃部頭も道明寺口へと目指していたが時間に遅れ、其上間近い所に木村長門守の旗先が見えたので部隊を西に向けて若江村へ進軍した。　庵原助右衛門、長坂十左衛門、三浦与惣右衛門等に下知して部隊を配置して攻掛る。　木村の先手の足軽達が堤の上から鉄炮を打掛けたが、程なく引下ったので掃部頭配下が横堤を占拠した。　掃部頭の家老川手主水は前から討死しようと覚悟していたので同役達と同じ様に下知する様子で馬を乗出し敵勢の中へ駈入る。　これを見て組下の満座七左衛門を始め、山口伊兵衛、向坂弥五郎、遠山甚次郎の四人が主水に続いて突掛った。

しかし城方にも河崎和泉、牟礼彦三郎、佐久間蔵人、平塚熊之助、根来知徳院等と言う勇猛な者もおり、木村方の侍が鎗の穂先を並べているので川手を始五人共に討死した。　それを見て庵原助右衛門が采配を打振り、大音声で総攻撃の下知をして自身も鎗を取って真先に進む。更に八田金十郎が走出し味方五人の討れた死骸の上を踏越えて一番と名乗って鎗を討ち込む。木村配下の者達も善戦したが八千人以上の井伊の佐和山軍勢が一斉に押掛けたので終には敗軍となる。

城方の青木四郎左衛門、早川茂太夫は木村長門守に撤退を勧めたが同意しない。　そこへ庵原助右衛門が十文字の鎗に木村の縄を掛けて (p478) 引いたので木村は田の中へ倒れたところを助右衛門家来の侍が三四人寄集り木村を切殺して首を揚げようとした。　その時安藤長三郎が走寄り庵原に、私は未だ手ぶらです此首を下されと云えば、安い事だ持って行かれよと言うので長三郎は木村の首を取り母衣絹を施して包む。　庵原の小姓が傍に居たが、此首は人手に渡す首では無いのにと云って幌の出しの白態と金の出し串共にこの小姓取って置いた。

木村長門守の左翼部隊である木村主計の向い側に榊原遠江守の部隊があった。　遠江守は若年だが弓矢指南のため上杉浪人藤田能登と言う武功の者が付いて居り、又榊原家中には父康政以来の勇者が多数いた。　井伊掃部頭の部隊が攻め掛けたのを見て、同じ様に主計の部隊に突掛るべきと云ったが、藤田は、掃部頭部隊は今追崩されているので今少し様子を見てからで良い云うので、　家老の伊藤忠兵衛も合意して部隊前線に出て自分の鎗を横にして、下知が無い限り一人も飛び出してはいけないと押し留めた。

その内に掃部頭の先手が敵を突崩し、木村長門の主力が敗軍になり木村主計の部隊も夫を見て皆敗走した。　その為に榊原家中の者達は相手が居なくなり遠江守も無念がった。榊原家中の一同は、三河以来井伊（先代直政）、榊原（先代康政）と並んで家康公に奉公して来たのに、今日初めてこの様になったのは偏に家老の忠兵衛の器量が無いためと悪口を云った忠兵衛もこれを聞いて、止むを得ない覚悟を極めて翌七日の一戦では無理を押して討死した。

若江における合戦では井伊家の佐和山勢が木村軍に勝利し、井伊直孝は家中の後方部隊で見物（p479）していた。　又藤堂家の渡辺勘兵衛は益々力を付け、其上藤堂家の先手で討死の家老達配下の侍五騎六騎宛が渡辺の配下に加わったので人数も増え、長宗我部部隊へ押掛け多数の首を取った。　更に戦場に留まっていたが主人高虎から使者が来て、必ず引揚げる様にとあり勘兵衛も引取った。

越後少将忠輝公は大和口総軍の主将として向かったが、其日道明寺口は勿論、八尾・若江の一戦にも間に合わず全てが終わった後着陣した。　朝から昼迄の戦いの様子を聞いて家中一同皆残念がった。　そこで溝口伯耆守と村上周防守の両人が忠輝公の前で、私共両人は貴殿の進軍中、その後か先を一日交替で進む様にと江戸からの指令を守った結果、今日の一戦に間に逢わず残念です。恐らく貴方様もそう思われている事でしょう。　ところで此辺から見渡すと大坂勢と思われる旗先が見えます。　周防守と私は旗を巻いて長道具を伏せて急に馳付けて敵を喰留ますので早急に旗本部隊で押寄せて一戦なさるのが良いと思いますと言う。

忠輝公も大いに納得し、これを玉虫対馬や其外の家老達へも早速相談する様にと云い、花井主水を始め家老の玉虫対馬や林平之丞等を呼び集め相談した。　ところが玉虫は全く賛成せず

林もなんとなく賛成とい云う感じで外の家老も似た様な状況で意を決しない。　溝口と村上両人は興ざめして帰る途中、忠輝公の小姓が聞いている前で、外の大名達は仕方がないが、堀丹後が合戦に間に合ったのは非常に無念だと云った。（p480）

著者註　此件は旧記等には見えないが、翌七日大坂落城の時、茶臼山へ忠輝公が参上した時大御所は見ぬ振りをしていた。　本多上野介が、上総殿（忠輝）参上ですと二三度報告した後初めて振り向き、其方は親の死に目に逢う術を知らないなと苦々しく上意が有ったと云う。この事を家中の者達が伝え聞いて皆気の毒に思い、昨日伯耆守（溝口）が云う一戦をすれば、こんな上意は無かったろうにと悔んだ。　その時迄は毛利と真田の両部隊も城からかなり遠くに在陣しており、中でも長宗我部父子は其日は城中へ帰らず、合戦場より直に立退き、更に一戦を行える体制で日が暮れるのを城外で待っていた位であり、一戦の機会は残っていた。　その頃上総介方に居た大道寺久右衛門入道道白が語った事である玉虫も相談の時の判断が宜しくなかったと云う事で将軍から改易され、その頃世間では逃虫対馬と云った。

この八尾の一戦の時、増田右衛門尉長盛の嫡子増田兵太夫は長宗我部部隊に属し大坂城中から出陣したが、渡辺勘兵衛の部隊と戦い潔くよくく討死をした。　右兵太夫は昨冬の陣の時は将軍の旗本へ参加して、在陣中に城方に良い情報に悦び、悪い噂を聞くと悔んだ。　和談後この事が大御所の耳に入ったが、兵太夫らしい事だと上意で何も咎めはなかった。今度は木村長門守を頼って秀頼の家人となり討死した（p481）。

十五―三　最後の決戦前夜と翌朝

此度の幕府側先手の井伊掃部頭部隊でも川手主水を始め討死、負傷者は出たが、先手役継続が勤まらぬ程では無かった。　しかし同じ先手役の藤堂高虎の部隊では戦死の人数も多く、其上先手の隊長達が大方討死した。　この事が両将軍に報告されたので　双方共に翌七日の先手役は外されるのではとの見通しとなった。　そこで越前少将忠直（松平忠直）は家老の両本多を将軍の陣営へ派遣し、本多佐渡守に逢い様子を聞きながら明日七日には総先手を越前へ命じて戴きたいと言上して貰おうと佐渡守を呼出して相談していた。

そこへ急に大御所が見えたので佐渡守が迎えに出、大御所は入る時両本多が手を突いて居ると佐渡守に、あそこに居るのは誰だと尋ねた。　越前の両本多で御座いますと云えば大御所は両人に向い、今日越前の家中の者達は昼寝をしていたのかと云い佐渡守に、彼等は何用で来たのかと尋ねられたので佐渡守は、明日の部隊配置についてですと答えた。　大御所は両人に向かい、明日の先手は加賀に命じたと云っただけで、後は将軍と雑談しながら通り過ぎたので両人は成す術なく帰ってその旨報告した。

三河守忠直は報告を聞いて、此戦いも明日中には決着するので、その後は越前の国を返上して高野山に住居する外は無いと云う。　本多伊豆守が、それはどんなお考えからですかと聞けば忠直は、其方達が尋る迄も無い、三河守は加賀の前田利常に劣ると両御所が見限った以上男が立つかと言う。　伊豆守は聞いて、それ程のお考えであれば、明日の合戦で（p482）なさりたい様にして命令違反の廉でお上から越前国を召上げられてはどうでしょうかと言う。　三河守はそれを聞き大いに喜び、出来ればそう有りたいとの事である。　それでは吉田修理をお呼になって明日の一戦の事を頼まれるのが良いでしょうと云う事になった。

三河守は吉田修理を呼出して状況を説明すると修理は、その様にお考えなら夜も短いので今から支度をして下さいと云うと両本多に、私は帰って支度出来次第出発しますので御両所（両本多）も私の部隊に続き部隊を出し、その後に三河守旗本部隊が進むようにして下さいと云い帰った。程なく修理の部隊及び手勢で進軍すると加賀の先手の者達は、今日の先手は加賀へ命ぜられたので誰も先へは通さないと云う。　修理は馬を乗寄せて、私は吉田修理と云う筑前殿（前田利常）も御存知の者です。　此度命令は岡山筋の先手は加賀へ、天王寺口の先手は越前へ命じられた事を筑前殿から皆さんへ連絡は無かったのですか、公儀からの軍事命令は大切な物なのに扱いが疎略です、我々は場所が違いますと言捨てて押し通った。

越前勢は其後に続いて続々と部隊を進め、茶臼山の近所迄進軍した。　未だ夜の内だったが修理が下知して越前の部隊配備も略出来た。　そして各部隊の頭や奉行達に向かい、昨晩大御所は此方の家老衆へ、今日の合戦の時、越前家の者達は昼寝をしていたのかと上意が有ったと言う、　今日は目の覚める様な働きが無くてはならない、皆その積り居る様にと自身で触れ廻った。　後で考えれば修理はこの時から討死と覚悟を極めていた様子だったと云う。（p483）

註１　松平忠直、通称三河守又は越前少将　　結城秀康（家康二男）の嫡子

註２　越前の両本多　家老の本多成重（飛騨守 1572-1647）と本多富正（伊豆守 1572-1649）

六日の晩本多上野介は大御所の前へ出て、明日晩の台所支度の場所は何処となりましょうかと伺ったところ、茶臼山でと上意があった。　未だ味方が占拠した場所でも無いがと疑問ながらその旨通達したが、果して翌七日の夜は茶臼山が本陣となった、　たいへん御明察な事だと本多上野介が後に語ったと云う。

註　茶臼山は冬の陣では本陣だったが、夏の陣では合戦前に真田幸村が本陣としていた

本多出雲守は昨冬の陣の時、攻城持場で失策があり大御所の機嫌を損じ、親中務ならこんな事はないだろうにと云われた。　これを深く心に留め、冬陣が終わった後は地行所の大多喜に帰っても不機嫌だった。　ところが二月頃から大坂で又戦争かと風聞があり、次第に現実らしくなった。　昨冬の様に両御所が出陣となれば是非討死を遂げようと決めていたが、再度御供する様にと通知が来たので本望が遂げられると思っていた。

大坂へ着陣し六日の暮方に舎兄の美濃守が勤める道明寺の陣所へ訪問した。　美濃守へ面会しなかったが甥の平八郎、甲斐守、能登守三人を芝堤の上へ呼出し、今日城方の毛利や真田をどうして美濃守の部隊で討留めなかったのか本多家の名折れと思う、今後も武勇の祖父中務殿の武道を学ぶ事が重要であると云って美濃守の陣場より酒筒を取寄せ、何となく三人の甥と盃を取交し八尾の陣所へ帰った。　そこへ本陣から召集があり急いで参上すると、岡山筋の先手は加賀筑前守へ命じた、其方は天王寺口へ行きその辺に退陣する面々へ指図する様云われた。畏まりましたと云い陣所へ帰ると家老小野勘解由を（p484）を始め幹部達は皆上意を聞き喜んだ。

その時勘解由は、明日の一戦に付いて、私の考えは三ツあります。　一つには討死、　二つには一番鎗、三つには高野の住居する事ですと言えば出雲守は黙って頷いていた。　その夜も更けてきたので同じ持場の秋田城之助、真田河内、松下石見、六郷兵庫、浅野采女、植村主膳正等方へ間もなく出陣する様に伝えて出雲守も支度を調え八尾を出発した。　その夜の内に四里程の道程を進軍し、夜明けには越前家の者達の部隊と並んで配備に就いた。

註１　本多出雲守（忠朝 1582-1615）　井伊、榊原と共に徳川三傑と云われた本多中務忠勝二男

其日城中の人々の考えでは、寄手の軍勢は城の夫々の出入り口前に持場を決めて部隊を配備し合戦は八日にある筈と打ち合わせ、七日の朝迄は具足等を着けていた者は十人中一人有るか無いかと云う状態だった。　ところが関東勢は全軍が夜中より総出陣し、夜明け前には野も山も軍勢だけの様に見へ渡ったので城中は急にうろたえ騒いだ。　今考えると油断千万な事だったと高桑七左衛門が私（作者）に語った。

城方の真田左衛門佐は茶臼山の上より続く庚申堂の前迄、段々と部隊を配置する。大谷大学、渡辺内蔵助、伊木七郎右衛門、真田采女、福島武蔵、同伊与、吉田玄蕃、石川肥後、津田左京、結城権之助等は真田の部隊に属すると言う。　天王寺の鳥居の南には江原石見、塡島玄蕃、藤堂土佐、本江右近、早川主馬、福島平三郎、細川讃岐守、長岡与五郎等が部隊を置く。勝曼院の前には郡主馬、野々村伊予守、其外寄合組の部隊がある。
天王寺南門筋は毛利豊前守が配備し、浅井周防、竹田永翁等が従う。毘沙門院の南の方には大野修理の部隊が、昨日討死した後藤、（p485）薄田、木村、山本等の配下の敗兵等が是に随ったと言う。秀頼卿の金の瓢箪の馬印を津川左近に持せて岡山辺に立てた。　大野主馬の部隊は大部隊であり、岡山口の一の先手と決まっており配下には新宮左馬、岡田縫殿、布施伝右衛門、岡部大学、中瀬掃部、二ノ宮与三右衛門、御宿越前、根来三十騎等が一所に配備し、将軍の先手と一戦を遂げようという積りである。

大御所は使番衆を派遣して合戦を急がない様にと触れ廻った。　各陣何れも畏まりましたと云うもあり、異見を云う者もあった。　水野日向守勝成等は使番衆へ向って、今日はもう十時になるが早く合戦を始めさせるのが良い、手間は取らないでしょうと進言したと言う。

其後又久世三四郎、坂部三十郎、小栗又市、佐久間河内等が全軍に乗廻り、合戦を早まらない様に触れて廻った。　その時将軍から安藤対馬守、佐久間将監、安藤治右衛門を派遣して、合戦を始める様に命ずるので、ご了承願いますとの事なので、夫より大御所も急いだが、何しろ旗本が大軍なので進軍がままならない。

そこへ又将軍の使番が来て、城中より大軍が出ましたので早く旗を御進め下さいと云う。　大御所は非常に不機嫌となり、城中の者が残らず出ても七万を超える事は無い筈である、　それを大軍と言う様な不調法で将軍の使番か勤るのかと烈しく叱った。　その時安藤対馬守が来て、もう合戦を始めて良いと思います、将軍もそのお考えです（p486）と申上げる大御所は駕籠から出て馬に乗り、尾張殿と駿河殿にも早く進む様に指示した。

真田左衛門佐幸村は茶臼山の上の先端から寄手の軍勢を見ていたが、息子の大助を呼び寄せ、其方は昨日の一戦で負傷しており、今日は果々しい働きは出来ないだろう、　其上私が思う事もあるので今すぐ城中に帰り、秀頼公の側に居り行動を共にしなさいと云う。　大助は、この合戦の直前になり、城中へ帰る事は不本意です、　どんな場合でも父上と一所と決めておりますと断り再三の説得にも応じなかった。　幸村は大助を近くに引寄せ、何か暫く言含めると大助は親の側を離れ、馬に乗る様子だが幸村の方を見て佇んでいる。　幸村は近習の者に早く行かせよと催促すると大助も馬を進めたが幾度となく親を見返り、それから坂を乗り下り城中へ入ったと言う。

稲垣与右衛門と云う者が其時真田の配下におり、直接これを見たと語るので書留めた。与右衛門の話では、　大助が城中へ帰らぬと断った時、近くに」引き寄せて云い含めた内容は聞いてはいないが、　幸村自身が寝返るのではないかという危惧が秀頼にあったので、決してその様な事は

なく戦死と決めている事を秀頼卿に知らせる証人として大助を城中に帰したと思うとの事である。

加藤左馬助嘉明、黒田筑前守長政、細川越中守忠興等は昨冬の陣の時は江戸又は国元に滞在を指示されたが、今度は小勢でお供するように指示があった。　加藤と黒田は一所に本多大隅守の部隊と同じ持場で今日も出陣したところ、　将軍が来られると（p487）騒いでいるので両人も御目見に出た。　将軍は甲を着けず黒い具足の上に山鳥の羽織を着、桜野と云う馬に乗り歩行の小十人衆二三十人のお供が居るだけである。　各部隊を視察する為の巡回だが、黒田長政は一の谷の甲、加藤嘉明は富士山の甲を家来に持たせ目通りに出た。　将軍が両人の方へ馬を乗寄せると、両人は馬の口に付いて、昨日は城兵が遠く迄出たのに打漏して引揚げさせたのは残念に思いましたが今日又多人数を出して来るようです、　御武運に恵まれていますと云えば将軍は機嫌よく、もう間もなくであると上意があった。　両人も少しお供したが、　もう是迄でと云われるので控えた。　そこへ本多佐渡守（この時 77 歳）が山駕籠に乗り渋帷子に甲だけを着し、大きな渋団扇で蠅を打払いながらお供していた。

其時長政は嘉明に向かって、将軍はいつもと替わらず軽装ですねと云えば嘉明は、そうです、一般にこんな時に軽装なのは親父様以来の癖ですと答えた。　長政は随分良い癖ですと応じ、近辺を見回して、私達の部隊は此辺で一所に守っていれば良いのだろうが前に沼があるのもどうかなと云えば嘉明は、良いと思います、貴殿や私は今日は戦わないのも奉公です、　私達の好きな様にと云われている。

註１　黒田長政、加藤嘉明は厚恩の主（秀吉）の子（秀頼）との戦いで表立つ事は遠慮もあり、又幕府側もそれを配慮したものと思われる。

註２　本多大隅守（忠純 1586-1632）　本多佐渡守正信三男

十五―四　天王寺・岡山の決戦

敵味方各部隊が揃い互いに睨み合っていたが、本多出雲守の部隊がから鉄炮を打初めると同時に越前の部隊から七八百挺の鉄炮を一頻り敵方へ打ち掛けた。　その後一の手とか二の手の区別もなく（p488）二万に及ぶ軍勢が一斉に押掛ければ、　城方真田の部隊も掛ってくる。越前松平忠直の舎弟伊予守忠昌は自身で十文字の鎗を取て城兵一人を突伏せ、家人に命じて其首を取らせたところ、城方の倉流左太夫と云う剣術名人として有名な者が忠昌を目掛て突掛ける。　忠昌は倉流も鎗で突き其首を取り旗本迄持たせ更に忠直の部隊で城兵と戦った。

この時、吉田修理は自分の家来や部隊を率い、やれ死ね、やれ死ねと号令を発し真先に進む。それを見て越前家の各部隊の兵達も、我劣らずと突掛るので流石の真田も手に負いかね終に戦い負けて敗走した。　その時幸村は越前家の侍西尾仁左衛門に討たれた。吉田修理は天満の方へ逃げる敵を追討すると云って、天満川の深みに馬を乗入、其身は馬共に水底に沈んで落命した。　一方忠昌は本多伊豆守の部隊で真先に進み、城大手の門へ押入り旗を城中へ一番に入れた。

忠昌は其頃十九歳で将軍の側で奉公していたので本多佐渡守と同じ部隊に配属された。　六日の晩に舎兄忠直が先手の志がある旨を聞くと本陣で佐渡守に、私は今晩より兄の三河守の陣へ行き、明七日の一戦では彼の部隊で相応の奉公がしたいと願った。　佐渡守がその事を将軍に申上げると暫くの間返答がなかったが、少し間をおいて、それ程言うなら、好きな様にして良い

と許可があった。　その事を伝えると忠昌は、それでは今御目見えしたいと云うので佐渡守は、夫は必要ない（p489）のではと云うと忠昌は、いやそうではありません、これがお暇乞いになるかも知れませんからと言う。　佐渡守は大いに感心して将軍に取り次ぐと忠昌は御目見えした後忠直の陣に駆けつけた。

丁度その時越前家では明七日の先陣の打合せの最中であり、忠昌は其様子を聞くと吉田修理の部隊に続いて出陣し、越前家の左翼より四五十間計前に出て布陣した。舎兄忠直も大御所の両本多への詞からも是非討死と覚悟を心に決めて居たと言う。　合戦が始る少し前に湯漬を食べると云い、真子平馬と云う近習の侍に膳を持たせ立ちながら食した。　そして食べるものも食べたし、もう餓鬼道へは落ちないぞ、死出の山を楽々と越えて真直に閻魔の庁へ着くぞと云いながら馬に乗った。　其顔色は普段とは違って見えたと言う。

此時岡山天王寺辺では本多出雲守と城方毛利豊前守との一戦が始まり、互に鉄炮を打合の後豊前守の部隊が鬨の声を揚げて一斉に突掛ってきた。　出雲守の侍達も粉骨を尽して戦ったが毛利の部隊は出雲守と同じ持場の秋田城介、植村主膳、松下六郷、浅野采女等の部隊とも戦い越前軍の部隊右脇の方へ雪崩れ込んだ。　この時小笠原兵部大輔父子、保品弾正、内藤帯刀、松平安房、同甲斐、水谷伊勢、松平丹波、酒井左衛門、榊原遠江、稲垣摂津の夫々が鬨の声を揚げて一斉に突いて掛る。　城方浅井周防、大野修理の部隊、竹田永翁其外寄合組の者達も掛りに掛って（p490）混戦となり双方が戦った。

此時小笠原兵部、同信濃守父子共に鎗で戦い、兵部は重傷で其場を引下ったが終に落命し、信濃守も討死した。　兵部の末子大学は十八歳だったが、父兄が討死と聞き其場へ駆けつけて

命を惜しまず戦い、数ヶ所の疵を負い討死かと見えたが家来が駆けつけ大学を連れ退いた。
彼は後に右近太夫と名乗って長生きしたと言う。　この時本多出雲守も深手を二三ヶ所に蒙ったが
左手で馬の手綱を引き、右手に刀を振上げて逃げる敵を追いかけていたが、溝の中へ倒れこみ
負傷しているので起き上がれない。　そこへ敵が立帰り首を取って帰ったが、　出雲守の首は紅の
腕ぬきで括り鼻を削いで田の中へ捨ててあった。　其日の晩方、出雲守家中の陪臣が取上げ
持帰った。

この時保科弾正等も自ら戦い負傷した。　水谷伊勢守は十七歳で出陣したが家中の者達が城兵
に突立てられて敗走する。　その時家老の水谷太郎左衛門が伊勢守の側へ馬を乗寄せ、今敗走
する者達を良く見て置き何れ解雇するべきです、私はせめてもの討死をしますと云って敵中に
突込んで討死した。

岡山筋では天王寺と茶臼山両所の合戦が始った後、加賀の先手本多、山崎、村井伊八郎、安見
右近、篠原織部等を始め其外一斉に鬨の声を揚げて突き掛った。　将軍旗本組では水野隼人、
青山伯耆守、松平越中守、高木主水の部隊が何れも力戦した。　この時岡山筋で地中の爆発が
起り、皆是に驚き動揺した。　これを見て将軍自身が鎗を取って進むところ、安藤対馬守が一番
に馳付て馬より飛下り、勿躰ない事と馬の口に取付いて押し留めた。　そこへ本多大隅守、加藤
嘉明、黒田長政が馳せ付けて将軍の馬の廻りを堅めた。　この時三枝平右衛門の旗捌きが見事
で旗本軍勢が立直ったと言う。

城方大野主馬、同修理の配下や其外の城兵等も暫く防戦していたが、加賀勢の大軍が正面に
居り、其上右翼に本多豊後守、遠藤但馬守、本多越後、片桐兄弟、宮城、蒔田、石川等が横から

突掛けたので、　主馬は終に戦い負けて城の方へ引下がる。　寄手の各部隊は勝ちに乗じて逃る
敵を数十町負い掛けた。　稲荷の前で城兵は踏止って防戦したが、崩れて玉造口より城内へ逃げ
込んだ。

この時藤堂高虎と井伊直孝両部隊は味方の本多出雲守の部隊が敗軍の様子に見えたので横合
に突掛けたところ、大野修理の配下が烈しく鉄炮を打掛けた。　夫にも構わず毛利豊前の部隊へ
押掛けて突き立てるので毛利も敵わずに引き下がる。　そこで井伊、藤堂の部隊は勝ちに乗って
追い掛けると、　天王寺の東北に配備する秀頼旗本の七組の青木駿河、真野豊前の配下の侍達
が鎗の穂先を揃へて突掛けるので、井伊と藤堂の配下は敗れる。

此時安藤帯刀の嫡男彦四郎が討死をした。　父の帯刀はこの一戦の纏め役を将軍から指示され
諸部隊の間を走り回り下知していた。　家人が駆け付け、彦四郎様が討死されました、死骸を如何
致しましょうと尋ねると帯刀は、犬に喰せよと云捨てて馬で乗廻っていた。　家人達も余りなる事と
思っていたが、其晩方陣所へ帰ってから帯刀はたいへん悲しんでいたと言う。
井伊掃部頭の旗奉行である孕石主水と広瀬左馬の両人も討死し、井桁の紋が付いた茜の四半の
纏も金の蠅取の馬（p492）印二本共に打捨てられていたが、八田金十郎と菅沼郷左衛門の両人が
持帰り、天王寺の丸山で家老庵原助右衛門へ渡したと言う。
同じ時藤堂高虎の部隊も崩れたが、九鬼四郎兵衛と言う旗奉行の捌きが良く、幟三本を押し立て
陣容を堅めたので家中の者皆が踏止った言う。

細川越中守忠興は天王寺毘沙門池の辺に配備していたが、城方七組の内堀田図書、真野豊前、
野々村伊予守、伊東丹後等と鉄炮を打合い、其後接近戦で追ったり追返されたり暫く揉みあうが

越中守側か勝利し七組の部隊は城の方へ引退った。

水野日向守は天王寺の西から船場へ進撃した。　一方城方の明石掃部は大野修理からの申送りに随い天王寺の西の岸蔭から寄手の脇へ廻り横から突掛ける作戦だった。　ところが早くも天王寺の城方は戦い負けて撤退しているの予定が違った。　明石は討死と覚悟を究めて率いた足軽達に下知して鉄炮を打掛させ、其侭馬を走らせ突っ込んで来たので前に立ちはだかる水野の部隊は敗走し始める。　水野は馬上で乗り廻り、卑怯者、日向守は此処に居り皆見ているぞ、返せと呼ぶ声で踏留まる者もあるが夫でも逃げ散る者も多い。　そこへ日向守家来の広田図書、尾関佐次右衛門等が踏留まる。　明石の兵は鎗を合わせて日向守を目掛て討ってて掛かるが、日向守自身で突払う。　終に水野側は勝利し、明石掃部を日向守の侍汀三右衛門が討取った。(p493) と言う。

城方の者達は全ての戦いに負けて城内へ逃げ込んだ者もあるが、大方は夫々に落ちて行った。大野主馬、大野道犬斎、仙石宗也等は戦い半ばで立退いたとの事である。　主馬の部隊に属していた御宿越前は何故か只一騎で越前勢の中へ乗付けて、野本右近に討たれた。

十五―五　大坂城炎上と千姫の出城

秀頼は桜門に部隊を置き、真田からの情報次第で出陣すると言うことで床机に腰を掛けていたが、速見甲斐守が天王寺より馳せ帰り、　城外の合戦で味方の諸部隊共に勝利を失ったので、御馬を出されて意味がありません。　此上は本丸へお入りになり様子を見られるのが良いでしょうと云い本丸へ入ったが、　誰一人の防禦を手配する者もなく皆落ち支度をしているので千畳敷へ引取る。七組の頭の一人郡主馬も乗り付けたが、佐々弥助と言う者が裏切り大台所へ火を付けたのが次第

に燃え広がり、郡主馬、真野豊前、中島式部、堀田図書、野々村伊予、渡辺内蔵助等があちこちで自殺した。

秀頼卿はひとまず天守へ上り程なく下りて月見の矢倉から芦田曲輪の矢倉へ入った。　その時御台所（奥方、千姫）も同道していたが、大野修理が世話して女中に向って、もう此様な状況となった以上、奥方様は城外へ出て大御所に御願いして秀頼様父子の生命の保証を取計らうのが良いと言う。　お供の女中も口々に、修理が言う通りになさるのが良いと言う事で城外へ出た。其時大台所が炎上して城兵達もうろたへ騒いで抜身の長道具を携へて走り廻っており、お供の女中達も身を縮め歩行も難しく、高石 (p494) 垣の下へ寄り集り姫君を中に包む様にしていた。

そこへ紀州熊野の侍堀内主水と云う者が通りかかった。　彼は新宮左馬助等と一所に昨冬の陣の頃から城中にいた。　石垣の方を見ると廿人計りの女中の中に白地に葵の丸ちらしが付いたかつぎを着た女性がいるのに主水は気付き走りより、誰かと尋ねると、是は関東の御姫様ですご用で城外へ出られますが御供して下さいと云う。　それではと主水が先に立ち人を払いながら行くと関東方の坂崎出羽守と出会ったので以後坂崎が御供した云う。

其時大野修理の家老米村権右衛門は修理の側を離れずに供していたが、御台が立退いた後で修理は権右衛門を招き寄せ、其方は急いで御台様へ追付いて私の娘から申上げさせるのが良い、先程も申上げたが今日の夜中迄の間にお願いが通る様にして戴きたい。　御両所へ直接お願いすれば良いと云うものでもなく、本多佐渡守へ頼んで申上げて貰う様良く頼んで欲しいと云う。　権右衛門は、今の時に臨んで城外へ出てお供するのは心外ですと云うと修理は不機嫌に、私の命令に逆らい仮令私と共に死んだとしてもそれに満足するのか、秀頼様父子の助命は

重要な事ではないのかと叱り付けた。

それ以後権右衛門走り出し、大手門の堀端で追付いたところ坂崎の部隊が女中方を取囲んでいる。　権右衛門は坂崎の側へ寄り其趣旨と伝えると、貴殿の事は兼ねて聞いています、調度良いので女中方に交ってお供されよと坂崎が指示したと言う。　そんな訳で坂崎は本多佐渡守の陣所を聞き合わすと茶臼山と天王寺の間に佐渡守が家来達と一所に集っている事が判った。そこで近所に百姓の家があったのを幸にそこを姫の御座所として四方を坂崎の兵が警固した。

茶臼山に佐渡守を迎えに行くと早速山駕籠に乗って来て、お願いの趣旨を聞くと直ぐに茶臼山に参上して申上げた。　大御所は、姫が願うのも当然だ、秀頼父子を助け置いたからとて特に如何と云う事もない、将軍へ其旨を申上げよとの上意があった。　佐渡守は早速岡山の陣営へ参上し、姫の願いと大御所の見解を申上げたところ将軍はたいへん機嫌悪く、余計な事をしてくれた、秀頼と一所に死ぬべきなのにと言うだけだった。　佐渡守は、兎に角大御所のお考え通りにされるのが良いと思いますと云い直に陣所へ帰り、両御所様が御聞届けの上は安心して食事をされるようにと、お付の女中達にその準備をする様にと云うと女中方も皆喜んだ。

権右衛門については、此処には誰も男が居ないので其夜は詰める様にとの事で百姓家の片脇にある牛小屋に泊った。　お膳と酒迄下され少しの間休息と伏せたところ、　数日の辛労の為か只一眠りしたら目が覚めたのは翌日の昼前だった。　修理の娘に付けている自分の娘に様子を尋ねると、行き違いがあり御城内では上々様方は残らず亡くなった事を聞き、御台様もたいへんお歎きという、修理娘も出て来て泣き泣き報告するので権右衛門大いに驚き聞き合わすと、城門は昨晩方より将軍旗本の諸部隊（p496）に勤番が命じられ、出入りが出来ず其の侭姫様の側に

居たとの事である。

著者註　千姫余談

天樹院(千姫）が大坂城中から出た経緯は前記の通りに間違いないが、今時世間流布の旧記等では未練の為淀殿や秀頼と一緒に滅亡を嫌って城中から出た様に書いている。　勿論女性でもあればその様な事が一般的ではあるが、彼女には未練がましい事は無かったのに後世迄その様に語られるのは本意ではないと思うので、私の聞いた事を此処に書記す。

前述米村は主人大野修理の娘が天樹院に奉公していた関係で、自身が浪人になった時も時々御座敷を訪れたが、大坂以来の知り合いであり天樹院も親切にして呉れて、お金や衣服等を拝領する事もあった。　しかし修理の娘が病気となり色々養生もして貰ったが良くはならない。そこで生きている内に親の眠る寺詣でをしてから死にたいと云う願いで天樹院から暇を戴いた。その時権右衛門が呼ばれ、其方が連れて行き十分養生するようにとあり、関所手形や道中費用等潤沢に下さった。そこで自分の娘も一緒に連れて上方に向かい、色々保養をしたが病気快気せず終に修理娘は死去した。

京都の妙心寺で火葬にしている間権右衛門は用事のため方丈へ行ったが、その後自分の娘が火葬の火の中へ飛込み主人の棺に抱き付いて焼死んでしまった。　灰よせをする時主従の骨の見分けが付かないので、一所にして高野山へ持って行き骨堂へ納めた。　権右衛門は直ちに頭を剃って権入と名を付けて京都妙心寺の嶺南和尚に随身して江戸へ帰り、芝東禅寺の寺寮に住込み寺内の掃除等をしていた。

或日東海寺の沢庵和尚と嶺南和尚が同道して浅野因幡守殿の振舞に招かれた時、沢庵和尚が因幡守に、御亭主はたいへんな人好きですが、嶺南和尚が持たれている様な人は御持では無いでしょうと云うので因幡守は、夫は何と云う者ですかと尋ねる。　沢庵和尚は、大野修理の家老で米村権右衛門と云う者です。　彼は修理が御預けになった配所への供も勤め、関ヶ原合戦の時、浮田中納言の家来で高知七郎左衛門と云う者と組打しました。　其後大坂冬の陣における和談の時、　城中の織田有楽と大野修理方より良く分る侍一人宛差出す様にとの事で有楽方からは村田喜蔵、大野方からは米村権右衛門の両人が使節で度々城中から出ました。和談に先立ち、　茶臼山陣所で両人共に御目見した時、権右衛門は御前を遠慮せず堂々と意見を述べて、退出した後で大御所が米村をたいへん誉められたとの事です。　その権右衛門が今程は出家して嶺南和尚方に居るのですと沢庵和尚が語る。

その時因幡守が、其権右衛門は世間に隠れなき者です、拙者が召抱えたいのですが修理の所での知行は御存知ですかと問う。　両和尚は、前の知行は二百石と聞いていますと云えば因幡守は、それでは四百石出しましょうと云う。　沢庵和尚が、いっその事五百石おやりなさいと云うと、　五百石の知行高は少し差し障りがありますので代りに足軽を預け、又出家なら刀など無いでしょうから、当年も残り少ないので当年分を残らず支度料として出しましょうと云う事になり権右衛門の身分が決まった。(p498) 因幡守家来となり八十有余の年齢まで無病息災で物頭役を勤めた。

因幡守家中に槇尾又兵衛と云う者が居り三次藩の町奉行をしていた。　彼は以前薄田隼人正の近習を勤めて居り、これと言う武功は無かったが利口な者であり因幡守も目を掛けていた。或時この又兵衛が町方の用事で因幡守の御前に出た時、大坂の夏の陣で落城の日に天樹院

が城中から出た事について尋ねられた。　又兵衛は、世間で言われている様に淀殿や秀頼と共になさるべきなのに、御女中とは云いながら不甲斐ない事ですと、その頃言われたいた事を語った。

暫くして権右衛門が是を聞いてたいへん腹を立て、　家財や諸道具迄も全て取片付けた上で申出た事は、　槇尾又兵衛が前に御前で天樹院の事を語ったと聞きましたが、それを其の侭にはして置けません。　天樹院が城中を出たのは秀頼御父子の助命を御願いする様にと大野修理が強く申上げたからです。　又兵衛が云う趣旨では天樹院に悪名を立てる事になり、それは修理にして見れば迷惑な事です。　この様な片田舎で又兵衛を相手に裁許されても世間の話題にはなりませんので私はお暇を戴き江戸に行き、公儀へお願いして天樹院の御恥辱を晴らさずには旧主大野修理に対して私の立場がありませんと言う。

浅野因幡守家老の山田監物や八島若狭も大へん苦労して何とか内輪で済ませる様に色々説得したが米村は納得しない。　因幡守にその事を報告すると、因幡守から又兵衛へ内意があり、其方の旧主薄田は (p499) 五月六日の道明寺の戦いで後藤又兵衛と一所に討死した事に為、　薄田の配下の者達は城中へ引退いたが六日の晩方に城中を立退いたと云う。　一方天樹院が城中より出たのは七日であるから直接に知る術は無い筈である。　恐らく世間一般に流布された通りを聞く侭に述べたものであろう。　それゆえ其方の不手際だろうから権右衛門へその旨謝り納得させるのが良い。　又この件は内々で解決する様にしたい、それが私の為でもあるとの因幡守の言葉に又兵衛は納得し、権右衛門に、たいへん失礼な事をしてしまったと謝り権右衛門も堪忍したと云う。

以上の事から考えても天樹院が未練故に城中を出られたと言う説は事実と相違するものである。

これは堀内主水が旗本へ採用となり、私（作者）が若い頃迄無事で私の親類水野如心斎と云う者の方で折々出会い物語るのを聞いた。　主水子孫は今も旗本に居られる。

註１　千姫（1597‐1666）徳川秀忠娘、家康孫、七歳で豊臣秀頼と結婚、十八歳で死別、其後本多忠刻（桑名藩主、本多忠勝孫）と結婚、1628年忠刻と死別、以後天樹院と号して江戸城に戻り北の丸の屋敷に住む。　家光の姉でもあり幕府から丁重に保護される

註２　浅野因幡守（長治1614‐1675）安芸浅野家の支藩備後三次藩主（五万石）　作者が子供の頃養父が仕えた。

十五―六　豊臣家の滅亡

慶長廿年五月七日大御所が茶臼山へ陣を移す時、中井大和が前から準備していた切組小屋を人夫に運ばせて組立の時本多上野介が大和を呼び、その様な広い陣は上のお考えにそぐわぬと思い確認すると、九尺の竪に二間で六畳敷よりも広くは不必要との事でその通りに組み立て、上三畳下三畳の間を布の内幕を張り、外帯を引廻しただけの事で直ぐに完成した。　早速大御所は中に入り、諸大名で御目見に出た人々は表の三畳敷の所へ出て面会した。(p500)

著者註　今時世間に流布する記録の中には、夏の陣の時黒本尊の阿弥陀を携え、茶臼山陣営の内の持仏堂に置いたとか、　其外奇特の事を記した物もあるが、どれも信用できない事である。　この六畳敷の陣営は慥に見た云う者が私の若い頃迄は幾人も居た。

大御所が茶臼山へ上った時、城方の者と思われる四五百人が一所にかたまって居るの見て尾張と駿河の両殿へ攻撃させよとの上意で、尾張殿と駿河殿の部隊へ山上弥四郎、内藤長助の両人を使いに出し、急いで来る様にと伝えさせたが其内に城兵達は退散してしまった。　両殿が茶臼山

へ来るのが遅かった為に間に合わなかったと上意があった。

その時駿河殿の返答は、私共へも先手を命じて下されば間に合ったのにと残念な様子で落涙した。　その時御前に居た松平右衛門大夫が駿河殿に向かって、御前様はお若いから今後幾度も機会がありますと慰めれば駿河殿は、やあ右衛門大夫、私の十四歳の時が再びあるものか、間抜けた事を言うと叱った。　大御所は駿河殿へ向かって、其方のその言分は血に滴る鎗に立ち向かうのと同じだぞと云う上意で喜びが見える様だった。

大阪城大台所の火事が焼け広がり千畳敷其外の家屋へも延焼して大火となった。　諸大名方も茶臼山へ参上し（p501）勝利の賀を述べた時、小出淡路守が御目通の芝の上に居るを見られ、淡路と呼ばれたが、召されると思って居なかったので返事をしなかった。　そこで再び、小出淡路と大声の上意があったので淡路守は御前へ出た。　大御所は大坂城の方を指差して、あれを見よと云われ、　淡路守も大坂の方を一目見返り両手を付き、たいへんお気の毒な事ですと申上げた。大御所は、其方の立場でその様に思う事は当然だと上意があった。　それ以後親しくされ、鷹狩の鳥などを拝領したと言う。

同じ時大御所から、夏目を呼んで来るようにと上意があり、それを側衆が使番に伝えた。　併し夏目次郎左衛門は少身であり旗や馬印等も無いので何処にいるか見当が付かない。　そこで諸番の番頭が寄集っている所で夏目は誰の配下で何処にいるのか尋ねた。　或番頭が自分の組におり、私の旗馬印は斯々云々と言うのでそこに駆けつけ夏目を同道して戻った。　早速御前に召出され、以前三方原の一戦の時、其方の親次郎左衛門が奇特の討死をしたと上意があった。事情を伝え聞いていない若い人々は諺に言う藪から棒の様な上意と思ったが、　事情を知る人々

はその通りだと深く感心する者もあった。

註　家康が浜松城主の頃、武田信玄と三方が原で戦い徹底的に敗れて討死となるところを家臣の夏目次郎左衛門が身代わりとなり家康は生き延びて今日がある。

翌八日の早朝井伊掃部頭へ命じ、城中の芦田曲輪に居る女中の中で二位の局に用があると言う事で片桐市正を通じて（p502）茶臼山へ呼んだ。　本多上野介が御前へ案内すると、秀頼の装束はどんなであるかとか、芦田曲輪に籠る男女の人数等細かく聞かれた。　尚二位の局は城中へ返す必要はないと云う事になった。

其朝芦田曲輪に籠る秀頼付きの人々は、秀頼卿の命は赦されるのではないかと待っていたが何の知らせも無い内に、井伊掃部頭と安藤対馬守両部隊の足軽が芦田曲輪へ向って頻りに鉄炮を打掛けた。　これは最早御台所のお願いも叶わなかったと皆覚悟を決め、秀頼、淀殿を始め男女三十余人自害したと言う。　其姓名は旧記に載っているので此処では略す。

著者註　井伊掃部頭を通じて大御所から秀頼は助命する様にとの口上の趣旨を記した旧記もある。　又出城する様にと伝えると城方の速見甲斐守が、では乗物一挺と担ぐ者を給わりたいと云うと近藤石見は、こんな時にそれはできません、乗馬で出られる様にと応じた。　甲斐守は腹を立て、いかに此様になったからと云っても秀頼、淀殿母子が乗馬で出る訳には行かぬと云い門を閉じ、淀殿、秀頼へも甲斐守が自害を勧めたと言う説もある。　混乱した中の事であるから何が真実か判らない。　つまり行違いと思う次第である。

大御所より越前少将忠直の配下が討取った真田左衛門佐幸村の首を見たいとの上意がありで西尾仁左衛門が茶臼山本陣へ（p503）持参した。　大御所は真田が生きている間は終に会う事がなく顔は分らない。首持参の西尾に向かって、其首の前歯が欠けているかと尋ね、口を開いて見て、欠けておりますと答えた。　仁左衛門に向かって、勝負はと尋ねられたが仁左衛門は答えられず平伏していると、良い首を取ったと上意があった。　仁左左衛門が立去った後で側衆へ、抵抗は無かった様だと上意があった。

次に野本右近が討取った御宿越前の首を御覧になり、　なんと御宿めは年寄になったものだとあり右近に向い、勝負はと尋ねられた。　右近は、御宿は天王寺で只一騎の乗付ましたが、馬の側に茜の羽織を着た歩行士二人を呼んで何か云いますと二人とも走り帰りました。　其後私の方を見て鎗を取、馬より下りましたので走り寄り鎗を突付けましたが手向かいしませんでしたと申上げた。　大御所より、良い手柄を挙げたと上意があった。　右近が御前を立去った後で側衆へ、　御宿めが若い時なら中々あの者等に首を取られる事は無かったと上意があった。

著者註　これは高木伊勢守から其時直接聞いた話であると丸毛五郎右衛門が私に語り書留た。

御宿勘兵衛は若い頃徳川家に奉公していたとの事

大御所は秀頼の自害した事を聞くと、乗物に乗り板倉内膳正だけをお供にして穏便に茶臼山を出た。　城内の焼跡を廻り京橋へ出て帰路の途中で、この様な大合戦の後は雨が降るものだと上意があったが、（p504）其日は晴天で中々雨の降りそうな様子もなかった。　ところが守口辺から南の大風と烈しい雨になり、お供中が苦労した。　漸く淀へ到着した時、与三右衛門がたいへん良く働き御供中へ雨具等を提供した。　それから二条城に到着したところ、大手の門番は還御の知らせなど無く、所司代からの指示も無いので門を開けない。　そこで板倉内膳が気付き父親の

伊賀守が預かる門から走り入り大手の門を開き大御所も帰城した。　将軍は翌九日に岡山を出発し、其日の夕方伏見城へ入った。

二条城へ越前の家老の両本多を召出して、今度大坂での先手は加賀筑前守（前田）へ命じたのに越前勢が夜の内に出軍して加賀勢を押抜いた事は如何なる理由か言上せよと云われた。この時本多伊豆守の答えは、　此方の家中に御上も御存知の吉田修理と云う大名並みの者が居り一万四千石を領知しています。　自分の人数もかなり持っており、その上組の侍も管理しております。　この修理がどの様な考えからか、去る六日の夜中に自身の部隊を纏めて城の方へ進撃しました。　これを家中の者達が知り、修理の配下に先を越されてはと我も我もと駆け出し、私共両人も心配になり後を追って出ました。　三河守（松平忠直）の旗本も残り様もなく出陣した次第で、家中の者全てが修理に続き茶臼山の近所迄出陣しました。　夜が明けてからの事は申上げる迄も無いかと存じます。

此事は後日に必ずお尋ねがあると思い、修理の考えを聞いて（p505）置かねばと私共両人は相談していました。　其日一戦の時、　修理の部隊が追崩した城方の者達が天満の方へ敗走するのを追討すると云い、　修理は天満川へ乗入れ其身は馬共に沈み落命しました。従って私共は何も聞いて居らず、たいへんな粗忽な事で恐れ入りますと申上げた。　其後は何の御尋もなかった。

其頃榊原遠江守の家老伊藤忠兵衛の倅采女と云う者から直訴があり、去る六日若江における一戦の時、木村長門の左翼木村主計の部隊が遠江守部隊に近いので家中の者皆が攻撃して討取ろうと云う思いでした。　しかし御旗本からの御検使藤田能登が私の親忠兵衛に向い

攻撃の間合いを見るので、　私（藤田）の指示があるまで一騎一人でも飛び出しては其方（忠兵衛）の落度になると堅く言付けました。　その為親忠兵衛も其旨を守り一人も出ぬ様下知して押留めている内に城兵は崩れて敗走しました。　家中の者達が一戦の機会を逸したのは偏に忠兵衛の下知が良くなかったからと結論つけました。　その為忠兵衛は立場を失い、翌七日天王寺一戦の時忠兵衛は多勢の敵中へ馳入り討死をしました。　この件を御吟味願いますとの事である。

そこで藤田能登及び願人の采女共に出頭する様とあり、　采女は漸く十六歳になった計りでありそこで藤田能登及び願人の采女共に出頭し藤田能登と対決した。　その結果主水に利があり能登は改易となった。

大坂に出陣した諸大名は京都へ上り、集った人々が二条城へ召されて大御所に御目見した時、着座の書付を持った目付衆が列座を案内した。　此時松平（p506）伊予守忠昌は上総国姉ヶ崎と云う所で一万石の身分なので表通りからは三番目程も後の方に着座していた。　そこへ大御所の出座があり皆へ夫々上意があった。　皆頭を下げている後ろで忠昌が頭を上げ、松平伊予守が此処に居りますと声高に申上げた。　大御所はそれを見て、其方は自身の手柄も立てたと感賞の上意があったとの事である

大坂方の落人長宗我部盛親の嫡子右衛門太夫、大野道犬等が生捕りとなり、秀頼公の嫡子国松丸は城中を免れたが伏見で誅殺された。
今度の大坂における戦いで幕府側が討取った総首数調査は伊東右馬助、永田善右衛門両名に命じられたが、一万三千五百三十余である。

この内岡山の先手である加賀（前田）利常の所が三千余、越前（松平）忠直の所が三千六百余
其外は省略する。

慶長廿年六月十六日、大御所は朝廷に参内した。　年号も当七月より元和元年と改められ
天下泰平の御代となった。

子や孫の為とばかりにしなしをく
稗ましりの落穂なれとも

享保十二（1727年）丁未歳冬至日　　大道寺知足軒（友山）
八十九歳で是を認める

落穂集第十五巻　終（完）

写本作成について
第一巻から第十二巻迄は天保三（1832年）十一月から天保四（1833年）四月迄時習館（熊本藩
藩校）の蔵書より写す。　第十二巻から最終十五巻迄は天保四四月廿八日から同五月十八日迄
横田氏家蔵本より益城下郡砥用郷柏川村山中（＊熊本県下益城郡砥用町）で写す。
中村万喜直道

現代文訳について
早稲田大学図書館蔵の前記中村直道写本に基づき、平成廿七年三月ー十二月訳す。
訳文中の（pxxx）は公開された同写本の見開写真ページ数を示す。

平成廿七年十二月二四日　　大船庵
高橋　駿雄